
幻影金魚

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻影金魚

【Nコード】

N7441D

【作者名】

takao

【あらすじ】

少女の身体が疼く時、赤い金魚が舞う――。小6の夏に起こった、誰にも言えない秘密の出来事。その日から不思議な幻覚を見るようになった高校生の女の子と、従兄の男の子の危うい恋の物語。思春期の恋心や性衝動、心のもやもやを金魚をモチーフに描いています。続編もブログで書きましたので、よろしければご覧ください。

第1話 はじまり（前書き）

ほかしていますが小学生の女の子の性描写（行為にはいたりません）が内容に含まれています。嫌悪感をもおよされる恐れのある方は、決して読まれないようにお願いします。

内容・構成・文章ともに少女漫画のような内容になっています。文章表現はラブコメやケータイ小説にしては固すぎ、文学には到底満たないライトなものという中途半端なものです、そういったものでもよろしければご覧くださいませ。

第1話 はじまり

それはあさが小学六年生の、酷く暑い夏休みのことだった。

八月のお盆前の蒸し暑い昼下がり。蝉の声がうるさく降り、風鈴の音が遠くから小さく響いている。庭では鬱蒼とした竹藪が、熱苦しそうに揺れていた。

古い湿った匂いがする祖母の家の、色が変わった畳の部屋で、十二歳のあさは金魚鉢に入った金魚を眺めていた。それは彼女が二つ年上の従兄の「せいちゃん」と去年の夏に近所の夏祭りで見つけたものだ

今日は家族も誰もおらず、といって夏休みの宿題もしたくなく、あさは退屈な気持ちでぼんやりと金魚を眺めていた。

小さな赤い可愛い金魚。名前はつけていない。二匹ひらひらと仲よさそうに、水の中で泳いでいる。

それを見た祖母は少女に言った。「せいちゃんとあさちゃんみたいだね」と。そのように笑って言ったことを、彼女は苦々しく思い出していた。

気がつけばその時、家の中はあさと「せいちゃん」の二人きりだった。

その時、誰かの気配を感じて彼女が振り向けば、そこには眼鏡を掛けた中学二年生にしては背の高い少年——「せいちゃん」が立っていた。

彼に何事か話しかける少女に、彼の手が唐突に伸びる。

『…………』

一瞬何が起きたのか、自分が何をされているのか分からず、彼女

は固まった。

気持ちいいとか悪いとか、何も感じなかった。
痛いと思うこともされなかった。それはほんの短い時間で、感覚はよく分からなかった。

ただあさは、少年の後ろに緋色の金魚の幻を見ていた。

それはひらひらと、赤く舞っていた。

その血のような色がとても綺麗だとぼんやり思っていた。

——その時、彼女は自分が「女」であることを知った。

.....

それから四年後の、もうすぐ夏を迎える梅雨の終わりのこと。

午後から雨が上がり、必要のなくなった傘を所在無さげに振り回しながら、高校生の少女が駅から家までの、川沿いの道をひとりで歩いていた。

……あー、またちらちらと、見える。

肩を少し越したくらいに黒くストレートの髪に、同世代の少女と比べるとややほっそりした手足。半袖の白いセーラー服を着た少女、あさは、目の前の赤い幻影を振り払うように、ふるふると軽く首を振った。

あさはあの夏の日から妙な幻を見るようになっていた。

「あのこと」が、余程ショックだったのか、彼女自身も分からないが、あの日から赤い金魚がひらひらと視界の中を泳ぐ飛ぶ幻を見るようになった。

実際、何の種類の「金魚」というわけでもない。ただその赤くひらひらとした動きを、あさはそう表現していた。

どうしてそのような幻を見るようになったのか不思議に思っているが、変人扱いされることが恐く、何よりその「きっかけ」を突き詰められることを恐れて、あさはこのことを誰にも言わなかった。その幻影は、別に彼女に何の害ももたらさなかったからだ。

——しかも、現れる時は決まっていた。

鼻につんとくる、すっぱい匂い。今日は生理の二日目であり、彼女は決して軽い方ではない。

その血の匂いに連動しているように、あさぎにはその幻影が見えるのだ。もしかしたらただ単に貧血で幻を見ているのかもしれないが。

あさは本調子でない不安定な身体の苛々からと、ゆらつく平衡感覚を取り戻すように、ぶらつかせていた傘をローファアの先でこつんと蹴った。

だが、彼女にそれが見えるのは生理の時だけではなかった。来る前のイライラしている時や、終わりがけの眠い時や、不意に身体が疼く時や、十四で覚えた自分を慰める汚らしい行為の際——など。

それは多分、あの四年前の夏の日からだろう。

自身の中の「女」を自覚させられたあの日に、全てのはじまりがある。あさはそう思っていた。

つまりこの幻影は、自分が性的な欲求——生理的なものも含めて——を感じた時に見えているのではないだろうか、と四年経った現在、あさはそう思い当たっていた。

しかしだからこそこの幻影が見えることが、誰にも言えないのであった。奥手なタイプの女の子であれば尚更、自分にそんな欲求があることを人に話せるわけがない。

第一、あの夏の日の話は誰にも言ってはならないことだとあさぎは思っていた。

「彼」にされたことの続き——「その行為」をどうやってするのか、その時はまだ知らなかったが、テレビや漫画などで得たおぼろげな知識はあったので、これは絶対に親には言ってはならないことだ、と子供心に思ったのだった。……だが、

ねずみ色の曇り空に、赤い金魚がひらひらと、呑気に踊る様子が少女の視界に映る。

こんな景色が見えるひとりきりの帰り道には、ついあの日のことを思い出してしまうのだ。

五月で十六歳になったあさぎだが、男の子と付き合ったことはまだない。ましてや、男性経験などもってのほか。

十六歳の少女らしく普通に服装や身だしなみに気は使っているが、必要以上に着飾ることに興味はない。またあらゆる能力も人並みで、特段目立つと言うこともなく、更には社交的でもないため、そうだったことには無縁な生活であった。

つまりあさぎにとっての性体験は、あのまだ幼い夏の日が最初であり、それ以降は皆無なのであった。人並みに興味はあるものの、それもほんの僅かに、触れられただけなのだが。だから逆に彼女にとってそれは少し恐かったことにも関わらず、嫌だと泣き叫ぶような想いをさせられたわけでもないの、かえって忘れられなくなってしまうたのであった。

「あの瞬間」が、あさぎの心に張り付いている。じんわりと、とれることのない染みのように。思い出すだけで、この身体が疼いてくる。

視界の中で金魚が飛び交い、少女は今日も二人だけの秘密に苛立

ちを感じる。

「せーしろーの、ばっかやろっ……」

あさぎは「せいちゃん」の名前を呟くと、傘で浅い水溜りをばし
やっとならぎにたがひつた。

第2話 いらだち

家に帰ったのは、夕方五時頃だった。中に入ると母親のやたら楽しそうな高い笑い声が聞こえてきた。

玄関にあつた見慣れない黒い男物の靴に、あさは来客が居間にいることを察し、直接二階へ行こうとすると――。

「あさぎー、帰ってきたのー？ お菓子あるよー、こっちおいでー。
セイシロウ清矢郎くんも来てるよー」

「……」

――げ、ほんとに！？ と思いながら、あさはぴくんと足を止めた。

「彼」――二つ年上の従兄の清矢郎――あの夏の日まで「せいちゃん」と呼んでいた男――のことを、丁度今の今まで考えていたのは、虫の知らせというやつかもしれない。

あさが彼の顔を見るのは、二ヶ月ぶりになる。高校は違うものの近くの場所であるので、入学して間もない頃に駅で見かけたのである。その前に会ったのは正月だった。

二人の祖母は二年前に亡くなり、会う機会はその頃より減っている。しかし互いの両親同士の仲がよいので、それでも縁が切れることはなくたまに会うこともあった。それ以前の問題で、会ってもあの夏の日から言葉など殆ど交わしていないのであるが。

しかし思春期の少女としては、他に男性経験がないことも手伝って、あのことと一緒にしょっちゅう思い返してしまう微妙な相手なのである。

――たまには顔くらい見てやるか、とあさは自分自身に言い訳

するように頷いた。それに変に意識していても、母親におかしく思われるかもしれないと考えた。

あさぎは軽く決心するとひとつ深呼吸をし、不自然に汗ばんでいる手で居間のドアを開けた。

ドアを開けるとソファの下で座卓を囲み、二人の人物が座っていた。あさぎに背中を向けて座っているウェーブのかかった長い茶髪の母親の対面には、地区内一の進学校の高校の制服——と言っても詰襟なので、夏服の今はただのシャツなのであるが——を着た、長身の眼鏡の少年が、でんつと座っていた。

あさぎにとって、「でんつ」というように見えるのは、彼が剣道をやっているからか、やたら背筋を伸ばした姿勢のよい座り方をしているからだろう。

六月で十八歳になるという青年に近くなりつつある少年に、あさぎはちらりと視線を遣ってみたが、彼はあさぎの方に眼も向けなければ眉ひとつ動かさない。

——確かに四年前のことは、少女にとってかなりの衝撃であった。

「せいちゃん」は無口で、仕事で忙しいお父さんお母さんの代わりに黙々と家の手伝いをする、しっかりした利口な少年だった。夏休みの宿題も早々と終わらせて、剣道の大会に備えて素振りしているような真面目な男の子だった。

その彼があんなことをするなんて、あさぎは子供心に想像もしなかったのだ。

そしてあの日の後は、あのようなことをしたのが嘘であるかのように、また朴訥とした「せいちゃん」に戻っていた。

二人の間であの日のことには、あれから一切触れることはない。彼も無かったことにしたいのか、あさぎとは眼も合わせなくなった。

そんな清矢郎の態度に、あさは苛々してくるのであった。

——このやろー、ヒトの純潔を奪っておいて……。

実際そこまでのことはされていないので語弊はあるが、あさぎにとつて女性特有の場所を、男に初めて触られたというショックingtonな出来事と事実には変わりない。

彼を睨んでいるうちに、あさぎの視界にはいつの間にか金魚が現れ始めた。はっと気付いたのは、また母親の声が聞こえたからだつた。

「何ぼんやり突っ立ってんの？ 挨拶くらいしなさいよー」

母親にあのことを知られるわけにはいかない。あさは渋々と、母親と清矢郎の間に座ることにした。

机の上には誰かからの土産か、有名菓子店の日頃お目にかからないケーキが箱に入って並んでいた。こつてりとしたクリームの乗ったそれを、既に母親が幾つか食べ、少年は手をつけてない様子が、皿の上のゴミの散らかり方で分かった。

しかし彼女もまだ精神的に幼く、成長期である。空腹も手伝い、美味しそうだなあと密かに思っけて眺めていた。

「今日お葬式があつたのよ。あんたは赤ちゃんの時しか会ってないから覚えてないでしょうけど、お母さんの叔父さんにあたる人。でも潔兄さんが海外出張でどうしてもお葬式行けないって言うから、代わりに試験終わった清矢郎くんが来てくれてね、」

ふーんなるほどそれで、学ランをこの蒸し暑いのに持ってきたわけね、ってケーキ食べていいかなあ、とあさは母親の話は耳半分に聞き、とにかく隣の清矢郎との微妙な空気が息苦しく、そこから逃れるように視線を綺麗なケーキに注いでいた。

しかし母親の話はまだ続く。

「それがまた清矢郎くん、しっかり挨拶もして、アンタと同じ高校生とは思えなかったわよ。さっきもね……」

あさぎの母親は子供の頃から、清矢郎びいきだった。彼のことは褒めちぎり、冗談でも折につけて、「お嫁さんにしてもらったら？」と、彼女も小さい頃は言われたものであった。

男の子供がいないのもあり、母親も悪気はないのだろうが、どうせ私は……と取り立てて自慢出来るところのないあさぎは密かに劣等感も抱いたものだった。実際あの日までは、彼は尊敬できる年上の従兄であった。

それにしてもこの微妙な空気は嫌なもので、彼と比較されるのも面白くない。そう思い、あさぎは現実逃避に遂にケーキに手を伸ばしたのだが、

「ってアンタはお行儀悪い!!」

お皿を持ってくるのが面倒で、小さなものであったためそのまま指で持って頬張ると、更に母親に叱られた。母親はよく喋るし明るいし若作りだし、一見軽いが意外と几帳面で、口うるさい。

しかしケーキは既に口の中だ。もうこのまま食べてしまおう、とあさぎが頬張った後に指についたクリームをぺろりと舐めれば、更に母親からの小言が降る。

その時、隣からふつと笑うような声が聞こえてきて、あさぎは思わず清矢郎の方に顔を向けた。

しかし顔を上げる頃には、もう隣の少年は元の無表情に戻り、あさぎの方には僅かたりとも視線を向けずに、片手で茶碗を持ち緑茶をずずつと口にしたところだった。

……かわいくないなあ……。……

その態度にあさは少しかちんと来る。

この五十センチの距離にいるというのに、完全無視のこの態度。私にあんなことをしたというのに、この態度！ああもうむかつくくらいにするー！！と口に出せないの心の中で虚しく叫ぶしかない。

そう言えば、前に駅で会った時も正月に会った時も、その前のお盆に会った時も、その前の年も……同じ事を思っては苛々したなど、いつもこの繰り返しであることを思い出し、あさは段々悔しくなってきた。

しかしこうした怒りも、顔にも声にも出してはならないのである。せめて清矢郎と口がきけたらいくらでも文句を言ってやれるのだが、あのことは向こうもなかったことにしたいだろうし、何から話せばいいのかまず分からない。

互いの両親はいい加減なところもあるので、滅多に会わない年頃の男女だし会話がないくらい、特に不思議にも思わないようだった。

結局、折角のケーキの味は、彼女には全く分からなかった。

その十五分後……。あさぎにとって居心地の悪い空間は終わりを告げた。

二人の通っている高校は近所でも、住んでいる市は違うので、清矢郎はあさぎの母親が送っていくことになった。そして母親が部屋を出て行ったそのほんの僅かな間、あさは彼と部屋に二人きりにされてしまった。

落ち着かなくてテーブルの上のケーキや皿をそわそわと片付け始めたあさぎだが、そうするとおのずと清矢郎の視界に自分が入ってしまうので、それはそれで気まずいものを感じていた。

しかしすぐに彼も立ち上がったので、あさぎは内心、ほーっと大きなため息をつく。

なのに、何故か気になってその後ろ姿を眼で追いかけてしまった。

——それにしても、背、高いなあ……。

彼女の父親の身長が彼女よりも少し高いだけなので、あさぎには余計にそう感じる。

「あの時」よりも更に大きくなっている彼。いつの間に、何を食べてこんなになてかくなったんだ——などと二つの年の差を感じながら、あさぎがぼんやりとその広くなった背中を眺めていると、部屋から出る際に清矢郎はふとその視線に気付いたように、彼女を振り返った。

不意に眼鏡の奥の眼と自分の眼が合ってしまった、あさぎはどきりとさせられた。

その瞬間、電流が走ったように、少女の身体の芯が疼き出す。

そして現れたのは、やはり無数の赤い金魚の幻影だった。それは少女の心を覆う、呪縛のような――。

しかしそれは、ほんの数秒の沈黙だった。

やがて、あさぎが凝視していたその唇から低い声が発された。

「——ついでる」

「え？」

「ほっぺ」

そしてドアはボタンと閉められた。

あさぎが思わず背後の鏡を見ると、そこにはさっき拭いたのとは

反対の頬に、クリームがまだしっかりとついていて、情けない顔の自分が居た……。

「~~~~っ!!!!」

……やっぱり、かわいくない！　っていうか寧ろ、私がださーっっ!!!

こんな間抜けな顔で、彼と見つめ合ってしまい、あの言いようない感覚を味わっていたと思うと、恥ずかしくてやりきれない。

あさは真っ赤な顔をして、八つ当たりのようにソファに拳を打ちつけた。

第3話　ひとりで

暗闇の中、少女は膝を抱いて思う。

——このイライラは、なんなんだろう。

あさぎは中学三年生の頃、地区で一番成績のよい高校を受けたかったが、成績が足りなくて二番目の高校を受け、今の高校に入学した。おかげで成績は悪くないものの、かといって主席というわけでもない。

また、特に何か能力に秀でていることもないので、部活で才能を発揮ということもない。

普通に身だしなみには気を使っではいるが、地味なほうだから「モテる」ということはなく、女子の友達はそれなりにいるが、男子との個人的なやりとりはしていない。

文芸部に友達と入ったものの、本を少し読む程度だから、先輩のように人目を引く文章も書けず、表現する言葉自体が思いつかずにもどかしい思いをしている。

——なんだか、自分は、つまらない人間だ。

そんなことを思いながら、あさぎがその暗闇の中、ベッドの上に身体を横たえれば金魚が舞い出す。

そしてその幻影と同時に、こんな自分がたった一度だけ、「女」扱いされたあの日のことを思い出す。

あさぎにとって「あの時」はただ驚き、嬉しくなど感じられなかった。しかしあの日あった出来事は、こんな風に自分の居場所が見つからない気分の時に思い出せば、あの時、確かに自分はそこに存在していた、そこに生きていたのだと——大げさであるが、そんな風にすら感じるのだった。

あの日されたことが、もし自分の身体を傷つけられたり、人格を否定するような乱暴な行為であれば、あさはこんな気分にはならなかっただろう。微かに触れられただけ、時間にしてもほんの少しのまるで夢のような、子供の戯れであった。

しかしただの「雌」としてでも、「あさは」という存在を求められたこと——それは、「私はここにいるよ」ともどかしく思う思春期の少女にとっては、そんな行為であっても、自分がここに存在している証にさえ思えるものであった。

未知の性行為に憧れる理由はそういった深層心理もあるのかもしれないなかった。

しかしだからと言って、誰もいいわけでもない、ともあさは思っている。

あれが変な中年男であれば気持ち悪く、恐怖に凍りつき、もつと傷ついていた。——よく知った「彼」だったから、まだよかった……のかもしれない、とあさはなんとなくそう感じていた。

またいくら興味があっても携帯電話で出会い系サイトにアクセスしてまで、そういうことをしてくれる人を探そうなどとは考えなかった。

それこそあの意外に厳しい母親に携帯電話の使い方はよくちくりと言われているし、そんなことが知られればどんな恐ろしい雷を食らうか分からない。それにその日会ったばかりの人間とそんな関係になり、妊娠したあの病気になったのという話を聞けば、余計にそんな危険な方法で己の性欲を満たそうとは思えなかった。

第一、少女が本当に満たしたいのは、性欲だけではない。

心にぽっかり穴が開いているような感覚に、「私」が此処に居る証が欲しいと、あさぎの心が叫んでいる。

誰かに必要としてもらいたい、受け入れられたい。

それなのに、あの初めて誰かに求められた日の相手——二つ年上の従兄の少年・清矢郎は、あさぎをその場に居ないように扱うのだ。あの日のことを無かったことにしたいかのように。

その切なさ益々彼女から自信を奪い、苛々する気持ちを増幅させていた。

——嗚呼、このイライラを、今すぐ解消したい——。

真っ赤な金魚が舞っているのは、欲求不満の証だとあさぎにもなんとなく分かつている。その社会や周囲に対する欲求は、今のちっぽけな自分の力では満たせない。

ではどうすれば、それを今すぐ満たせるかと言えば、誰にも迷惑掛けず、ひとりで、昇華するしかない、という結論に達するのであった。

そして少女はこのもやもやする気持ちを、逸る心を忘れられる「あの毒」を、今宵も求めた。

布団の中、あさぎは己の細い指をパジャマのズボンの中に入れ、下着の上からそっと己に触れた。二年前に初めてこの行為を覚えた時は、こんなことはしてはいけないと罪悪感を抱いていた彼女だが、いつの間にか身体がそれを好いものとして覚えてしまった。

そんな難しいことを考えていても、結局、本能に溺れるのだ。それに気持ちよくなっている内は、嫌なことも全部吹き飛んで、身体が悦びに震えることが出来るからだ。

それは少女が知ってしまった禁断の甘い毒の味——何度も何度も飽くことなく味わいたくなる、「快楽」というものだった。

触れているうちに気分が高まり、その芯に直接触れるよう指を伸ばした。そうしているうちに、頭の中のぐちゃぐちゃも混ぜられ、脳が溶かされていく。

「……っ、」

あさぎは暗い部屋の中、隣の部屋の姉に、階下の両親に聞こえないよう荒くなる息を潜め、声を殺す。

少女が「これ」をする時に、いつも思い描くのはあの夏の日の光景だった。

血の色の赤い金魚が増えていく。眼を閉じても真っ赤に視界を覆いつくす。

なのに、ここ一年ほどは——そう、特にこの前のように「彼」に会った後などは——、「その最中」に思い描くことが、あの夏の日のことだけじゃなくなってきたのだった。

少女の思い描く緋色の幻影の中に、いつしか浮かぶようになったのは、ひとりの人影。

ずっとあの夏のままだった幼い幻に、いつの間にか男性らしくなったその逞しい身体が上書きされている——。

嗚呼、気分が高じる。滅茶苦茶にされなくなる。

何も考えられない。考えているのはただひとつ。

ただ、ひとりのこと。

——こんなの、おかしいよ。私は異常なの……！？

そう思うのに少女のその手は狂ったように止まらない。止められない。更に、更に、高みを求め、忙しく動く。

理性や倫理感と裏腹に、自暴自棄のように淫らな自分の本性が暴れ出す。

——もう、狂っていても構わない。もう、叫んでしまいたいくらい、キモチよくて、たまらない——。

絶頂へと高まりゆく気分の中で、赤い金魚は狂喜乱舞し、そのただひとりの人物の幻影は自分の心を切り裂かんばかりに色濃くなり、終には「その名」を声に出して叫び出したく――。

そして、全ては今宵も砕け散る。

「……つく――！」

くぐもった呻きと動物的な荒い息、そして衝動的に叫びそうになった「その名」を、あさは唇を噛んで堪えながら――やがて、ふう、と身体のを抜いた。

――虚しいな……ばつかみたい。

終わるといつも、こんな風に馬鹿らしい気分になるのに、沸き起こるイライラと衝動を抑えるために、あさはついいつもこんなことをしてしまうのであった。しかも、口も利いてもらえない男の幻で、妄想しながら。

重く気の抜けた身体をしばし横たえていたあさぎであったが、やがて思い出したように下着の中から己の指を抜いた。

思わず顔に近づけると、苦い、匂いがした。終わりがけであるが、生理の血の、匂いだった。

こんな日にまでこんな汚らしいことをする自分に更に嫌悪感を抱き、少女は大きなため息をついて、手を洗うためベッドから降りた。

第4話 もやもや

私って、おかしいのかな……、と午後の余り好きではない教科の授業中、シャープペンシルをカチカチと押しながら、あさはそんなことを考えていた。

それでも友達と話しているうちは、彼女もまだ自身の存在を感じられていた。時々自分の経験のなさに恥ずかしくなり、相手がうらやましくなる劣等感を抱くものの、それでもあさを受け入れてくれる優しい友達には恵まれていた。勿論、こんなに汚い心の内は見せてはいないものの。

そんなあさぎの放課後は部室や、それが無い日はクラスの友達と遊んで過ごしている。

アルバイトをすることも少し考えたが、母親は別に必要もないから進学校なんだし勉強しろと言う。それに中学を卒業してまだ三ヶ月、少女は周りの様子を伺っている最中だった。

本日の放課後は、部活に向かった。もっとおたくっぽい人が多いかと予想していた文芸部は、綺麗な女性の上級生が多い、意外と居心地のよい部である。

男の先輩も若干いるが、ゲームや歴史などに詳しくそういったコラムを書く人たちで、どちらにも詳しくないあさは彼らと話をすることは少なかった。

しかしたとえば、あさぎと一緒に入部した宮坂夕映^{ユヱ}という女の子などは——あさぎと違って大人びた少女なのに、何故かすぐに仲良くなったのだが——、本から雑誌から大量に書籍を読むことが趣味であり、そのうえ社交的だから口下手なあさぎでも、運動部の格好いい男子でも、そういったコアな趣味の男子でも、誰とでも話の合う引き出しの多い少女だ。

今日の部室は上級生の男子中心に、夕映も混じってあさぎには聞いたことのないゲームの話で盛り上がっている。もちろん、そういう話題でない日もあるのだが、そうなるにあさぎにはお手上げであるので、することもなくトイレに立った。

部室を出て……といっても人数の少ない部なので、国語準備室の隣の書庫で、大きなテーブルを囲んでいるだけのことなのだが。

戻ってきたあさぎはまだ盛り上がっている部室には戻らず、手前の国語準備室に立ち寄り、こんなところで競馬新聞などを広げている無精髭を生やした三十路教師に近づいた。

「そんなの読んでいいんですかー？」

「んー。そんなじゃ内緒にしといてー」

その国語教師……一応文芸部の顧問である荒芝に声を掛けると、あさぎはその横にあった、使われていない事務机の椅子に座った。

正直あさぎは、同世代の男の子が苦手だった。中学の時に会話に失敗して怒らせてしまったことが、トラウマになっているのだ。それ以来、同級生の男子にはとても気を使うようになった。

だから男女年齢関係なく、気を使わずに誰とでも自然に話が出る夕映が、あさぎには本当に羨ましかった。

逆にこれくらい年上の男だと寛容なので、多少の発言は気にされない。だからこちらも、気を使わずに話をする事が出来るのであった。そう思うにあさぎは年上好みなのかもしれないと思ったが、とりあえずこの三十路教師にそうした感情は持っていなかった。

それを証拠に、この教師の前ではあさぎに金魚は見えなかった。だからこそ彼のことは意識せず、気楽に話せるのだらう。

内緒にしておいてと言いつつ、他の教師のいない国語準備室で堂々とそんなものを広げる荒芝は、その自堕落ぶりとくだけた話し方

から、変わっているというだけでなく女生徒に手を出しているという噂すらある。

真偽のほどは分からないが、高校生の気を引く下ネタ交じりの授業をし、それでも要点を押さえて教えることの出来るこの頭のよい男は、同じくちよつと「変わった」子と評されがちなあさぎは、嫌いではなかった。

「次の部誌の原稿、何書こう」

あさぎは足をぶらぶらさせながらそう言った。

ほんと、誰とでも——もう口もきけないあの人とでも——こんな風に話せたらいいのにな、と思いながら。

「なんか適当に思いつくもの書きゃいいじゃねえか」

自分は言語学専門だったと豪語する荒芝は、部誌の内容には一切関知してこない。読んでいるのかも怪しいが、好きにやらせてくれるので、口うるさい教師よりはよいと部員たちも彼については文句も期待もない。

「思いつくものか……」

あさぎもほんの暇つぶしでこの男と話していたが、言われてみてふと思いついた。

「金魚……とか？」

あさぎが想像したものは、いつも己の心の中を泳いでいる、赤いひらひらした金魚であった。

自分にしかないものを書けばいいと、先輩たちは言う。残念ながらあさぎには今、「それ」しかなかった。それはもしかしたら汚いものの象徴かもしれないが、ある意味最も彼女らしい、彼女だけの想像の産物と言えた。

「いいんじゃない？ 女の子はそういうのが好きだなー」

荒芝はそう言って笑うと、意外と几帳面に競馬新聞を畳んだ。

自分にしか見えない金魚を、軽くモチーフ的なものとしてとらえられ、あさは少々むっとしたが、あのようなが幻覚が見えるなどという話をして仕方がないので押し黙った。

だが確かに、あの金魚をどうという言葉で表現出来るのか、試してみるの面白いかも思わないとも思った。

退屈な毎日の中で、醜い自分の心が見せる幻覚に苛立ちを感じていたが、そういう目で見たらまた見方も変わるかもしれない。そう思うと、あさは少しだけ元気になった。

・・・・・・・・

夕映とは同じ電車で通学しているが、今日は迎えに来た彼女の兄の車でバイト先へと直行していった。あさは午後六時発の電車を目指し、初夏の明るい夕方の道を一人で歩いている。

「金魚の詩は出来たかい」

すると突然、追い抜きざまに男に声を掛けられた。

「まだですよー」

少し驚いたが、それが荒芝と分かるとあさはわざとらしくため息をついた。

電車の時間はまだまだあるし、あさは歩くのが遅い。その間に後ろから追いつかれたらしい。

「先生、車で通ってるんじゃないの？」

「今日は飲み会」

保健室に行ったら彼が二日酔いで寝ていたという話もあさは噂で聞いたことがある。よく教育委員会に怒られないものだと思うが、本当に女生徒に手を出しているとは限らないし、この不良中年はぎ

りぎりのラインを綱渡りしているのかもしれない。それはさておき、あさぎは話を戻す。

「つて、なんで詩って決め付けるんですか」

「お前さん、文章殆ど書いたことないだろ」

「……」

彼は部誌など読んでいないとあさぎも思っていたのに、意外と鋭いことを言つてのける。

ちなみに文芸部にはきちんとした文章を書く部員もいるが、ケータイ小説のようなものや雑多な詩のような内容を書く部員の方が断然多かった。

「まあ、一回書いてみなつて。ちつたあスツキリするかもよ」

そう言つて笑う荒芝を、あさぎは見上げた。

その含みのある言い方が気になったが、やはり腐つても教師だ。多くの子供たちを見てきた彼ならば、こんな自分からも何かを感じているのかもしれないとあさぎは思った。

「……はい」

少し間を置いてあさぎがそう言つと、一瞬まじまじと彼女を見た後、荒芝はまた笑い出した。

「なんですか？」

「いや意外に素直で可愛いなあと」

「……」

成程、この男がタラシだと言われるのも頷けるな、と男性に「可愛い」などと言われたことがないあさぎは少し警戒したように眉を顰めて彼を見た。

「先生、それはセクハラです」

「そっか。そりゃ悪かった」

荒芝は反省していないようにまた笑った。変人とは言われている

彼だが、意外と派手な女生徒と話が合っている様なところもあり、本当に騙される女もいるかもしれない……とあさはまた彼を警戒すると横目で見た。

いつの間にか駅に着いていた二人が、まだ電車も来ないので切符売り場と改札の間で、そんな風に軽口を叩き合っていると――、

「おう、久しぶりだな」

誰かが荒芝に頭を下げたのか、彼はひょいと手を上げた。そしてその人物は、二人に近づいてきたのだが、

「……げ」

あさは思い切り相手に失礼な声を出した。

なんで、此処に、と思うが以前駅で偶然会った時も、確かこの時間であったことを少女は思い出す。三年生で部活も引退するから今までのように遅くならず、この最も人が利用する時間に帰っていくのだろう。だから可能性としてはあり得るのだが――。

あさぎの困惑が伝わったのか、

「俺、おとしまで北高にいたからさ」

とあっさり荒芝は言うのと、

「益々でっかくなっただなー、加納は」

数センチだが自分よりも背が高くなってしまった少年に悔しそうな笑顔を向けて、ポケットから煙草を取り出した。

「……お久しぶりです」

荒芝の隣にいるあさぎの方は相変わらず其処に居ないかのように一切見ず、近所の地区一番の進学校の制服を着た眼鏡の少年――あの金魚の幻を見せるきっかけとなった、あさぎの従兄の少年――加納清矢郎は、無愛想に荒芝に会釈した。

第5話 気まずいふたり

あさぎと荒芝の前に立つ、清矢郎。短く言葉を交わす男二人を、ひとり気まづくなっているあさぎはちらりと見る。

この時、この場を去っていればよかった、と少女は後から後悔するのが、しかし今は、どうしてか足が動かなかった。

当たり前だが、あさぎが知っているのは「家」での清矢郎だけだ。しかも昔の姿しか知らない。

目の前に居るのは、「北高の三年生の先輩」である彼だった。その相手から紡がれる言葉をどこか新鮮に感じながら、あさぎはただ立ち尽くしていた。

しかしやがて、そんな呑気なことも言っていられなくなる。

やはり彼は明らかにあさぎを無視している。こんな目の前にいるのに、決してこちらを見ないのが気に入らない。

——四頭身……じゃなかった四親等？なのに……！

笑わなくとも赤の他人には関心を向け、血の繋がりのある自分を無視するとは、あんなことしておいて！と、再び怒りがふつふつと沸いてきたあさぎは、思わず睨みつけるように恨みがましい視線を清矢郎に送っていたが、その不穏なオーラに荒芝の方が先に気付いた。

彼は自分の視線に気付かない少女をちらりと見下ろし、そして彼女が視線を送っている元教え子の方に視線を戻した。

荒芝は啞えていた煙草を携帯灰皿でかき消しながら、ふむ、と言うように頷くと、

「じゃ、俺、電車の時間だから」

と清矢郎に片手を上げ、突如として二人の前から立ち去ってしまった。

——え！？　ちよつとっ！！

清矢郎に集中する余り、荒芝の視線には気付かなかったあさぎは、彼の突然の行動に驚き、声を出す間もなく清矢郎と二人でその場に取残されてしまった。

「……」

気まずい空気が二人の間に流れる。

誰か他の人がいて無視されている時は腹が立って彼を見てしまうものの、二人きりになればそういうわけにもいかない。

あさぎは俯いて靴の先と、駅の汚れた茶色いタイルを見つめていた。

さつき先生と話してた時に、行っちゃえばよかった、とあさぎは後悔した。けどあの時は、どうしても足が動かなかったのだった。自分に一度でいい、視線を向けてもらうまでは——、と躍起になっていた。

俯いているのであさぎには清矢郎が、今何処を見ているのか分からない。

こちらを見て欲しかった筈なのに、気まずい今は早く何処かへ行って欲しいという矛盾した気持ちを感じていた。だが自分が動く気にはならなかった。何かを待っているように、佇んでいた。

あさぎは携帯電話を空々しく取り出して、時間を確認する。あと二十分もあった。

二人が無言で向き合っていたのはほんの短い時間であったが、やがて神経を尖らせていたあさぎの耳に、相手が小さくため息をついたような音が聞こえた。

——このまま、帰っちゃうかな？ そうだよな……。

そう思った瞬間、自分でもよく分からない切なさがこみ上げて、あさぎは思わず相手を見上げてしまった。その時、

「……仲いいのか？」

「え？」

「荒芝さんと」

見上げたその先の視線はあさぎを見ておらず、駅の時計を見ているような遠い眼をしていたが、しばらく間を置いてから今の質問が自分に関心を置いたものであることに、彼女はようやく気が付いた。

「い、いやいやいや、全然！ ただの部活の顧問の先生だしっ」

あさぎは妙にうるたえながら、肩を越す黒髪を乱し、ぶんぶんと音がしそうなほど首を振るとそれを完全否定した。

「ふーん……何部？」

「え？ ぶ、文芸部……」

な、なんだ急に？ 会話になってる？ 会話になってる！ とあさぎは内心パニックになりながら、落ち着いた声の少年にひっくり返った声で答えていた。

だが体育会系剣道部の彼に、一歩間違えればオタク集団と勘違いされる文芸部の名前を言うのは少し恥ずかしかったが、清矢郎はそこは気にしていないようにまた「ふーん」と呟き、「俺も顧問やつてもらってたから」と付け足した。

「剣道部の？」

あのやる気のない男からは想像がつかないが、あさぎの問いに清矢郎は相変わらず遠くを見たまま頷いた。

そしてまさか荒芝に彼との共通点を見い出すとは思わなかったあさぎは、不思議な感じがしていた。そう思っただけで清矢郎を見上げていたのだが、

「あの人も悪い人じゃねーけど……気をつけるよ」

「はい??」

続けて吐き出された彼の言葉に、あさは更にひっくり返ったような大声で聞き返してしまった。清矢郎の口から意外なことを言われたからであった。

だがまあ、あの軽そうな男のこと、北高でもそういう噂があったのかもしれないな、とあさぎも納得しなくてもなかった。だが……。

「だい、じょうぶだよ……年も離れてるし、私なんかそんなこと考えると思えないし——」

あの教師が本当にそういうことをするのか、噂の真相は分からないが、少なくとももしも誘われたとしても、あさぎにはそのつもりはなかったし、これは女の勘、というのだろうか、彼は自分のことを「そういう眼」では見ていないだろうと彼女は思っていた。

それは彼女が大人っぽくも美人でもなければ、胸が大きいとか色っぽいわけでもないと自覚しているのもあるが、二人きりになっても金魚が飛ぶような空気になったことがない——というのが、あさぎがそう断言できる一番の理由だった。

そう思っていた少女の耳に、清矢郎のどこか苦々しそうな声が入った。

「まあ、分かんけどな……男なん……」

そこまで言って、彼は思わず口を噤み、思わずその口を大きな手で覆った。

「……………」

——「失言」、という言葉が二人の心に共通して思い浮かぶ。

……男なんて、信用ならないことは、「せいちゃん」で身をもつて知ってるけど……。

あさぎは少しだけ呆れたような、恥ずかしいような複雑な表情で

清矢郎を見た。

当人は表情を変えないようにしているが、失言したという自覚はあるのだろ。更に空々しく雑踏の方へと眼鏡越しの視線を泳がせている。

そもそも言葉を失った辺りで、それはあさぎにも見て取れた。

——でも……覚えてたんだ……。

そう思った途端、あさぎの心は恥ずかしさやよくわからない感情で、じんわりとしてきた。胸騒ぎのように、そわそわする。

そして二人の間に、金魚が舞い出した。初夏の夕暮れの空に赤い金魚が浮かんでいる。

きつと本当は少し前から泳ぎ始めていたのかもしれない。彼と久しぶりに話せたことに、あさぎが夢中で気が付かなかっただけで。

その時、駅のホームに列車が入ってくるアナウンスが鳴った。あさぎは思わずどきりとするが、それは自分の乗る電車ではなかったようだ。それでももうあまり時間もない。

「電車、来ちゃうから……」

あさぎはそう言つと、まるでその金魚に懷かれているようにすら見える清矢郎を今一度見上げた。

「……叔母さんによろしく」

清矢郎はやはりあさぎの眼を見ないままそうぼそりと呟くと、あさぎよりも先に踵を返して歩き出し、自動改札口を通って雑踏の中へと消えていった。彼とは乗る駅は同じでも、帰る方向は逆なのであった。

広い背中が消えていくと同時に、赤い金魚も一緒に消えていった。いつの間にか手がとても汗ばんでいたことに、あさぎはようやく気が付いた。

第6話 たゆたうココロ

この時間の電車を利用して帰ることが、あさぎは最も多い。母親が仕事をしているので、彼女も家事の一部を担っている。学費を出してもらって高校に通っている身分としては、夕飯の支度が出る時間には帰るようにならなければならなかった。

夏至を過ぎた七月に入る頃。夕方六時の風景は、夕暮れのオレンジ色の光と紫色の影に染まっている。

流れるそれを電車の窓越しにぼんやりと眺めながら、あさぎは水の中にたゆたうように浮ついた気持ちになっていた。

—— なんだか、久々に、しゃべっちゃったなあ……と、先ほどの出来事を少女は何度も胸の中で反芻する。

彼から話しかけられたことには、あさぎは驚いた。このまま永久に無視されるものだと思っていたほどののだ。ただ、眼は合わないから嫌われていないとは言いい切れないものの……。

それでも何故か、交わした言葉のひとつひとつ、相手のちょっとした仕草、家では見られない「外」の先輩としての顔、頭から足の先までのその均整のとれた体——のパーツを、少女はひとつひとつ思い出し心の中で丁寧に組み立てては、あえて胸を泡立たせてしまふ。

彼もあの日のことを忘れていなかったという事実は、あさぎには少々恥ずかしかったが、安堵もした。

声が聞け、一瞬でも自分に注意を向けてくれた、ただそれだけのことが、あさぎには嬉しかった。そう思うことで少女の心が、温かく甘いもので満たされていく。

あの出来事を覚えていてくれたということは、恥ずかしくともあの日「自分」が其処に居たことを、認めてもらっているということ

なのだ。だからきつと、嬉しいのだ。

あさぎはそう思おうとした。

だがそれだけでは終わらず、少女の胸にはその思いから濃い陰影が伸び、焦げ付くように消えない。夕暮れの中、電車の窓の外を金魚がひらひら泳いでいる。

それを見たあさぎは、今度は不安になってくる。

——どうして金魚消えないのか？ 彼は帰ったのに。

また夜も現れるのだろうか。そうしたらきつとまた彼を思い出して、「して」しまうのに——。

あさぎが中学生の時も、あの夏のことと彼のことは気になってはいたが、会わなければ会わないで忘れていられた。数ヶ月に一度、会って思い出しては苛々していた。

しかし彼女が高校生になり、前よりも色々なことが見えてきて、色々なことにジレンマを覚えるようになったからか、更に酷くなった気がするのだった。清矢郎への、苛立ちが。

そうした折に、こうして家以外の場所で会ってしまった。十六になった少女が、十八になった少年に。

そしてそのことが、あさぎにとってやけに新鮮に感じたのだった。まるで「知らない男の人」のように、妙に彼を「男性」として意識してしまう。

少女はこつんと電車の壁に身を凭せ掛けて、ほんのりと想う。

どうしてよいのか分からないが、もっと話したかった。自分をちゃんと見て欲しかった。

いざそうされたら、どうすればいいのかもつと分からないのだが……。

目の前を泳ぐ金魚に、あさぎは首を振る。もう泳ぐな、と言うよ

うに。

彼のことを忘れていたいのに。金魚が現れればどうしてもあの日のことを思い出して、彼のことを考えてしまうのだ。

あさぎのこの未確認な感情には、まだ名前がついていない。それをどう呼んでいいのか、彼女自身にも分からないからだ。だが少女には「それ」に気付いたらきつと、最後のような気がしていた。きつともう引き返せなくなるのだろう、と予感がしていた。

あの夏の日の先へと——足を踏み入れてしまうのではないか。

心よりも思考よりも先に、「身体」がこれだけ反応しているのだ。そう、それは、少女に緋色の幻覚を見せるほどに。

——考えたくない、とあさぎはぎゅっと目を閉じる。

だが今日聞いたあの声を、もう一度繰り返す波のように思い出す。それが弾ける感覚が、認めたくないと思う心に反してやけに心地よくて、少女は何度も思い描いてしまう。

相手が血の繋がった、しかも自分にいけないことをした相手にも関わらず……。

己の浅ましさに、あさぎは切ないため息をついた。

.....

しかし、自分でもよくわからない高揚感のままに、その夜もあさぎはいけない行為をしてしまった。

きつと「彼」の記憶がまだ鮮明だからだ、そしてほんの少しだけど嬉しかったからだ、と少女は自分に対して言い訳するように言い聞かせていた。しかし相手はやっぱり虚しい幻影にしか過ぎないのだが。

あさはきは終わった後の熱い息を、暗い部屋で大きく吐き出す。生理が終わったから、久々に思い切り脱いでやってしまった。終わった後、異常なまでに興奮していた自分が益々恥ずかしく情けなくなるというのに。

それでも何故か、今日は前向きな気持ちになれた。

あさは甘美な気持ちを切り替え、下着をつけ服を着た後、台所で麦茶を飲んでとりあえず心を落ち着けた。そしてまた部屋に戻り、ノートを開く。

荒芝と先日話した文芸部の部誌の原稿の下書きをするためだ。

ケータイ小説のように携帯電話に保存しようかと思ったが、今日は鉛筆で書きたい気分だったのだ。少女は心に浮かぶ言葉を、拙いながらぽつりぽつりと紙に落とす。

不安と苛々には変わりないものの、それでも今夜は目の前の金魚と共存できるような気がしていた。

・・・・・・・・

自分でもよく分からない感情を持て余していたあさがであったが、いつものとおりこんな風になってしまっても、しばらく会わなければ彼のことなど忘れられると思っていた。しかし――。

数日後、部活の時間に、

「この前、駅で山本さんが北高のカッコイイ人と話してるの見たんだけど」

と皆のいる前で突然、秀麗眉目な二年生の女部長に話を振られ、ぎくりとさせられた。

隣に座っていた友人の夕映も「何何？」と興味津々にあさに擦

り寄ってくる。あさぎは彼女にもまだ己の恋愛の話、ましてや清矢郎との過去の話などしていないからだ。

…… かつこいい、かどうかは知らないが、清矢郎は見目は悪くない少年だ。遠目に見れば背も高いし、尚更そう見えたのかな、と思
いあさぎは彼女の話聞いていたが、

「いいなー、私にも紹介して欲しいなー」

彼氏と別れたばかりというその美人部長が羨ましがるのは更に驚かされた。

今まで自分がそんな風に、「女」として話題の中心になることがなかったからだ。

だからあさぎは、気恥ずかしいような嬉しいような、しかし悪いことをしているような気分になってしまう。何故なら、相手はただの従兄であるうえに、それを想像してよからぬことをしているのだから……。

「その人がなんだってー？」

今日の部室は女子生徒ばかりで占めているので、こんな話題に花が咲く。

夕映はそう言うと、あさぎの後ろから押し掛かるように抱きついた。彼女はこんな風に、気軽にスキンシップを誰にでもしてくる。女の子らしい甘い匂いが、ふわりと漂う。

その質問に部長や他の同級生もあさぎに視線を集めた。

…… や、やめてええ、とあさぎは内心焦り出す。

こんな地味な自分が話の中心になるのは嬉しいと言えば嬉しいが、かと言って赤裸々に説明できる関係の相手でもない。

正直に無難にただの従兄だと答えればいいのだが、そう口を開こうとして——あさぎの中のもうひとりの「あさぎ」が、その言葉を噤ませた。

——彼は私の、「何」なの——？

少女の中の二人の少女が鬨ぎ合つて、彼女から一瞬言葉を奪つたその時、

「ちよいとき、暇なら一年のやつら手伝つてくんない？」

突然隣の国語準備室との間のドアが開き、荒芝がのっそりと顔を出した。

荒芝以外の国語教師はこの準備室には常時おらず、職員室の方にいる。残つた荒芝も、生徒たちの会話は完全に無視しているので、文芸部員も好き放題雑談をしているのだった。しかしこの内容ならば「暇」と言われても文句は言えない。

「山本と宮坂でいい。お前さんらのクラスの分だし」

荒芝はかつたるい、と言う様にあさぎと夕映を手招きした。

第7話 竹と金魚

「悪いな」

「いえいえ」

国語準備室にて。荒芝に呼ばれたあさぎは新しく届いた国語便覧に訂正版のシール貼りをするといいた作業をしていた。

別に部活といっても大したことはしておらず、あさぎはこういう単純作業は嫌いではない。何より、どう答えていいのか分からなかったあの話が途切れたことには、ほっとしていたのだった。

最初は夕映と三人で作業をし、その間彼女がぺらぺらとお喋りをしていたのだが、四分の一ほど終わったところで彼氏から電話が来たと言い彼女は外へ出て行ってしまった。

あさぎもそもそも暇だったので、こうして取り残されてもなんとも思わない。寧ろこういううちましました作業はやっているうちに段々楽しくなってきたてしまう性分なのである。

それにちょうど荒芝と二人きりになったところで、彼女の胸には彼に聞いてみたいことがふと過ぎったのであった。

——聞こうかな、やめようかな。

そう思いながら、あさぎはブラックの缶コーヒーを自分だけ飲んでいる荒芝をちらりと見た。口がうずうずするがどうにも言い出せない。

その視線に気付いた荒芝は、机の引き出しを開けるといちごみるくの飴玉をひとつ取り出し、「駄賃」とあさぎに放った。あさぎはお礼を言つとそれを受け止め、包みを破って甘い飴を口の中に放り込んだ。そしてそれをきっかけに、思い切って口を開く。

「あの、この前の……せい……加納、先輩って……」

荒芝は、「ん？」と言うようにあさぎに顔を向けた。恥ずかしそうに、もごもご呟く女子生徒を彼は一瞬目を細めて見る。

先日この生徒と一緒に居た折に、偶然元教え子の加納清矢郎と会ったことを思い出す。その時の彼女のおかしな様子と合わせ、荒芝にも何かが察せられた。

「あー。おとし部活見てたからなあ。俺は何もとらんけど、あいつは強かったから覚えてた。あと教科も見てたし。今のお前さんと一緒だな」

荒芝はあえてあさぎから目を逸らして、そう話を拾った。

あさぎはほつとしたように身体の力を抜く。過去の秘密や自分でも分からない感情の説明が出来なくて困ってしまうので、恋愛事に関心を示す友人よりも、己に関心のない相手の方が正直なところ話しやすいのだ。

しかもこの男がむやみに価値観を人に押し付けてこないことは、あさぎにもどこことなしに知っていた。それにしても、「せいちゃん」を苗字で呼んだことは初めてで何故か緊張した。そう呼ぶと「生身の男の人」のような実感が湧き、妙に胸が高鳴る。

「……どういう人、だったんですか？」

緊張が少し解けたあさぎは飴を舐めながらシールを貼る手を再開し、何でもないようなふりをして尋ねてみた。「外」での彼を彼女は知らないので少し興味が出てきたのだ。

「んー……、サムライ？　みてえなヤツ？」

荒芝は腕組みをしてしばらく考えた後にそう言い、その言葉にあさぎは「はい？」と突っ込みたくなった。

「いや袴穿ってるイメージあるからなんだろうけどさ、古風というか頑固というか、一徹っつーか……そんな感じ。でも人には信用さ

れてたし、中々いい男だぞ。実力もあつたし」

「……」

なるほど、とあさは思わず納得して頷きそうになった。子供の頃の清矢郎しか知らないが、あのまま成長すればそういう感じになるかもしれない、と思つたからだ。

でもそれは、とても彼らしいなとも思つた。

——なんだか彼には竹が似合う。あさはそう思つていた。

それは多分それこそ袴を穿いて竹刀を振るところを見たことがあつたからだと思うのだが、それだけではない。いつでも背筋が伸びていて心も簡単には折れない、静かだけど強靱に撥ね上がる、そんな精神的なイメージも彼には抱いていた。

子供の頃、夏休みに親戚と一緒に祖母の家に泊まつた時のこと、清矢郎は厳しい父親に勉強や剣道の成績のことなどでよく怒鳴られ、時には殴られることすらあつた。一人っ子だつた彼は、その厳しさを一身に受けていた。

あさぎの父親が対照的に優しくおっとりしていたのもあり、子供心にそんな光景を見ては彼女の方が半泣きになりびくびくしていたが、彼の母親や死んだ祖母が優しくかつたのには彼も救われていただろうとあさは思っているし、実際、彼が庇われるところを見てはほつとしたものだ。

だが清矢郎が泣いたところを、あさは見たことがなかった。これも父親に言われて泣かなくなつたらしいが、彼は何を言われても口を横一文字に引いて、黙つていた。

心配して後からこっそり自分の分のお菓子を持って行くと、大丈夫だと彼は少し笑つた。それを見て更に安心した。

——そんな、子供の頃の夏の日を少女は思い出す。

そうか、あの時の男の子はあれからそんな風にしっかりと成長し

ていったんだなと、あさぎは荒芝の言葉に、何故か嬉しい気持ちになる。最近よく思い描くようになった、あの青年に近くなってきた少年の残像が、段々と実体を持って彼女の中で大きく色づいてくる。そんな立派な彼は、ちっぽけで弱くて口をぱくぱくしている金魚のような自分とは全然違う——とあさぎは思った。

そのように少女が嬉しいような自分と比べて悔しいような不可解な気持ちに陥っていると、意味ありげに笑っている荒芝の眼と眼が合う。

「——」

そこであさぎは、はた、と気がついた。やばい？誤解されてる？と途端に焦り出す。

「いやいやいや、ただの従兄ですから」

あさぎは慌ててそう言っていると、いつの間にか緩やかになっていた作業の手を慌てて速めた。

「ふ、ううーん」

荒芝はわざとらしく語尾を延ばしてそう言った。言いながらあさぎはまたふと気付き、心の中で突っ込みを入れてしまう。

——従兄なら尚更、何わざわざ聞いてんの、と。

「……」

そんな少女の目の前に、金魚がふわりと現れる。

「いやいやいやいや！」

「違う違う違う違う！」

「それ困る困る困る！」

あさぎは心の中で必死に否定する。

「それ」はよくない。「それ」はすごく困る。変に血が繋がって

いるから後が大変そうだ。たとえ「彼」で想像して、いやらしい秘め事をしていたとしても、だ。

——って、それこそ従兄相手に何やってんだよ、私！ それこそ、ただの変態じゃないか！！

あさぎはパニックに陥り、ひとりで右往左往し始めた。

荒芝は既に興味を失ったのか、これ以上聞くのは可哀想だと思ったのか、あさぎから視線を逸らし、と言って修正作業も飽きたらしく事務机の上のパソコンを開いてインターネットで遊び始める。

「すみませーん！ もう終わった！？」

そこへ天の助けか、夕映が戻ってきた。

「ごめんねー……って、あさぎ！？」

部屋に入った途端に珍しくあさぎの方から夕映に泣きつくように抱きついてきたので、夕映はきょとんとして、大きな目を更に大きく見開く。

「どしたの！？ 荒芝先生になんかされた！？」

「してねえよ。……たぶん」

荒芝は頬杖をついてパソコンの画面を見たまま、鼻で笑って呟いた。

「ちょっとー大丈夫なのー！？」と夕映は騒ぎ、お喋りのネタが尽きた部員たちも、なになに？とこちらを覗き始める。

しかしこの状況を説明しようにも、恥ずかしいやら自分の気持ち自体がよく分からないやらで、あさぎはどうしようも出来ず、ますますぎゅっと夕映に抱きついたのであった。

第8話 片想い…？

その日あさは夕映と一緒に帰った。先程の誤解は解けたものの、清矢郎のことについてはあさはまだ仲のよい彼女にも話すことが出来ずにいる。

女の子は色恋の話が好きである。自分のことも話したく、人のことも聞きたがる。あさは「今度ちゃんと話すから」と夕映に約束した。浮いた話を彼女にまだ聞かせていないので、逆に興味を持たれたり、突っ込まれたりしてしまうのだ。

それでも駅に着く頃には、話題がテレビ番組のことに移り、あさは内心ほっとしていた。しかしそれに反比例して、その心は騒ぎ始める。

今日も居ないかな？とこうして、明らかに「期待」をしているのだ。そして、

——あ……、いた。

と、その期待が叶った瞬間、馬鹿みたいにあさぎの胸には幸せが広がり、甘いもので満たされていく。

大都会でもなければ県庁所在地でもないこの駅では、大きな駅でもそれほど人がいないので、こうやって見渡すことが出来る。あさぎの視線の先には、背の高い少年が丁度改札を通っていたところだった。

その後ろ姿にこちらを振り向かないかと、あさは願う。

——こつちを見て！振り向いて！と、夕映と言葉を交わしながらも彼女の視線は「彼」ばかりを追っていた。

一瞬、彼が振り向いたような気がしたが、あさぎの気のせいかもしれない。結局、その少年——清矢郎の姿はまた人混みに消えてい

った。

あさぎは夕映に気付かれないように、小さくため息をつく。

親戚だから会える手段はないわけでもないが、だからこそ互いの両親の目をとめても気にするものであった。近所に住んでいるわけでもないし、機会を作らないと会えない。

あさぎとしては自分でもこの気持ちがよく分からないのに、そこまで無茶をしたいとは思えなかった。

ただあさぎは彼があの日のことを無かったことにしているような態度が許せなかっただけなのだ。己を見ず言葉を交わさず、「あさぎ」として認めてもらえないことを、恨みがましく思っていた。しかしその気持ちを解消するためには、会わないと何も始まらない。この苛々に踏ん切りがつかず、いつまでも悶々としていなくてはいけないのだ。となると、家族をとおして会えるのを待ってなどいられない。

よって唯一奇跡が起こり得るこの駅で、あさぎはそのチャンスを待ってしまうのだった。

そうするようになったのはこの前、ここで言葉を交わす偶然があったからだ。だからもう一度起こらないかと、少女は欲深くも期待してしまう。

気がつけばあさぎはたったひとりの人物のことばかりを、愚かなまでに考えていた――。

「ほんと、あさぎ、最近、変」

夕映がそのまま駅のホームを歩きながら携帯電話をいじりつつ、唐突にそう言った。

「そ、そうかな？」

「うん。でもまあいいや、また聞かせてね」

「……うん……」

何を話していいのか今はまだ自分でも分からないのだが、この気持ちがつきりする日はくるのだろうか……。そう思いながら、あさは曖昧な返事をした。

.....

しかしそれから、毎日ではないが週に一回、多くて二回。向こうもこの時間に帰るようになったのか、清矢郎とあさぎの電車の時間が一緒になるようになった。

だがそれは遠目に見るだけ、探すだけの逢瀬だった。言葉も視線も一切交わさないままに。清矢郎があさぎに気付いているのかも分からない。

それでも気がつけば、用事のない日でも出来るだけこの時間に電車を合わせようとしている不自然な自分にあさは気がついた。

——こんな馬鹿なことやめてしまえばいいのに、会ったって目も合わないし、苛々するだけだ。

あさぎ自身、そう思っていた。だからこんなことやめようとするのに、いざその電車に乗らなければ、今度は心がやって落ち着かなくなる。そしていつの間にかこうして探している。

これでは彼の追っかけである。しかも口も利けない名前も知らない電車の君に憧れるような……。従兄に対して何をやってるんだ、とあさはほとほと情けなくなる。

だが、会えるとそれだけで嬉しくなってしまうのだ。それなのに彼は全くこちらを見ない。

金魚は飛んでいることが尚更、それが自分だけの欲求だと、あ

ざ笑われているようで、それがちらつくことに、あさは益々焦りを感じる。

自分は何のためにこうしているのか分からない——だがこうせすにはいられない。自分でもよく分からない心境に少女は陥っていた。

「いつつも誰か探してるね」

また何日か後の帰りの電車の中で、あさは夕映にそう指摘された。視線は彼を探しつつも、ちゃんと会話はしているつもりだったが、どこか上の空であることがばれていたらしい。

あさぎの様子がこの前からおかしいことと合わせて、夕映は鋭く「何か」に気付いているのだろう。あさがまた困ってしまい口ごもって俯くのをみると、夕映は笑った。

「いや無理に言えっていうんじゃない、私でよければ相談にのるよ？」

茶色くふわりとした長い髪、顔立ちもあさぎより大人びていて話によれば既に……セックスの経験もしていて、かつ優しく気を遣ってくれる。

同じ高校一年生でも、夕映は自分とは全然違う、とあさは思っていた。そんな子供っぽい自分を恥じながら少女はこくと頷いた。

夕映は十分ほど行った駅で降りるので、あさはそのあと更に十分ほどひとりで電車に乗っている。黒とオレンジが混ざり合った夏の始まりの夕闇を見つめながら、少女は自分でもよく分からない気持ちを持て余す。

あの夏の日の出来事から四年の時が経っていた。大人に近くなる今、少女は自分でも自分の心と身体のバランスを掴みかねていた。そう思うとこれはただ単にこの成長途中の不安と欲求不満に、「彼」を巻き込んでいるだけかもしれない。しかしそもそも彼が「あんなこと」をしなければ、彼をこんな対象にすることはなかった――

」。

周りや彼に認めてもらえない欲求不満を抑えるために、あさぎはひとりで己を慰めてしまっている。

あさぎにはセックスの経験はない。相手もない。性的な体験は、あの日少し触られたことだけ。だから「それ」をする時は、あの日のことばかり思い出して、乱れて達してしまうのだろうと思っていた。

そしてあの日の相手であったあの少年よりも、自分自身がもう年上になってしまった。だから今切ないくらい追いかけている幻が、あの広い背中を持ち主になってしまっているのだろうとも。

あさぎにしてみれば、こんな汚い気持ちを身内に抱いているなどとえ友達でも知られたくない。たったひとりで抱えなければならぬこの悩みに、あさぎはまた切ないようなため息をつく。

この名前のついていないやるせない気持ちは、認めるのは恐いが、「恋心」だと言ってしまうのが、本当は一番早い。

しかしただの「好きな人」だったら友達に話してすっきりすればいい。本人に告白して玉砕してすっきりすればいい。それで済むのである。

——だがあさぎには、この気持ちはそれくらいでは解決しないような気がどこかしていた。

緋色の金魚が、燃えるような赤い色で今も少女の心の奥を泳いでいる。

この気持ちの先を考えると、あさぎは恐くなってくる。

その先に何か底の見えない、深くて暗い恐いものを感じるのだ。それは想像の中の甘い「恋」とは違い、もっと痛くてもっと苦しいけれど煉獄にも似た……恋愛経験のない少女には不確かで、いまだ認識したことがない、モノを。

しかし考えるだけでぞくりとするような恐ろしい感情であるにも関わらず、あさぎには「それ」以外の答えでは有り得ないような予感も同時にしていたのであった。

あさぎはもう一度、最後に彼と言葉を交わしたあの二週間前のこととを、胸の中に虚しく思い返しながら、電車のガラス越しに遠い雲を見ていた。

窓の外で泳ぐ金魚がいつもよりも息苦しそうに見えた。

第9話 出目金コンプレックス（前編）

ふわふわとたゆたう心が、あさぎには自分でも掴めないでいた。
——自分は「何」を探しているんだろう。少女は迷い、悩んでいる。

その姿を追いかけていた、彼女自身でもおかしいと思うほどに。
『会いたい』

彼のその視線をこちらに向けたい。そう、渴望している。

この執着は、一体自分の何処から生まれてくるのか。我に返り、少女は恐怖を感じる。

学校で友達と笑い合い、家で両親に叱られたり優しくされたりという「普通」の女子高校生らしい幸せな日常を送っているのに。それなのに、心の中ではなんて罪深いことを考えているのだろう——。
あさぎは密かに落ち込んでいた。

しかし七月に入って、二人のこの妙な関係に少し変化が起きた。
清矢郎が週に三回くらい、あの電車に乗るようになったのだ。しかもあさぎと同じ方向のものに。

それは少し嬉しかったものの、何故なのか謎であったが、
「ああ。予備校でしょ？」

とその日たまたま一緒に帰った同級生が、あさぎが視線を送っていた清矢郎を含む北高の生徒の一団に気付き、解説してくれた。
言われてみればこの電車も終点まで行けば中核都市になり、そこにはそうしたものも何校がある。清矢郎も受験生なので、それにはあさぎも納得した。

この時間の電車は十両編成である。あさぎもいつも同じ車両に乗

るわけではなく、友達に流されるままに適当な位置から乗っている。それは清矢郎も同じようで、だから一緒の車両に乗り合わせたり別の車両になってしまったりするのだ。

しかし階段からホームに下りて来る時など、彼に遭遇できる率は確実に上がっていた。

頻度が増えた分、あさぎはもう癖になったように、きよろきよろとその姿を探してしまう。これじゃ本当に、電車の君に憧れるナントラだよ……と内心ため息をつきながら。

清矢郎と同じ高校の生徒も大勢通っているのか、あさぎが見ていると、彼は男の子の友達二、三人といることが多い。ふとそちらを見ると無表情の彼だが、時々笑みを浮かべる。

自分には見せない笑顔に、一体何を話しているんだろうと気になり、あさぎの胸はちりりと焦げたような感じがする。

そして稀に、清矢郎は女の子と一緒にの時もあった。二人きりではなく、友達の男の子も一緒なのだが。相手の女子生徒は三年生だから、中学を卒業して四ヶ月目のあさぎと比べて、とても女らしく見えた。そして彼はその人の前でも、たまに笑っていた。

そんな光景を見ると、あさぎはまるで子供のように拗ねた気分になる。

——いいなあ。私にも、あんな風に笑って欲しいなあ。

つまらないつまらないつまらない。

前よりも近い距離に居るのに、見たくないものまで見えてしまつて、あさぎは余計につまらない気分になっていた。今日も眼が合わないまま、いじけた気分で少女は電車を降りる。

明るい電車の中から、逢魔ヶ時の藍色の世界に足を踏み出せば、電車はそのまま夕暮れの中を滑り出していく。あさぎは自分ひとりだけ、取り残された気分になる。

夏の水草の匂いがする川沿いの道を、ひとりで歩きながらあさぎは考える。

だがもしも、清矢郎に既に彼女や好きな人が居たら、自分はもうするんだろう……と。

確かにそうだったら、あんな秘密を共有する自分なんかとは目も合わせたくない、忘れたいと思うのではないか？ そうなったら、この気持ちはどうすればよいのだろうか。

「それ」を仮定した時——、あさぎに見えた金魚は赤くなかった。闇と同じ、出目金のような真っ黒な色。

——嫌だ！ いやだいやだいやだ！

また子供のようなわがままを心で叫ぶと、泣きそうな顔をしてあさぎは首を振る。

そんなのは、嫌だ。あの人がその人のことを見て、その人には笑顔を見せて、その人のことばかり考えて、その人のことを大事にする——そんなのは、嫌だ！

その仮定にあさぎは心の中で、必死で抗う。

しかし清矢郎とて、十八歳の男性なのだ。きっとそんな相手が居れば、あの夏の日の続きを……その人とするであろうことは、ほぼ必定であろう。

あさぎはそんな想像をすると、セーラー服の胸元をぎゅっと握り締めた。

裸の彼に愛される裸の女を想像しただけで、胸が肺の病気のように痛くなってくる。ぎゅっと強く締め付けられるように、息苦しくなる。

口も利けないのに、求められない相手なのに、血も繋がっている

のに、どうしてこんな想いをしなくてはならないのだ、と泣きたい気持ちになる。

いっそ、あの夏の日にあんなことをしたあの相手が憎く、もう清矢郎のことなど忘れてしまいたかった。その存在を、過去ごと消してしまいたかった。

その晩、あさぎはノートに文章を書いた。一応、部誌の今月分の締め切りが近いからだ。

かねてからのように金魚のことを書くとしたが、今夜は黒くて恐い金魚しか見えてこない。少女は頭の中も真っ黒で何も見えない状態であつたので、何度も何度もノートをぐちゃぐちゃと鉛筆で塗り潰す。

結局少しだけ書いた下書きは、タイムマシンを使って過去に戻って自分の生まれたことから無しにしてしまうような内容の、やけに悲觀的で厭世的な文章となつてしまった。

.....

それから少し時が経ち、文芸部では今月分の部誌を印刷することとなった。印刷機を使って製本という意外と地道な作業であるが、これを活動として毎月行っている。

ちなみに文化祭で発行する部誌はまた別だ。これは一年に一度、印刷屋に発注しきちんとした装丁の本にして、文化祭で販売している。文化祭は九月にあるので、こちらの締め切りも迫っていた。

あさぎは今月分の部誌の原稿として、結局そのタイムマシンをモチーフにした未消化な文章を出すには出したが、皆の文章を読み、出さなければよかったとやはり後悔した。何も出さないのも、部活

に参加していないようなので、無理やり提出したものの。

いつものようにお喋りをしながらだと進む製本作業の合間に、部員たちは刷り上った他人の原稿を楽しそうに読んでいる。

一見派手で文章を書くようには見えない夕映でも、あさぎからすれば立派な文章を書くのであった。秘訣は本を読むことだと言われた。彼女はきつと恋もセックスも本もアルバイトもみんな同列にして、楽しんでやっているのだろう。

あさぎはそれを羨ましく思っていた。もちろん彼女なりの苦労や努力もあつてのことだが。

自分には何が出来るんだろう。自分は一体「何」なんだろう——その迷いに「彼」が自分を認めてくれないということが合わさって、あさぎは不安定な状態に陥っていた。

思春期特有の、「自分」という存在が分からない不安と劣等感に消えてしまいそうな気分になる。そんなことを考えていると楽しそうなみんなの顔を見ていられなくなり、美人部長を先頭に各教室へ部誌を配りに行くと言っていたが、あさぎはあえて印刷室の鍵と製本テープなどを片付ける作業を選んで、ひとりで歩き出した。

荷物を置きに国語準備室に戻ると、今日も荒芝が暇そうに座っていた。彼は一体いつ仕事をしているのか分からないが、また競馬新聞などを広げている。

「終わりましたー」

「おーご苦労」

読むかどうかは分からないが、一応一冊彼に提出するのも決まりごとである。

「なんかいいの、書けたか？」

荒芝は部誌が机の上に置かれた音に反応して、新聞から僅かに視線を上げてあさぎを見た。適当に言った一言であると思っていたが、

彼はとうやら覚えていたらしい。

「ダメダメでした」

あさは大きくため息をついた。

「そっか。スッキリしんだか」

荒芝は再び新聞に目を落とした。一ヶ月ほど前の会話を思い出し、あさは赤くなって頬に手を当てる。

「……そんな、顔に出てますか？」

荒芝は何も言わずに鼻で笑った。

第10話 出目金コンプレックス（後編）

……出ているんだ、とあさは恥ずかしくなった。この欲求不満と劣等感が。

確かにしつかりと自分を持っている夕映から見れば、こんな顔をしていれば突っ込まれる筈である。清矢郎には……遠目だし自分なと見ていないだろうし、こんな自分の醜くすぎすぎした顔は見られていないだろうか。

そんなことを考えていたら、あさは益々落ち込んできた。

いじけたように口を少し尖らせ、セミロングの黒髪の前をくると巻いた。ストレートの髪はすぐに指からすり抜けた。そして、大きなため息とともに、あさは唐突に呟いた。

「——私、幻覚が見えるんです」

「はあ？」

荒芝は素っ頓狂な声を上げた。あさは何処に向かって吐き出したらよいか分からない感情に揺らぐ双眸で、彼を真っ直ぐに見た。
「昔のちよつとしたことがきっかけで、ある感情になると見えちゃうみたい……」

「……」

荒芝は小さい目を丸くしてあさぎを見ていた。

「ほんと、高校生にもなって子供みたい。……夕映とかはあんなに大人っぽいのに」

あさはわざと自嘲的に笑った。荒芝は突然そんなことを言い出した女子生徒に何を言えばよいのかと、しばし悩んでいたようだったが、

「カウンセリング、紹介するか……？」

至極普通に心配されてしまって、あさぎはまた苦笑した。

「大丈夫です、たぶん。いつもすぐに消えるし、原因は……、分か
ってるし」

原因は、あの眼鏡の少年だ、とあさぎはとうに自覚している。

きつと彼が自分を満たしてくれた時に、この呪縛のような幻影か
ら解放されるのだろう……あさぎはそんな気がしていた。そんな日
がくるか分からないという不安に、今は押し潰されそうなのだが。

前からちよつと変わった子だなとは思っていたが、生徒にこんな
ことを告白されて、対応に少々困ってしまった荒芝だが、やがて競
馬新聞を机に置くと頬杖をついてぼつりと言った。

「……きつと、お前さんは感受性が強いんだろーな」

「？」

あさぎは首を傾げた。逆にそれだったらいい文章が書けたりする
のではないだろうか？

荒芝もあさぎの言いたい事に気付いたようだった。

「あ、それと表現する能力つてのはまた別だから」

きつと夕映とか部長には、「それ」があるんだろうな、とあさぎ
はまた比較してしまった。

「でもそれは、お前さんなりのモンだから、大事にしな。……親に

大事にされて、愛されてる子は見たりや分かる。だからお前さんは
大丈夫だ。子供っぽいとかなんとか色々考えてたつて、ちゃんと年
相応に大人になってけるつて。そのうち、嫌でも年とるんだから」
「……」

あさぎはまじまじと荒芝を見た。彼はいつもどおりのやる気のな
い、薄笑いを浮かべてはいたが、その自分を見ていた目から嘘でな
い言葉であることは伝わってきた。

それは、「今のままのぐちゃぐちゃの自分」でもいいということだろうか、と少女は首を傾げる。——それでも、大丈夫ということなのだろうか？と、自分の胸に問いかける。

荒芝は言いたいことだけ言つと、また競馬新聞を読み始めた。このやんちゃな子供のような大人の言いたいことはあさぎにはよく分からないが、「自分」を見てくれて、今の自分へと嘘のない言葉をくれたことだけは分かった。

・・・・・・

今日も夕映はアルバイト先に直行していった。あさぎは他の文芸部員たちと駅まで一緒に帰つて来たが、バス通学だったり自転車通学だったり、それぞれに帰っていく。

ひとりで夏の夕暮れのホームに下りたあさぎは、先ほど荒芝に言われたことをぼんやりと考えていた。

劣等感に苦しんでいたが、それも全部含めて「自分」を「自分」と受け止めてみたら、少しは見えてくるものもあるだろうか。

この苦しさから、逃れられることもあるだろうか……？

そう思つたら、彼女は無性に「彼」に会いたくなつた。

駄目でもいい、拒絶されてもいい——今なら——。その強い願いが彼を引き寄せたのだろうか、それともそれは偶然であり、運命であつたのだろうか。

あさぎがそう思つて顔を上げた時、清矢郎がホームに向かって階段を降りてきた。

しかも、ひとりで。

あさぎの胸がどきんと高鳴った。

——今しかない！そう思った。

実際彼に好きな人でも居れば、そしてあの夏の日のことも返答によつては、あさぎの心はボロボロに壊されてしまつたろう。彼女にとつて、それはとても恐いことであつた。

だが頻繁に会えるようになったからこそ、会えるのに無視されるというこの状況の積み重ねが、どうしようもなく苦しくなつてきていたのだつた。この黒い心を持て余しているのも、あさぎにはもう限界が来ていた。

だったらいつそ、壊された方がいい。そんな風に思っていた。全てが壊れてゼロになつて、あの夏の日よりも前にリセットされれば、そこからもう一度やり直せるかもしれない。その方が自分が楽になれるかもしれない。だったら、それに賭けたい——、と。

四年間、あさぎの中で我慢してきた恐さや不安が、今にも破裂しそうな程になつてきている。まだ答えは出ていないが、もうこんな風に醜い想いに苦しんでいる自分は嫌だと思つた。自分をこれ以上嫌いになりたくなかつた。

そうならないためには、自分をまるごと受け入れるしかないとおさぎは思つたのだ。彼女が羨ましがる友人の夕映たちのように。

受け入れた結果——、気持ちの正体は分からずとも、やはり少女には「彼」のことしが残らなかつた。

それが今のこの汚い「自分」の根源となつていただけは分かつた。「それ」が気になるからこそ、こんな風に狂つてしまった。この膿を吐き出したければ、もう、真つ向勝負でぶつかるしかないのである。

自分もひとり、相手もひとり。もうこれは、千載一遇のチャンスではないか！

あさぎはそう決意してこっそり拳を握り、うん、と頷いた。

夕方六時の電車は通勤客も乗るので混雑している。あさぎは清矢郎を見失わないように、自分の後ろを通っていった彼をこっそりと追いかける。

すぐにホームに電車がやってきた。あさぎは再び気合を入れると、彼と同じ車両に乗った。

この田舎では夕方でもすし詰めになることはない。人は多いが、隙間はあるし彼の姿は背が高いこともあって確認できた。

あさぎの家の最寄の駅に着くまで二十分しかない。この間に、清矢郎が誰か友達に会うかもしれない。自分を認めて動き出すことは恐かった。それでも、もう今しかないかもしれないとあさぎは覚悟を決めた。

そんな少女を、赤い金魚が彼の方へと導いている。だからどんな人混みでも、迷うことはない。その金魚が泳ぐ方へと、揺れる電車の中を歩けばいいだけだった。ちよつとふらついて人にぶつかってしまったものの。

——この金魚も「私」なのだ。だから恐いけど恐くない。

あさぎは自分でもよく分からないことを考えながら、遂に自らの意志でドアの近くに立っていた少年の前に立った。

流石に驚いたように清矢郎はあさぎを見下ろした。そして、二人の目と目が久しぶりに結ばれた。

あさぎの足が震えそうになる。

——金魚が飛ぶよ。怖いよ。

だけど、もう、逸らせない。引き返せない。

引き返さない。

「あの……さ、」

あさぎは遂に口を開いた。

第11話 動き出す時

しかし口を開いたものの、何から話せばいいのか分からなくなり、あさは再び黙って俯いた。折角清矢郎が自分の方を見てくれたのに、これでは何にもならなくなってしまうと、焦りが浮かぶ。

脳細胞をフル回転させても何を言えばよいのか分からない——と呼びかけたはいいいものの、少女は困ってしまったていた。

金魚のこと……それを見せるようになった、あの夏の日のいやらしい思い出について話せばいいのか、いや、そんなことをこんな場所ですで話せるわけもない。第一、驚いたからこちらを見ただけで、清矢郎だってこのまま無視して行ってしまう可能性もある。

そうなる前に何か話せねば——でも何も思いつかない！

そう思いながら、あさが困惑した表情で、それでも何か言いたげに再び清矢郎を見上げると、彼と目がまた合った。どうやら彼女をずっと見ていたようである。彼はばつが悪そうに、その視線を窓の外の夕闇に移した。

その端正な横顔をあさは言葉もなく見上げる。広い肩幅と大きな手をぼんやりと眺めながら、——ああ、私はこの人で想像してやっちゃってたんだなあと思うと、あさは恥ずかしくなり、彼に対して申し訳なくて仕方なくなる。

こんなこと知られば、いくら彼が自分にいたずらしたことがきつかけであつたとしても、きっと軽蔑されるであろう。あさは罪悪感にまた俯いた。

しかし口を開いたのは、清矢郎からであつた。

「……なんか、言いてえこと、あんの？」

突き放したような言い方であつたが、言葉尻にはどこか腹を括つたような力強さもあつた。

あさぎは再び清矢郎を見上げる。彼はちらりと横目であさぎを見た。その僅かな視線を捕らえて、少女はこくと頷く。

「でも……ここじゃ、言えない……」

電車の音にかき消されそうであったが、彼にだけ届くように、あさぎは小さな声でそう言った。本当は何を話せばよいのか決まっていなかったのだが、公衆の面前では出来ない話であることは確かだった。

しかしその時、電車が駅のホームに止まった。それはあさぎが乗り降りしている駅であった。

——え！？もう！？と少女は驚く。迷っていた時間や無言だった時間が結構長かったようだ。そしてそれに気付かないほど、切羽詰まっていたらしい。

——だけど、今じゃなきゃ——。ドアのところに立っていたあさぎが降りることも出来ず困ってしまうと、彼女を押しつけて幾人かの人々が降りていった。

それに押されて、呆然としていたあさぎは少しよろけた。転びそうになったところ、その制服から伸びた二の腕を、清矢郎の手に掴まれた。

その手の男としての頑丈さと温かさを、不意に意識させられる。

「降りないのかよ」

清矢郎が耳元近くで呟いたその時、電車のドアが閉まって動き出した。

少女がこの少年に触れたのは、あの夏の日以来だった。いや、男性そのものに、久しぶりに触れた。ただよろけたのを支えられただけのことだったが。

だがそれは一瞬のことで、周囲に人がいなくなり、電車が動き出したところであさぎも体勢を整えられたので、自然と清矢郎の手は

離れていった。

あさがもう一度清矢郎を見上げると、彼は少し呆れたような、困ったような顔で彼女を見下ろしていた。

あさぎ自身、何故こんな行動にいたったのか、分かっていない。何も言えないまま、何も「覚悟」出来ていないまま。

清矢郎はまたしばらく何かを考えると、短いため息を吐いて、ドアの横の手摺にもたれた。

そして携帯電話を取り出すとあさぎの方に向け、じろりと睨むように——これは子供の頃から目が細くて目つきが悪いだけだとあさぎは知っているが——、こう言った。

「アドレス」

「は？」

「……今度の、土日あたり、」

「はい？」

「ばーさんちと俺ん家、どっちがいい」

「えっと……」

「——何か、話したいこと、あるんだろ？」

どこか自棄くそのように不躰にあさぎにぶつけられた清矢郎の視線は、そうでありながらも静かであっすくな、それこそ竹のようないつものそれにも感じた。

.....

あさぎは駅のホームで、下り電車を待っていた。

結局、終点まで乗ってしまい、折り返しの電車に乗ることにした。清矢郎は最後に彼女を少し心配そうに見たが、そのままホームで別れた。

——何かが、動き出してしまった。そんな予感がしていた。
そうしたのは自分自身の意志であり、あさぎは決して後悔しては
いないのだが、本当はどこかとても恐く感じている。

あさぎが携帯電話で母親に遅くなると電話をしたら、少しちくり
と言われてしまった。だが理由など正直に言えるわけがない。

全てを赤裸々に親に話す必要はないものの、今日のことが母親に
正直に言えなかった時点で、あさぎは自分の考えていることやして
いることが「よくないこと」の部類に入ってしまうのだなど、どこ
かで自覚していた。

それはあさぎが身内である彼を、一個人の「男性」として見てい
るからに違いなかった。この秘密の感情と逢瀬を家族には知られて
はならないと、内心ではそれを罪に思うからだ。

しかしそうして罪悪感を抱いていても、彼女のしている行動はそ
れと真逆のものだった。

赤外線で交換した清矢郎の携帯電話のメールアドレスと電話番号
を、あさぎは意味もなく表示させてみる。それは近いようで遠い距
離だった、彼と彼女をようやく繋いだ、個人的で大事なツール。

こんな些細なことで、あさぎの顔はにやけそうになる。アドレス
のオートマークより前を見て、どうしてそれにしたのかと想像して
は彼に少し近づけた気がする自分を馬鹿みたいにも思う。

本当に今度の土曜日だけ日曜日だけに……二人きりで、会うのか
な？……会ってもらえるのかな？と、あさぎはふと心配になった。

ああ言ってくれはしたものの、あんなところでストーカーみたい
に追いかけた自分を迷惑に思っただけの口約束かもしれない。会ってど
うすればよいのかも分からない。確認のためにメールでも送ろうか
とあさぎは思ったが、鬱陶しがられることを恐れて、出来なかった。
そしてそのままただアドレスだけを眺めると、赤と黒の金魚と水

草のシールが貼ってある水色の携帯電話を少女はぱちんと閉じた。

——これから、どうなってしまうんだろう。

遂に動き出してしまったものの、あさは内心不安になりながら、自分によろやく目を向けてくれた清矢郎の視線と、一瞬頑丈な手で腕を掴まれ支えられたことを今一度思い返す。

それを思うと「何か」熱いものが身体の奥から這い上がってくる反面、それに目を向けることに恐怖を感じる自分がいる。

考えに収束がつかないまま、やってきた電車に少女は乗り、賑やかな都市の駅から一変した家の近くの静かな駅へと降り着いた。

川沿いの堤防に生える、夏の草の匂いがその鼻をくすぐる。

そして四年目の夏がやってくる——。

第12話 幻影金魚（前編）

それは四年前の、夏の出来事だった。

ビルばかりの地帯よりは涼しいものの、あさぎの祖母の家も同じ県内にあるので「その日」も朝からとても暑く感じられた。お盆や正月などは、この家に必ず親戚の皆で集まっていた。

とても恐くて厳しかったという祖父は、あさぎが生まれる前に亡くなってしまっていたから、会ったことはない。

あさぎの母親には兄弟が四人いた。だから従兄姉もたくさんいるのだが、年が上で既に働いている年齢でもあったので、祖母の家にはほとんど来ない。来ても少女と一緒に遊んだりなどしない。実際あさぎの姉ですら彼女よりも十近く年上になるので、遊び相手というレベルではない。

だから此処に来るとあさぎはいつも二つ年上の「せいちゃん」と遊んでおり、彼に懐いていた。唯一の「子供」同士であったからだ。「せいちゃん」——こと清矢郎もまた、唯一年下だったあさぎを可愛がっていたのだろう。蝉やカブトムシを取るのにも、プールに行くのにも女の子にも関わらず相手をし、それに付き合ってくれていた。

今でこそ髪を伸ばし大人しくしているが、昔のあさぎはおてんばなものであった。成長期が早かったので背も低くなく、髪の毛も短く、少年のようだった。

そのおてんばが原因で中学生の時に男子と喧嘩をし、それがトラウマになり今では大人しくなったのだが……それはさておき、その頃は泣き虫だったがやんちゃで元気な女の子であった。その面影は今の所作にも十分残っているが。

「せいちゃん」はあさぎよりも年上だったのもあり、彼女のクラス男子のように意地悪はしない。元々無口で、はしゃいだりもしない少年であるのもあり。

あまり笑わないが、優しく根気よく面倒を見てくれる少年で、頭もよく夏休みの宿題もあさぎに教えてくれた。

祖母の家は清矢郎の家に近かったため、彼は時に同級生と遊びに行くこともあったが、喧嘩をして帰ってきたこともあった。しかも相手を泣かしてしまい、相手の親までやってきて、最後には彼は彼の父親にぶん殴られるという凄まじい結末だった（勝つまで帰ってくるなど教えたのは、彼の父親なのだが）。

その一連の流れを見ていたあさぎの方がびっくりして泣き出してしまったのだが、それでも泣かなずにぐっと堪える清矢郎は、力だけでなく心も強い子なんだろうな、と彼女は泣きながらそれを見て思っていた。

つまりそういった様々なことを総合して、彼はあさぎにとって最も仲良のよい存在であり、「憧れの」お兄さんであったのだ。「お嫁さんになればいい」という母親たちの冗談も、少しくすぐったい気持ちで聞いていたほどだ。

「子供」はあさぎと彼だけだったので、風呂も寝るのも全て一緒だったが、そうは言っても男の子と女の子であることから、あさぎが小学校三年生になる頃からそういうものは一緒にはしなくなった。それから一緒に遊んではいたものの、徐々に距離が置かれていくようになる。一緒に遊ばなくなり、それでも勉強くらいはたまに見てもらっていたが、あまり言葉も交わさなくなってきた。

そして清矢郎の方が中学生になる頃には、彼が部活をしていたこともあり完全に距離が置かれてしまった。あさぎにとってそれは、とてもつまらないと思えることであった。

男と女になるくらいなら、自転車に二人乗りして側溝に落ち、二人で泥だらけ血だらけになって、彼が泣いてしまったあさぎにハンカチで膝を巻いてくれたような、そんな過去の方が楽しかったと少女は思い出す。

だが無常にも時は流れて、六年生になった春、あさぎに生理がきた。

胸は少ししか膨らんでいないのにもう子供が産めるとは、不思議なものであるとあさぎは首を傾げていた。どうやって子供が出来るのかも、習ったものの具体的によく分からないのに。

しかし頭痛や腹痛など、生理中特有の現象は起きてしまう。その病気でもないのに病気のような感覚は、あさぎにとって不快なものであった。

そういう日は母親だけでなく周りにも悟られるもので、家族や親戚に「そういう眼」で見られることが、まだ十二歳のあさぎには嫌なものであった。

——「女」として見られている。まだ私は子供なのに……。相手にはそんなつもりはなくてもそんな視線を感じ、子供心に自分自身に対する嫌悪感があった。

自分は「女」なんかではなかったのに。その頃のあさぎは、嫌なのに未知の、別のイキモノのようにならねばならないような不安と不満を少しばかり抱えていた。

注意されることも増え、楽しいことなど何もない。それに自分が女であるから、「せいちゃん」だって遊んでくれなくなったんだ、とあさぎがそのようにふてくされていた、そんな八月のある日——「その出来事」は起こった。

「その日」は家に誰も居なかった。

本当につまらない、とあさはむくれていた。生理が近づいてきており、朝から鈍い偏頭痛がしていたので、余計にいらいらしていた。

彼女が眺めていたのは、去年のお祭りで清矢郎と掬った金魚であった。

よくまだ生きてたな、よつばとおばあちゃんが大事にしていたくれたんだな。そう思いながら、あさはそれを白々しいような気持ちで眺めていた。

あの時は今よりも少し、普通に彼と喋っていたような気がした——と少女は思い返していた。何よりも彼女自身が意識をせずに、彼に無邪気に接することが出来ていた気がするのだ。

あれからあさぎの体に変化が起きた。そして清矢郎もまた身長が伸び、声が低くなって「子供」っぽくなってきていた。

そんな「おっさん」のようになってしまった「せいちゃん」とは、今年はもう遊んだり祭りに行く気もない。それなのに彼女たちの祖母は、二人で掬った金魚だから、今でも「せいちゃんとあさちゃんみたいに仲良しだね」と笑っている。

あさはそう言って笑われるのが嫌いだった。そうやってからかわれることに、いつしか非常に抵抗を感じるようになっていた。

——なにも、知らないくせに、と。

赤い金魚は、ひらひらと美しかった。その綺麗な姿こそが、少女を苛立たせていた。

それは「子供」だった「自分」と「せいちゃん」の象徴のようであると感じていたから。

その時あさは、部屋に誰かが入ってきたことに気がついた。顔を上げると、広い畳の部屋の後ろに、清矢郎が立っていた。

家での彼はよく走りに行ったり素振りに行ったりするので、大き

目のＴシャツと中学校のジャージの姿のまま。その彼が気をつけばあさぎのすぐ傍にきた。

——何しにきたんだろう？と、あさぎは少し不思議に思ったが、それまでだった。子供の彼女には何も予測出来なかった。

『どうしたの？』

あさぎはそう、自分から言葉を掛けた。何も知らないふりをして、あえて無邪気に。

だが、その時の彼の空気は確かに違っていたのだった。どこことなく本能的に、「何か」警鐘のようなものをあさぎに感じさせた。

しかし清矢郎はあさぎの言葉に答えない。いつもと違うどこか濁ったような視線の少年に、あさぎは疑念と恐怖を、本当は微かに、確かに感じていた——。

その嫌な予感を気のせいにしたように、あさぎは咄嗟に金魚の話をした。まだ子供でいたい少女は、そんな変な空気を認めたくなかったから。

『去年の金魚、まだ、生きてたね』

あさぎはそれを誤魔化すように、あえて笑ってそう言った。しかし自分の発した言葉自体がとも空々しく、既に「何か」が生じていることは確かなのに、それを焦って隠そうとしていることが、本当はとても嫌だと、気持ち悪く感じていた。

清矢郎は今度は短く返事をした。しかしその後はまた沈黙が訪れた。

あさぎにとつては、その沈黙が更に嫌でたまらなかった。彼の方を見ることも出来ず、ただ赤い金魚をじいっと穴が開くのではないかと思うほど凝視していた。

早くこの気まずい時間が終わって欲しい——少女はそれだけを願

っていた。実際、最近では中学生の彼と何を話していいのかも分からなかったから、何も会話が思いつかないのだ。

どうやって、この嫌な空気から逃れよう——偏頭痛のうえ、まるで酸欠のように息苦しくなりながら、あさがどうにか楽しい話題を作ろうとした、その時、

——少女の微かな希望は、無残にも打ち碎かれた。

横に立っていた少女よりも少し背の高い少年が、不意に彼女に触れたのだった。

少女のその、「女」の部分に。

両の手で、「何か」を確かめるように。

そのまだ幼い身体の膨らみと、無いことを。

まるで何も見ていないような、濁った眼のままに。

まるで何かに取り憑かれたように、無言で、無表情に。

第13話 幻影金魚（後編）

「……！」

——なに、するの！！？とあさぎは思ったが、こういう時に声など出ないものである、と後から思い返す。

まるで喉に声が張り付いてしまったように、何も言葉が出てこなかった。そして体中が凍り付いてしまい、微動すら出来ない。

上から下へと、少女の凹凸の少ない身体を撫でるように、少年に触れられた。

あさぎの全身が硬直し、ぞわつと気持ちの悪い感覚が駆け上がる。この状況で「感じ」られるわけがなかった。

あさぎはただ、パニックを起こしていた。

——どうしてこのひとがわたしにこんなことするの！??

その答えは、ひとつだった。

——彼が「男」で、自分が「女」だからだ——。

望むと望まざるに関わらず、その事実を十二歳にして信賴していた相手に突きつけられた、残酷な瞬間が訪れる。

すぐ近くにいた少年からの、子供の時にはなかった、すこし苦いような汗の匂いが少女の鼻をつく。その息遣いすら感じられるくらい、相手に全てを集中してしまっていた。視覚、触覚、嗅覚、聴覚の全てが、相手が己を「女」として求める「男」であることを本能的にあさぎに伝えてくる。

真っ直ぐでいつでも澄んでいた彼の眼が、今や濁った「雄」のソレになってあさぎを見つめている。

その時、あさぎの中で何かがぱりと音を立てて壊れた。

——あ……。

彼女の眼に映ったのは、金魚——の幻だった。

真っ赤なソレらが、水槽から飛び出したように、何故か少年の後ろに浮いていた。

それはまるで生理の血のような、真っ赤で綺麗な金魚に見えた。

それは二人の、「最期の」、綺麗だった、愛しかった尊かった、時間の象徴。

純度の高い透明できらきらした子供たちの聖域に閉じ込められていたのに、それが食い破られ表に溢れ出した、哀しい幻像がぶかぶかと浮かんでいる。

まるで壊れた少女の心を慰めるように、この残酷な現実これ以上心を粉々にしないように、無表情に己を求めてくる少年の後ろにその幻影を見せている。

——きれい……。

あさぎはそれに心を奪われた。

それに逃避した。

そちらに集中していれば、変なことをされていてもなんとも思わないでいられる気がしたからだ。

実際こうしていたのは五分もないことであつた。

ほんの少しの間、清矢郎があさぎの胸と局部を彼が触っていた。

しかも服の上から。それだけのことであった。

逆に言えば、それだけに留まったのが彼の僅かなりに残った良心といえるものなのかもしれない。それでも、少女を傷つけた罪に変わりはないが。

清矢郎は、やがてはつと気付いたようにあさぎから手を離れた。それは彼が自ら離れたのかもしれないし、あさぎが傷ついたような顔をしていたからかもしれない。

しかしどちらにしろ、あさぎには今は何も考えられなかった。清矢郎の手が離れたところで、恐くなってその場から逃げ出した。

もう彼とは、二人きりで居たくない。そう思い、あさぎは近所の神社まで全速力で走った。蝉の音が降りしきる中、少女はあはあという荒い呼吸を落着けながら、誰も居ない神社の柱に手をつく。

自分は彼にとって「女」となってしまったのだ。彼とはもう二度と、以前のように一緒に笑い合うことは出来ないのだ。そう思うと寂しくて悔しくて、酷い裏切りを受けた気がして、あさぎは絶望すら感じていた。

それなのに、何故だろうか。それでもあさぎの心の奥底に、あの金魚の美しさがしっかりとこびりつき、忘れられなかったのだった。

まるで、胸の奥に小さな小さな熱い火が灯ったかのように。

恐かったのに、それなのにあの時、清矢郎の後ろに見えた金魚はとても綺麗だとあさぎは感じていたのだった。あんなことはいけないうことだと思っているのに、とてもショックな出来事だったのに――それでも、何故かあの金魚をまた見たいと思ってしまっているのだった。

あさぎはこの時まで、その願望が後に己を焼き尽くすこととなる

のにも気付かず、今はただ、この突然身に降りかかった現実には呆然としていた。

……あの、「せいちゃん」が、あんなえつちなことするなんて、思わなかった……。

あさぎはそのまま神社の軒下に腰掛け、短パンから伸びた細い足をぶらぶらとさせた。

清矢郎のイメージとして思い出すのは、笑わないのに優しさが伝わるあの眼と、ぐっと何かを堪える時の意志の強そうな眼である。その裏に、あんな汚いものを抱えていたのかと思うと、あさぎは再びぞわつとするような、変な感じがしていた。

しかもその相手が、どうしてまだ小学生の「自分」だったのだろうか……。

困惑とショックは尽きなかったが、あさぎは意外と冷静に頭の中でこの事件を受け止め、どうにか処理しよう、立ち直ろうとしていた。姉と年が離れていたり、親戚など大人と接することが多かったからだろうか、やんちゃでも少しばかり大人びたところがあった。逆にあの美しい金魚を己に見せることで、その心が壊れないよう無意識のうちに守っていたのかもしれない。

あの綺麗な緋色の金魚は、それこそ心の奥底に灯った小さな炎のようだった。

それは四年経って思えば、「女」の本性——と呼べるものなのだろうか。

この日のことが少女に「性」というものを初めて意識させ、二年後に覚えた自慰行為への興味にも繋がっていったのかもしれない。

た。

そしてそれを予言するように、この時あさぎの胸の内は、信頼していた相手からの裏切りは苦しかったにも関わらず、どうしてか熱かった。

もし相手が違う人だったら——そうしたらもつとずっと嫌だった、まだ清矢郎でよかった。これもどうしてか分からないが、あさぎはそう確信していた。

いずれにせよ、これは「誰にも言えないいけないこと」であることだけは小学生の彼女にも分かった。

いくらシヨックでも、これが清矢郎の家族に知られれば、あの恐い伯父さんに彼は殺されかねない。何より自分が「女」になってしまったのか、という同情の眼で周りから見られることに嫌悪感があった。こんな変な秘密を強要されて、あさぎには清矢郎を恨みたい気持ちもあった。

しかしそうするしかない。あさぎは自分でも驚くほど、昼間の恐ろしい出来事を隠し通し、何もなかったかのようにその晩の夕食を家族全員で食べた。

清矢郎も同じ席に居たが、決してあさぎと目を合わせはしなかった。意識されても困るくせに、その態度に彼女は少しむっとした。

そしてその日からだった。

清矢郎があさぎと絶対に眼が合わせなくなったのは。

あの日のことを、二人して必死になかったようにしようと躍起になっているのは。

そんな夏の嫌な思い出から、四年が経った——。

第14話 初デート？

電車で清矢郎に思い切って話しかけてから、五日後の金曜日の夜、あさぎは窓を開けた暗い部屋の中、ベッドの上で寝そべりながら、あの日のことを思い出していた。

だが今夜は自慰行為はしなかった。いつもは「触られちゃった」という甘苦い部分と、今の清矢郎を思い出し重ねながらするのだが、今夜はそもそもどうしてあのようなことになったのか、次会った時、彼に何を言えばよいのかを考えていたのだ。

もちろん、思い出している途中に本能的に胸や局部やらが疼き出したりはしたのだが——しかし身体がそれだけ反応するということ、やはりあの四年前にされた行為で自分は「女」として目覚めさせられていたかもしれない、と思うのだった。

理性の手綱をどうにか握り締めたまま、一生懸命あの日から彼に對してぶつけたかった気持ち、この苛立ちを、彼にどう伝えればよいのか考える。

赤い金魚が、天井をゆるやかにふわふわと数匹飛んでいるのを、あさぎはぼんやりと見ている。——自分は、彼にどうして欲しいのだろうか。

——『「私」を見て、認めて！』——

あさぎはあの日から自分を居ない者のように扱う清矢郎に對して、そう思っていたのだが、本当は「彼」は関係ないのかもしれない。

あの日の悪戯は確かにショックだったが、それとは関係なく今、社会にも誰にも認められていないという欲求不満から、清矢郎に八つ当たりのように自己の存在を認めさせようとしているだけなのか

もしれない。

逆に、具体的に清矢郎がどうしてくれたら満足するのか？——少女は自問自答する。

抽象的なことだけを言われても、彼だって困ってしまうだろう。しかし最初に悪いことをしたのは彼なので、遠慮することはないとも思うあさぎであった。

そこで先日電車の中で、自分の細い腕を掴んで立っていた清矢郎の表情を、少女は思い出す。

少し困ったように自分を見ていたが、結局はあさぎが彼に気持ちをぶつけたがっていることを受け入れてくれた。そういう責任感が強くて少し優しいようなところは、昔とちつとも変わっていない気がする。

そしてあさぎはそのことには安心させられた。だから不安でも、彼に賭けてみたいという気持ちにさせられたのだった。

しかしこの気持ちは、駅で彼を毎日探したような行動に現れているような、恋心——などという甘いものではない、もっと恐い何かだとあさぎの心が前から叫んでいる。

見えそうで見えない答え。自分の気持ちが、考えても中々上手くまとまらないので、あさぎは思わず携帯電話を開けた。暗闇の中それはまぶしく光った。

その光の中に、彼から初めて届いたメールが浮かび上がる。

.....

昨日の夜のことだ。突然携帯電話のメール受信の音楽が鳴り出し、あさぎの胸が高鳴った。

アドレスを交換し、会って話そうと約束し——まだ着信メロディは個別にしていなかったが、それは清矢郎からであった。

本当に来た……とひどく安堵して、思わず少女の頬が緩んでしまふ。あれから四日経っていたが、待てどもメールが届かなかったのだ。こちらからしようかどうか迷っていたところだったのだ。内心では諦めかけていたので、嬉しさもひとしおである。

すぐに返信しようとしたが夕食の直前だったので、母親に怒られてしまい出来なかった。しかし嬉しさにドキドキしているような胸では、食事の味など分からなかった。

夕食後、あさは部屋で、メールをじっくり確認した。

絵文字など使わない、彼らしいぶっきらぼうで短い文章。こんな短文では件名だけで事が済んでしまいそうである。

もう少し色々書いてくれればいいのにと、メールをもらえばもらったで、勝手なことを思うのが乙女心である。後で一番好きな曲を彼の着信にしようと思った。彼に聞かれても恥ずかしくないようなのがいいな、と。

それはさておきメールの内容は、『日曜日 午後一時』とだけあった。

午後一時がなんだよ！とあさは突っ込みたくなったが、都合はまったく悪くなかったなのでそれにOKの返事と場所はどうしようという返事をした。

二度目のメールが来るのを、あさはまた緊張してベッドの上で正座までして待っていたが、中々返信がこなかったため、苛々しても仕方ないから風呂にでも行こうとあえて無視した。

そして風呂から上がると……律儀に返信が来ていた。

向こうが提案してきた場所は前言ったとおり、二人の祖母の家の

あたり——と言っても今はもう取り壊されているから、外で話をするとということだ。

二つ目は彼の家。と言っても、清矢郎の両親がいるかもしれず、あさぎにはためらわれた。

どちらも嫌ならそれ以外の場所でもいいと言われ、一瞬あさぎは喫茶店なども考えたが、如何せん、どんな話になるか分からないので公衆の面前では話しづらい。

よって懐かしいことと、はじまりの場所でもある、祖母の家の跡に行こうとあさぎは返信した。

はじまりの場所に戻れば、何か大事なことが取り戻せるかもしれないような気がしたのもある。その待ち合わせが今度の日曜日。梅雨も明けた、夏休み直前の日曜日にあたる日だった。

.....

そして一晩が過ぎ、金曜日となった現在に至る。

昨晚のメールが来た時のときめきは少しばかり収まってきたが、会う時のことを想像するとまた別のことで胸がはやってくる。あさぎは忙しい。

——何着ていい……。

何を話すのか、自分が清矢郎のことをどう思っているのか、本当は先にそちらを考えなくてはいけないのに、考えてもまとまらないからと、あさぎはどうでもいいことを考え始めた。

どう思う、金魚、と思わず幻覚に話しかけそうになる。やばいやばい、とそれはどうにかとどまった。

しかし「明日の服」はどうでもいいようで、女の子にとっては実は重要なことであるのだ。

だが、相手は清矢郎だ。パジャマ姿からジャージ姿から、はんてん姿から、子供の頃の話であるがあらゆる恥ずかしい姿を見せている。それこそこの前のように頬にクリームをつけたような間抜けな顔もあさはきは見せてきた。

今更飾ることはないのだが、やはり気になるのがこれも乙女心というものだ。

机の電気スタンドだけをつけて、あさははタンスをひっくり返し始めた。今年流行の夏物をまだほとんど買っていないが、アルバイトをしていないのでお小遣いからであり、贅沢は言えない。

去年のもので今年も着れそうで、それで……。ああまず、パンツがいいのかスカートがいいのかという問題から始まって……。こそそと服を取り出しながら、あさはは頭を悩ませる。

Ｔシャツはこの白いのにするとして、下着は——……。って——！

そこではたと、あさはは気付いた。心にふと浮かんだ、妖しい仮定を。

彼が「前科者」で、高校生同士で、二人きりで会って——。

……まさか、……ねえ？

「そんなこと」、にはならないよねえ……？？

「ならないよ、ね……」

そう呟く少女の目の前を、赤い金魚がふわふわと、からかうように飛行していく……。

その瞬間、あさはは彼との具体的な「その行為」を思わず想像し

てしまい、急に全身が熱くなった。

恥ずかしくて叫びだしたくなり、とりあえずばたばたと一階に下りて麦茶を一気飲みし、がはがはと咽せ、母親に「何時だと思ってるの！ 静かにしなさい！！」と怒鳴られながらまたどたと二階の自分の部屋に戻ってドアを閉め——、は——と大きな息をついた。

そして先ほどの恥ずかしい仮定をもう一度、考える。

——「そういうこと」も、有り得るの！？

しかしあさはきは首を振って、この突然の思いつきに動揺した心を取りあえず落ち着かせる。風呂上りの湿った長い髪が首や頬にまとわりついた。

まずそれ以前の問題で、清矢郎はあさぎのことを無視しており、彼女のことを嫌っているという可能性があるのだ。

それに彼には、他に誰か好きな人がいるかもしれない。自分が「話したいことがある」と頼んだから、きつと仕方なく会ってくれただけだろう。だから、そんなことをされる筈はない——あさはきはそう思うことにした。

第一、彼氏でもない人とそんな関係になることはよくないことだと、あさはきは思う。何より血の繋がりもあるのだし、そんな関係になつてしまえば後が大変だということも分かっている。

それこそ子供が出来るかもしれない行為であり、何より相手に身を預けたのに、一回限りで終わりということになつても、少女は耐えられない。

未経験のことに興味はあつても、やはり実際に「それ」……自分がセックスをすること……を考えると、あさはきはまだ恐くて仕方がないのであつた。

それに清矢郎が何故あの日あんなことをあさはきにしたかは分から

ないが、基本的に真面目で、荒芝の言葉ではないが、一徹な男だ。間違ったことや不実なことはしないだろう、とも彼女は思っていた。そこであさはもう一度は「っと大きく息をつき、自分の考えた恥ずかしい仮定を追いやった。

——そんなことになるわけないんだから、下着は普通のをつけていこう。スカートも……誘ってるみたいだから、やめておこう。あさは心の中でそうごによごに言い訳のように呟くと、散らかった服をまたタンスに押し込んだ。

金魚が二匹ダンスをしている。金魚の数はそれ以上、増えなかった。自分が理性を失わなかったことには、彼女は少しほっとしていた。

しかし、そこで素朴な疑問が心に浮かぶ。

……そもそも自分は、彼と「したい」のだろうか？

——運命の日まで、あと二日。

第15話 夏

そして明けて土曜日となった。ついにあさぎと清矢郎との約束は明日に迫る。

今日のあさぎの予定は誰とも約束がなく、土日には部活もない。妙に落ち着かずそわそわしていた彼女は、午後から自転車を走らせ市立図書館へと向かった。

暑くはあったが、その日差しと自転車で切る風が少女にはかえって清涼しく感じた。

心がはやって集中出来ないが、冷房の効いた中で本を漁っては閉じていく。あさぎはしばらく図書館に居座り、久しぶりに二冊本を借りて、コンビニでアイスを買って帰った。家には誰もいなかった。そして動きやすく涼しいハーフパンツに着替える。今日は髪もサイドでひとつに束ねている姿だ。あさぎは居間の絨毯の上に胡坐をかくと、扇風機の風を「強風」にして浴びながらアイスの袋を開けて、はくりとかじった。

思わず家から飛び出したが、——あと、二十四時間をきってしまった。明日清矢郎と会って、この四年間に決着をつける、かもしれないのだ。

昨夜はあのまま考えを中断させて寝てしまった。あさぎは動きを止めて、白い壁をじっと睨むように見つめながら、昨夜最後に浮かんだ命題を考える。

——私は「彼」と、したいのか？——

ひとつだけ確かなことは、既にあさぎは自慰行為の時に「彼」を想像してしまっているということ。

携帯電話で手軽に読めちゃう官能小説のようなものを読んで興奮することもあるが、その妄想すら彼に重ね、少女の欲求は、結局「彼」に還ってくる。

一体「それ」が、どうして「彼」なのだろうか？
初めて自分を「女」として見た相手だからか。

だが、では彼と一回だけ性交渉できればすっきりするのかと言われれば、そうではないとあさぎは思う。それはきつと、性欲とは別の感情があるからではないか。
彼と「する」なんてことはとても怖いと思うものの、といって彼が他の女とそういう関係になるのは嫌だと、あさぎは既に自覚している。

そもそも電車で懸命に清矢郎のことを追いかけていたという事実もあり、「自慰の時に想像する」「やりたい」「彼のことが好き」、という単純な図式と考えられるのだろうか。

……確かに、嫌いではない、とあさぎは思う。嫌いな男で想像して自慰をするわけがない。それに、子供の頃は彼に少しばかり憧れていた。

——では、今は？

あさぎは何度もしてきた心の中の自問自答に、やはり首を振る。

——違うんだ。これは、「恋」なんかじゃない、と。

これはきつと、誰にでも胸を張れるような優しい感情ではない。あさぎの想像する「恋」とは、相手を慈しみ大切にするような、自分がそれだけで幸せになれるような、そんなあたたかいものだつた。自分を認めて欲しい、どうしてそれをしてくれないのと苛々するこのどろどろしたこの感情は、それとは全く違う気がしていた。きつと、もっと——恐いもの。よくないもの、汚くて黒いもの、

そう言ったものであると、あさぎはどこかで確信していた。

赤い金魚は何故飛ぶのか。少女の心を慰めるようにそれは飛び始め、今でもふわふわと緩やかに可愛く飛んでいる。

だがそれは時々、あさぎの眼には揺らめく炎のようにも見えた。

これがかもしも、普通の感情であつたら、普通の純粋な恋心であれば——このような幻影は見えなかったのではないか。

その仮定にあさぎは少しぞくりとする。

あの日、「被害」を受けたのは、女である彼女の筈だった。それなのに、この罪悪感はどうしてあるのだろうか。

性的欲求と共に見えるあの金魚は、何を象徴している？

——自分は一体、「何」を求めて——……。

そこであさぎがはっと気がつくと、アイスはどろりと溶け、手の上に白い液体となって零れていた。それを慌てて舌で舐めた。甘いバナラの匂いが鼻をつく。目の前を金魚は呑気に飛んでいた。

とても綺麗な赤い色——だが、それを見ている自分の心はどうなのだろうか？とあさぎは己の心に再び問いかける。

きつと、この幻影は自分の心を映し出しているものなのだろうか、あの赤い色は何を表しているのか？血の色？それとも炎の色？

——自分は、彼を、どうしようとしているのだろうか。

赤い金魚が踊る様が、少女には狂った笑いにも見えた。

.....

あさは短く息を吐き出す。

誰も居ない家の二階で今日は小さな声を上げながら、きつと生理が近いからだと自分に言い訳をして、また快楽を貪っていた。

考えているうちに分からなくなってきた、あの日のことと明日彼に会えることを想っていたら、なんとなく「したく」なってしまったのであった。

これはもう、一種の逃避行動かもしれないと、少女は自分でも自分の精神状態が心配になってしまふ。昼間だというのに、情けないくらいその快楽に負けてしまっている。

乱舞する金魚の中に浮かぶ、ひとつの幻像。それがあの男の姿。

『その視線をこちらに向けて！』と、少女が虚しく幻影に呼びかける中、思い出すのは最後に電車で交わした彼の鋭い視線のこと。

——その手で、その声で、その……

ふわふわと身体が浮き上がるような、熱に浮かされたような快感の中で、制御出来ない想いが高まる。

どれだけの言葉を並べたところで、ただの欲求であり、本能であり、本性でしかないのだ。それが——。

「あ……っ！」

そこで全てが崩れ去り、身体がびくんと跳ねる。

その瞬間、少女がうわ言のように口にしたのは——、今まで唇を噛んで堪えてきた、「あの名前」、だった。

遂に彼の名を、その行為の最中に、呼んでしまったのだった。

いつもの痙攣が収まった後、ねっとりとした糸を引く指を少女は虚しく身体から引き出す。

あさは自分に絶望していた。何を言えがいいのか、何を清矢郎に求めるのか、言葉に出来るものはまだ何もないのに、身体はとっ

くの昔に分かっていた。

答えはただひとつだった。たった今、この身体が欲したこと、それこそが「答え」であるのだと、あさは遂に確信した。

「私は……」

……のだ、彼を。

金魚の中で、乱れた衣服のままゆっくり起き上がった少女は、ぶるりと震えた。

第16話 はじまりの場所

答えはもう出ていた。ただ少女はそれを認めるのが恐くて、直視できないでいただけなのだった。

生理前の微熱で火照る身体を持て余し、自分の気持ちちが整理出来ないまま、あさは運命の日曜日の朝を迎えた。

次の日も朝から良く晴れた暑い日で、蝉の声が益々温度を感じさせる。

結局、あさはいつもの格好で出掛けた。ブーツカットのジーンズに、安いＴシャツ、それに一番お気に入りのノースリーブのワンピースを合わせる。そして足には花のモチーフのついた、歩きやすいヒールのないサンダルを履く。

悩み事の合間に同じくらい散々悩んだ服装だが、あさぎのこのチョイスは多分無意識のうちに、自分の心の奥底にある「それ」に抗おうとして、あえて色気のある格好を避けたのだと思われる。

太っているどころか寧ろ痩せていて、胸もあまりない自分ではワンピースだけだとかえって貧相に見えそうだったのでやめた、という計らいもあったが。

あさは遅めの朝食をランチとして食べ、母親には友達と遊びに行つて来ると嘘をついて家を出た。また少しちくりと心が痛んだ。真夏の真昼のアスファルトは暑く、川からの風があるからどうにか汗だくにならずにいられた。少女は眉毛の処理くらいはするが、化粧は日焼け止めを塗るくらいしかしていない。

一応、制汗剤くらいは身だしなみとしてしている。川風に乗って、その石鹸の匂いがあさぎ自身の鼻に触れた。

そして電車に乗り、あさは約束の場所へと向かった。

いつも通学で乗り降りする駅を越え、今日は更に十分先の駅まで向かう。そこからバスに乗り、保育園の前のバス停で降り、神社を過ぎ、豆腐屋の角を曲がり――、家を出てから約一時間後、あさぎは久しぶりに祖母の家へと辿り着いた。

本当に、彼は居るだろうか？とバスに乗る頃からばく鳴っていたあさぎの心臓が、更に大きく波打つ。

「あ……」

「それ」を見た時に、あさぎは思わず声を上げた。それは二つの理由からだった。

本当に、居た。居てくれた――ひとつめはそんな喜びからだった。清矢郎は、彼らしく律儀に先に待っていた。Ｔシャツに穿き古したジーンズという、彼もまた飾り気のない服装だった。

そしてもうひとつの理由は……、

「ないね……」

清矢郎は、鉄柵に凭れて携帯電話をいじっていたが、あさぎの第一声に電話を閉じるといつものとおり、少し目つきの悪い視線を向け、「去年くらいにこうなった」

それを逸らしながらぼつりとそう答えた。

二人が幼い頃、夏休みを一緒に過ごしていた祖母の家は、既に取り壊されていた。それは聞いてはいたものの、その家があった場所は借りていた土地の所有者である隣の工務店の敷地となり、駐車場として広げられていた。その光景はあさぎにとって少々衝撃的に感じた。

そこにはあの古くかび臭い家も、遊んでいた広い庭も鬱蒼とした植え込みも何もなく、ただコンクリートが無機質に敷き詰められているだけとなっている。

「無常なもんだね……」

あさぎは今時の女子高校生らしくない感想を口にしたが、彼女らしいと思ったのか、清矢郎は特に反論はしなかった。

だがその言葉こそ真であった。二人の身体が、考え方が大人になりゆき、変わってしまったように、もう元には戻れない。

時も、この関係も。同じでいられるものなど何もない。流れる水のように全てを後ろに置きざりにして、進化していく。

この手には何も残らない。振り返ることはあってもそれは幻で、もうその中に戻ることは出来ない。

あさぎはその現実を改めて思い知らされた気分だった。

此処に戻ってくれば、元通りの二人に戻れるかな——などと言う、少女の儚い最後の望みは完全に絶たれたのであった。

「……」

休日で無人の工務店の焼け付くアスファルトの前で、炎天下の中、二人は無言になってしまった。蝉の声が近くの神社から聞こえてくる。

清矢郎は黙ったまま手に持っていたペットボトルの水の蓋を開けると、勢いよく音を立てて飲んだ。

その鳴る喉仏を、隣で見上げていたあさぎは、思わず、こう言った。

「一口、ちようだい」

清矢郎は手を止めてペットボトルを下ろすと、彼を真っ直ぐに見つめたあさぎを意外そうに見た。表情はあまり変わらないながらも、口を少し横に引いたような顔は、驚いたそれなのだろう。

ペットボトルを持つ大きな手、少し濡れた唇と顎、それをとってつけたように拭う少年っぱさを残した仕草。それらが少女の視界にひとつずつ刻み込まれる。

これを提案したのは、「確認」したかったからだ、昨日の仮定を。

——そして、あさぎの予想通り、金魚は舞った。

清矢郎の後ろにひらひらきらきらと見えた。

その時少女の中で、昨日の「確信」がもう一度確かなものになったのだった。

彼は一瞬何か考えたようであつたが、そのままペットボトルをあさぎに渡した。

あさぎはそれを受け取るとその口を拭わず、彼の真似をして豪快に音を立てて飲もうとしたが、格好悪くも咽てしまった。

それでももからからになっていた喉に、水の潤いは気持ちよく、少し頭がすっきりした。

そしてその若干冷静になった頭であさぎは思ふのだった。彼にまた口元を拭わずペットボトルを返しながら、——間接キス、しちやった、と。

清矢郎は何も言わずに、またペットボトルを受け取った。そして彼もまたそれを拭うことなく一気に口元まで持っていき、最後まで飲み干した。

無言のまま、蝉の声だけが虚しく聞こえてくる。しかし彼がそれを飲み終わった時、その蝉の声に触発されたように、

「——あのさ、」

「神社……」

二人同時に口を開いた。どうやら同じ事を考えていたらしい。思わず視線を交わすと、互いの考えていることが伝わった気がした。

確かに、このような暑くて座るところもない場所で話も出来ないため、それこそ子供の頃、一緒に遊び、そして夏祭りにも行った近所の小さな神社へと二人は移動した。

歩いて五分の距離であるが、これまた無言で歩いていく。

あさはぎはぺたぺたとサンダルの音を立てながら、清矢郎の広い背中を追いかけた。

第17話 すれ違い（前編）

杉の木が鬱蒼と生えている神社に、あさは清矢郎を追いかけ辿り着いた。この景色は、四年前に見た時と変わらないと思った。

多分、あの時があさがここを訪れた最後だろう——彼に触れられ恐くなって逃げ出した時が。

蝉の声が上から注ぐように降ってくる。この場所ではたまに子供が遊んでいたりと、氏子の役員である年配者が集まったりしていることがあるが、今日は誰もいなかった。

神社と言っているが、土地の神様が祭られているだけの小さな規模の建物である。そうは言っても社は古いながらも改修もしており、未だにしっかりと立っている。

二人は誰も居ない神社に近づくと、鳥居からは死角となる軒下の石の上へ暗黙の了解のうちに腰掛けた。

気まずい沈黙の中、あさは足をぶらぶらとさせた。

木陰の下にいたのでそれほど暑くは感じられず、ざわざわと枝を揺らす風と音が少女の身体には心地よい。

社の後方には竹が植えられている。高いところで枝を鳴らすそれを、あさは斜め上に見上げた。その目には竹の枝の中、赤い金魚が遠くを飛んでいる様子が映った。

そしてあさぎにはこの静かな風景に、隣の彼はとても馴染んでいる気がしていた。

そうは言っても話したいことがあると誘ったのはあさぎの方である。受験生の時間を無駄に割くわけにもいかず、何よりこれ以上鬱陶しがられたくないものである。

清矢郎はまたあさぎの方を見なくなった。どっかりと足を開いて

座り、頬杖をついている。

取り付く島もない様子に、どう話しかければいいのやらとあさぎは困るが、幼い頃から彼はこんな感じだったようなことを思い出していた。こんな彼に一方的に、甘えん坊のあさぎがぺらぺらと話しかけていたものだ。そして彼も無愛想ながらも優しくその相手をしてくれていた。

あさぎはなんとか会話の糸口を探そうと、清矢郎の方を覗き見る。

あさぎは己の持っているどろどろした恐ろしい感情を自覚してしまったものの、言葉に出来ず困っていた。ただ恋の告白をすれば終わり、ではないから余計に難しい問題なのである。この四年間の膿は。

しかしそれは、「清矢郎」が居ないことには始まらないのも確かであった。彼が自分を避けていたり、誰かのものになってしまっただろうにも出来ないことなのである。

あさぎはそこでふと気になったことがあったので、ぽつりと問いかけた。

「大学……」

その言葉に清矢郎の腕がぴくりと反応した。あさぎの方は見ないままだったが。

「どこ受けるの？」

あの地区内一の進学校で成績がある程度上位ならば、日本全国何処でも好きな大学を受験出来るレベルである。ここでいきなり、北海道など遠い地方に行きたいと言われたら困ってしまう。

本当は「彼女いるの？」とか「好きな人いるの？」とか、そういったことを少女は聞きたいのだが、いきなり聞けるわけもなくまずは外堀から攻めているのであった。

急に何だ？と清矢郎も思ったらしいことが、空気で伝わってきたが、

「N大……」

と彼は隣県にある国立大学の名前を呟いた。しかもそこは、清矢郎の家から通えない距離ではない。あさぎは内心ほっとした。

「行けるとは限らんけどな」

清矢郎は、「ダメなら」と別の大学の名前を二つ三つ上げた。

その学校名を聞き、近場の県の大学を挙げてくれたことには、あさぎはやはり安心した。滑り止めの大学の場合、下宿をしないと無理だろうと思うが、滅多に会えないほど遠い距離だというわけでもない。

もちろん第一志望に受かってくれればそれにこしたことはないが、まあなんとかなるかな、とあさぎはこっそりそんなことを考えていた。

しかし無いようで二つの年の差がしっかりとあることを、あさぎは改めて実感した。

彼の方が一歩先に社会に出てしまっただな、と改めて少し寂しい気分になり、やはり自分がどれほどちっぽけで彼には足りない存在なのかと少女は不安に駆られる。

「そっかー」

あさぎはまた足をぶらぶらとさせながら、そう呟いた。

「それが、なんだよ」

頬杖をつきあさぎと一緒に目の前の宙を睨んだまま、清矢郎はつつけんどんに尋ねたが、

「べつに……」

あさぎは曖昧な返事をした。

「こつちを見て」「傍にいて」「誰のものにもならないで」、多分この三つくらいの言葉であさぎの望みは表現出来るだろう。

しかしそれを要求する勇気があさぎにはまだなかった。

——折角のチャンスなのに、これ以上悶々としていたくもないのに。どうしよう、どうしよう……。

困り果てたあさぎは、もういつそ理性も何もなぐり捨てて、金魚が飛ぶ時のこの汚らしい感情を彼にぶつけてしまおうかと自棄くそな気持ちになるが、そんなことをして清矢郎に引かれてしまえば、何にもならない。

あさぎはぎゅっとワンピースの裾を握り締めた。何か、何か——と、あさぎがとりあえずまた口を開こうとした時、

「話してえことってさ、」

突然、少し乱暴な口調で清矢郎が口を開いた。あさぎが弾かれたようにもう一度清矢郎を見上げると、彼はゆっくりと彼女の方を振り向いた。

そして彼は観念したように、おもむろに眼鏡の奥の眼をあさぎに向けた。その唇がゆっくりと動く。

「四年、前のこと？」

少年の低いその声に、まるで心臓が抉られたかのような衝撃が少女に走った。

彼女の世界から全てが遠のき、蝉の声と木や竹の葉が揺れる音がやけに大きく聞こえた。そしてその目の前を金魚がざわつと飛び立った。

あさぎは恐い、と思った。いざとなると、その時の話をする事が。

それは清矢郎やあの日のことが恐いのではない。眼を向けたくなかった自分の正体不明の感情に、いよいよ向き合わなくてはならないことが恐かったのだ。

どくんどくと耳まで聞こえそうなほどの大きな心臓の音を、あ

さぎは感じていた。まさか自分を無視し続けてきた清矢郎の方から、こんな話をふつてくるとは思わなかったからだ。

しかもその黒い瞳があさぎを見据えている。求めていた筈なのに、それは少女にとって恐くて仕方ないことであつた。

「うん……」

あさぎがなんとか振り絞ることが出来た言葉はこれだけだつた。

清矢郎は小さく舌打ちするところがりと頭を掻いた。

四年前の出来事は二人の間でずっとタブーとされてきたが、触られたあの瞬間を今二人で一緒に思い出しているんだなと、あさぎは思った。そう思うと恥ずかしくなり、少女の身体がかあつと熱くなつてくる。

あの日小学生だつたあさぎに触れてきたその手——それは、今その隣に座つて膝の上に置かれている大きな手と同じもので——が、自分の胸や陰部を触つたことを、あさぎはまた思い出す。

そしてその手が今の自分に同じように触れることを思わず想像して、またずくと少女の胸が大きく疼く。

だがどうすればいいのか、何を言えばいいのか、あさぎの口からは未だ言葉が出てこない。

ようやく今、二人してあの時間へと戻ろうとしているが、この瞬間に何を言えばいいのか、少女は急いでそれを考えていた。

とりあえず彼がああの出来事を認めてくれたのは、あさぎにとって嬉しかった。この四年間、彼の中に自分はちゃんと存在していたように感じられたからだ。

だがそれでも、彼が自分以外の女性を想っていた場合はどうすればいいのか。結局、そんな恐さも手伝つてあさぎは結局言葉が紡げない。

ワンピースの小さな花柄を凝視し、ひたすらそれをいじくつてい

る。困ってしまった彼女だが、蝉の声が責めるように鳴り響くこの重い静寂の中で、それを破ったのはまた清矢郎の方だった。

「俺は、どうすればいい」

あさがまた清矢郎を見上げると、彼は開いた膝の上に肘を置き、その両手を握って宙を睨んでいた。

「あさぎに、何をすればいい」

それはきつと長いこと彼の胸の中に仕舞われていた言葉ではないだろうかと思われた。

無口な彼は、浅はかな言動はあまりしない性分だ。必ず考えた後に言葉を発し、一言一言に実のある思いを込めている。

そう言った後、清矢郎はあさを振り返った。それは昔と同じ、彼らしい真っ直ぐな視線に戻っているように感じられた。だがどこか苦悶の色が浮かんでいるようにも見える。

第18話 すれ違い（後編）

その顔は恐いと形容されそうなほどの仏頂面であつたが、昔から彼を知っているあさぎにはその表情が自分を憎んでいる意味でのそれではないということは分かった。

そしてこんな時なのだが、久しぶりに自分の名前を呼ばれて、少女は呑気にもどきりとしてしまう。

緊張はするし困つてもいるものの、それでも彼が今、「自分」を見てくれていることはあさぎにとつて嬉しかった。

そう思うのに、清矢郎との間にまたふわりと金魚が飛んできた。ということとは、そう、それでも己の欲求は、まだまだ満たされていないのだ。きっと、この幻影が見え続ける限り、少女はまだ何か足りずに求めてしまつているということなのだろう。

「どうつて……」

しかし、どう言い返すべきか。あさぎは口の中で呟くと、清矢郎から視線を逸らしてしまった。

清矢郎の言葉から、あんなことをしたものの元来誠実である彼は、あさぎがあのかを怒っている、もしくは傷ついていると思つているのだろう、それを罪に感じて、償いたいと思つているのだろう。

確かに憎んでいた……のかもしれない、とあさぎは今までの感情を思い出す。だがそれは彼の態度に、であつて、彼の行為に、ではきつとなかった。

二人の関係をすつきりさせたいとあさぎは思うものの、彼の考えていることと、彼女の考えていることは、全く違うようではないかと思つた。

清矢郎があさぎに対して考えていることは、「償い」である。

しかしあさぎとしてはそうしてもらえれば納得できるのか、と言えばそうではない。何をされてもこの四年間の想いは消すことが出来ないし、彼の言う「償い」の形が欲しいわけではないからだ。

だからあさぎは清矢郎の問いに答えられなかった。

あさぎが何も言えないのも仕方ないことと思っているのか、清矢郎は無口な彼にしては珍しく言葉を続けた。その苦悶の表情が、自嘲的な笑いに変わる。

「確かに、謝って、済むことじゃねえよな。……それであさぎに許されるんなら、いくらでもするけど。もつと前に、そうしたって良かったんだ。——でも出来なかった」

清矢郎はそこで言葉を区切るとひとつため息を吐き出した。

「いくら謝っても、自分のしたことには変わりない。取り消せない。そう思ったから、謝ることも意味がない気がしていた。それでも、謝るべきだったんだろうな、あの時に」

あさぎには清矢郎の考えの全ては分からなかった。だから彼が何を言おうとしているのか、必死に集中して彼の声を聞いていた。

「謝りそびれて、時間だけが経った。そうなったら益々謝れなくなつた。だってあさぎは忘れてえだろ、あんなこと。無かつたことにしたい、思い出したくもない、俺なんかの顔も見たくない、声も聞きたくない——普通、そう思うだろ」

「——」

その清矢郎の言葉を聞いた瞬間、あさぎの心の中でかちりと鍵が合わさつたような音がした。

「だから……無視してたの？」

驚きと共に呟かれた少女の言葉に、少年は彼女の方を見ないまま少し沈黙を置いて頷いた。

——なんだ……。そうだったのか。

あさぎはその答えに、急にこれまでにないほどの安堵に包まれた。あれだけ自分に視線を向けてくれないこと、その場に居ないように扱われていたことに、苛立ち、苦しんでいたのに、嫌われていたわけではない、否定されていたわけでもない——ただそれだけの事実、少女は泣きそうなくらいほっとしてしまった。

彼自身が自分の目の前から彼の存在を消そうとしていた、清矢郎がそんな風に自分のことを考えてくれていたことにあさぎは今やつと気がついた。

しかしそれは誤解だ、と思ったあさぎは口を開こうとしたが、清矢郎の言葉はまだ続く。

「だから、お前が電車で話しかけてきた時は驚いた」

清矢郎は珍しくふつと笑った。それはこの前、あさぎが勇気を持つて彼に「話がしたい」と提案した時のことを指していた。

「逆に余程、腹に据えかねたのかとも思っただけど」

清矢郎は溜まっていた罪悪感を吐き出すことによって、どこか肩の荷が下りたのか、あさぎの方に自然に視線をやった。二人の視線がまた結ばれる。

「——ごめん」

清矢郎の言葉と真剣な眼差にあさぎは息を飲んだ。

「今更だよな。謝るぐれえなら最初からするとか、謝っても何も取り返せねえってことぐらい、分かっている。だからあさぎの望むようにしたい」

その言葉は、低い声で恐い顔をしているがどこか優しい響きとしてあさぎにも伝わってきた。何よりも、彼なりにあさぎのことを思いやってくれていることが。

これほど優しい人なのに、彼はひとつの罪を犯してしまった。そしてそれはもう消すことは出来ない。その苦しみの中に彼はいた。「二度と顔見せるなっ」と言えばそうするし、殴りたいって言えば大人しく殴られるし」

彼は嘘をつかない。だからきつとあさが彼を殺したいと言えば大人しく刺されるかもしれない。命を粗末にするとはい別の問題で、彼なりのけじめのつもりでそうするものと思われる。

清矢郎はあさぎの次の言葉を待っていたようだった。しかし、突如として少女の口から発されたそれは、

「——やめてっ！！」

そんな鋭い声だった。

あさは思わずそう言ってしまった後、はつと我に返り清矢郎の顔を見上げた。彼はそれは当然の反応と言う様な、諦めきつたような、とても沈痛な表情をしていた。

だが、あさぎの要求と自分のした罪の全てを受け入れるような、意志の強い眼光もまた残っていた。

しかしそんな表情は、あさぎの本当に求めているものではなかった。あさが今思っていること、彼の予想とは全く違うものであると思ひ知らされただけだった。

二人の思うことが、すれ違ってしまっている——。

受け入れてもらえるか分からないが、自分の欲しいものはそれではないのだ。だから彼女は彼の言葉を遮った。

あさが四年間抱えていた思ひは、今のこの爆発しそうな感情は、清矢郎の想像しているようなものではない。彼が罪を償えばそれでいい——そんな簡単なことではない。それこそ、それくらいで済まされるものではないのだ。

赤い金魚が飛んでいるのが、またあさぎの視界に入った。これは自分の心の内に収まりきれなかった感情の漏れが、幻覚として具現化したものなのかもしれない、と今まさに気がついた。

そしてその溢れ出した想いのままに、溜まっていた彼への気持ちをもう何も先のことなど考えず、あさぎは遂に口にしてしまったのであった。

第19話 つぐない

清矢郎に謝られた瞬間、あさぎの心はささくれ立った。何か「違う」、そんな言葉は聞きたくないと強く思った。その理由は、ひとつだった。

「あ、謝らないでよ……」

あさぎは自身の想いを彼にどう伝えてよいのかまだ整理されていないものの、彼に謝られることにはひどく反発しなくなった。その言葉だけは聞きたくない——その違和感と苛立ちとが引き金となつて、あさぎの四年間の想いは爆発してしまった。なぜなら、

「謝ったら、それでおしまいなの？」

「……」

「謝つて、私がいいよって言ったら、それで、おしまいなんでしょ？　せい——ちゃんは、それでいいんでしょう？　ずっと謝りたくつて、私にいいよって言つて欲しくて、そうすれば満足なんでしょ？　それで終わりにしたいんですよ」

あさぎは清矢郎の眼を真っ直ぐに見ていた。彼は堰を切つたようなあさぎの言葉に、驚いたような困つたような顔をして彼女を見返していた。彼もまた謝つても何もならないことは分かっていたので、反論せずに少女の話をただ聞いている。

震えそうな声で、あさぎは続けた。

「謝るってことは……、無かつたことにしたいんでしょう？　全部、リセットしたいんでしょう？」

自分には無かつたことに出来ないのに、清矢郎はそうしたいのか？　彼からの謝罪の言葉を、あさぎはそのように捉え、急激な怒りと焦りを感じた。

確かに罪を犯し後悔している側にすれば、贖罪したい、楽になり

たいと思うだろう。清矢郎は謝ることで、あの四年前の彼の罪を浄化してしまいたいのだろうか。

そう思うとあさぎの心が不安に揺さぶられ、眼の前の男が憎くて仕方なくなる。

あさぎの方は、忘れるどころか、あの日から日ごと夜ごと、この男の影が濃く色づいていくというのに。あの日、金魚を見るようになってから、ずっと募ってきた感情があるのに――と。

罪を犯された方は、その瞬間から全ての感じ方、考え方が変わってしまふのだ。己の人生すらに影響を及ぼすような出来事を、どうしてなかったことに出来るだろうか。

もちろん清矢郎があさぎに対し償いたいと思う、潔く誠実な気持ちは伝わってくる。しかしあさぎはそれをされることで、あの日の、そしてあの日から彼をずっと想っていた己の存在が、無しにされるような気がしてしまったのであった。

――それで清矢郎は楽になるだろう。でも、自分はどうなるのか！

あさぎは清矢郎を睨みつけるように見ていた。

清矢郎とて、まだ大人ではない。しかし少女は彼が自分に罪を犯したということを盾にして、この従兄の少年に、剥き出しの己の感情をぶつけてしまっていた。

あさぎが彼の謝罪を受け入れてしまえば、あの日のことは彼の中でリセットされてしまふのか、そう思うと少女の動悸が速くなってくる。

生理前の微熱と、夏の暑さが手伝って、あさぎの頭がぐらくらとしてきた。少女の心の歪みと共に、目の前の緑と陰の景色がぐにやりとねじれそうになっていく。

「謝らないで！――許してあげない！」

あさぎの詰るような声に、清矢郎はまた沈痛な面持ちに戻っていた。しかし何も言い返さず、ただ黙って聴いていた。

そしてあさぎもその表情を見ながら心のどこかで、自分はなんて子供っぽいことを言っているのだろう、なんて彼に対して酷いことを言っているのだろうと、自分自身に呆れていた。

確かに先に「悪いこと」をしたのは清矢郎である。しかし彼も覚悟はしていただろうが、全てを拒絶され、傷ついてしまっていることは、彼女にも分かっていた。

あさぎはそんな自分に嫌悪すら抱くが、それでも四年間耐えてきた身としてはやりきれない。

「許してなんか、あげない……一生、覚えてなきゃ、嫌だ……忘れちゃ、やだ……！」

「被害者」だと言いながら何をこの少年に要求しているのだろうと、あさぎは自分でもわけがわからなくなってくる。だが彼が自分への罪を清算して他の女性と幸せになるなんてことは、どうしても嫌だと思っていた。

あの日清矢郎に触れられて以来、あさぎの心が彼で占められてしまった。

そのことを清矢郎は知らないのだ。あさぎが金魚の幻覚を見てしまっくらい彼によって心を壊され、彼のことを性の対象として考えてしまうようになったことを。

そうすることで、あの忌まわしい思い出から少女が自分自身を守ってきたことを。

だがあさぎは言いながら、この言葉が相手を脅迫し、苦しめるものであるということも自覚していた。

清矢郎があさぎに対し何でもすると言った言葉には、彼の性格上、

嘘はないだろう。彼が自分に逆らえないことを分かっている、彼女はそんな我が侬を口にした。

そう思うと清矢郎に対し申し訳なくもなってきた、言い終わるとあさは視線を落とし俯いた。

視界に入る彼のその手に、せめてＴシャツの裾に、あさはいっそ縋り付いてしまいたいような気持ちになっていた。

——彼の足枷になどなりたくない、脅迫などしたくないと本当は思っていた。だが彼を誰にも譲りたくない、自分の存在を無しになどしたくない、という独占欲と自己主張も同じくらい強く抱いている。

少女が隠し、眼を背けてきた彼への想いは、いざ爆発してみるとやはり彼女自身にも制御出来ない恐ろしいものであったのだ。

——これ以上、言うてはいけない——。

心の中では、清矢郎を従兄として大事に思うあさが確かに存在してそう思っているのに、汚い欲望に負けたもうひとりの彼女が、畳み掛けるように、清矢郎へと更に衝撃的な言葉を投げつけた。

「責任、とつてよ……」

十六歳の少女に、最早自分を止めることは出来なかった。

若干十二歳にして、清矢郎によって性の入り口に無理矢理突き落とされた。あの時、彼によってあさぎの心は突然壊された。だから今度はあさが彼を——……。

——違う!!

そんな狂った考えも、心の中のもうひとりの少女が強く否定する。こんな風に彼を脅迫し、壊したいのではない。こんな風に、彼を手に入れたのではない。

「せいちゃん」はあさが幼い頃憧れていた家族である大事な男の子だ、とまだ僅かに残った理性と良心が、必死で己のこれ以上の暴走を止めようとする。

自分でも自分のことが段々恐ろしくなってきたあさが恐る恐る清矢郎を見上げると、彼はやはりどこか傷ついたような眼をしていたが、少女の要求の全てを受け入れる覚悟をしたような、寧ろそんな彼女を憐れむような、そういった眼もしていた。

——ああ、やっぱり、違うのに——。

あさは愕然とした。「責任」などという重い言葉を言っておいて、少女にはその意味も分かっていないが、もし本当に結婚して欲しいなどとあさが言えば、清矢郎は頷いてしまうのではないだろうか。

彼は自分に負い目がある以上、何を要求しても逆らえないのではないだろうか。そう思うとあさはぞつとした。

沈黙が一瞬訪れる。重苦しい空気の中、清矢郎は呟いた。

それは哀しいくらいに静かで優しく、強い意志を持った声だった。

「——分かった」

あさは想像通りの答えに、大きなすれ違いを確信し、思わず涙が溢れそうになった。

第20話 告白…？

少女の言葉は、もう何を言っても脅迫にしかない。今、彼女が何を要求してももう、それに従うことは清矢郎にとって「償い」でしかないのだ。

優しい彼により、彼女の望みはきっと全て叶うのだろう。彼は何を犠牲にしても叶えるだろう。

彼女の欲しいものは、こんなものではないのに――。

「違う、違うの……」

あさは首を振った。上手い言葉が思いつかない。言葉など使わず、彼に抱きついて全てを分かかってほしかった。

しかしそれは出来ないことなので、あさは清矢郎の方に膝を寄せ、その顔を見上げながら、自分のワンピースを千切れそうなほど握り締めていた。

「そんな、無理矢理、言うことかせたいとか、そんなんじゃないの、そんなことがしたいんじゃない……」

自分の想いが伝わらないのがあさぎにはもどかしいが、裸の心を彼にぶつけることも恥ずかしいと思っていた。

しかしもう、そこまで曝け出さないときつとあさぎの想いは伝わらないのだろう。このままでは、彼は償いの義務だけであさぎに優しくし続けるのだろう――、一生。

そう思った少女は誤解を解くために、思い切って彼に告げた。

「謝られたら、あの日のことが、チャラになっちゃう。無かったことになっちゃう」

――無かったことにしたいんじゃないのか？

清矢郎の心の声が、その不思議そうな表情に表れている。

「わ、忘れさせてなんか、やらない。無かったことになんか、出来ない」

あの日「あさぎ」という少女が其処に生きていた。それはこの少年に求められたことで立証されている。少女はその証を、奪われたくないと焦っている。たとえ、彼であろうとも。

「『私』を否定しないでよ！」

清矢郎が再び困惑の表情を見せる。それはそうだろう。「被害者」である少女にこんなことを言われたのだから。

しかしあの日からあさぎが性に目覚め、清矢郎の姿を追いかけるようになってしまった以上、あの出来事は彼女には否定することは出来ないのだ。「あの日の自分」を無しにしてしまえば、今の、この、彼を想う「自分」は存立しない——あさぎはそう信じていた。

そこでふと、あさぎは不安になった。こんな自分を彼はどう思うだろうかと。

変な女だと思うだろうか。だが先に変なことをしたのは、清矢郎の方である。

彼が自分を、このように壊したのだ。あさぎはそう思うと開き直ったように、清矢郎をまた睨み付けた。

「せ、せーしろーが、いけないんだ。——なんで、あんなことしたの!？」

結局、彼を責めることしか出来ない。

一体どちらが加害者で被害者なのか。一体何が、「罪」だったのか。

「あんなことしなければよかった」とあさぎ以上に清矢郎が苦しんでいることは、既にあさぎにも痛いほど伝わってきている。今の彼女が彼にしていることは、そんな彼をただ余計に追い詰め、苦し

めているだけだった。しかし、

「あんなこと私にしなければ、こんな気持ちに、ならなかったのに

……」

我慢できない己の苦しい想いを口走り、あさは泣きそうな顔で清矢郎の眼を見た。

あさぎに対し全てを受け入れ償うつもりでいた少年は、彼女の視線を決して逸らさなかったが、流石にこの言葉には少し驚きの色を浮かべていた。

彼がどう思ったかは分からないが、「こんな気持ち」とはどんな気持ちなのか、と問われるとあさは恥ずかしくて言えなくなる。

だがこの感情は、それこそとても熱くて狂氣的な、金魚の幻影すら見せてしまうほどの、強い、気持ちであるのだ。

——あの日見た、綺麗な真つ赤な金魚を、本当はもう一度見たい。そんな汚れた願望すら、抱いてしまうほど。

だが彼はそもそもどうしてあんなことをあさにしたのか。

いつそ「あさが好きだったから」とそんな単純で甘い理由であって欲しいとあさは思っていた。本当はそれを確かめたいのだが、全く違う理由であったり、昔はそうだったけど今は違うと言われるのも哀しいものである。

しかし清矢郎の真意は分からなくとも、ここまで言ってしまった以上、後は一緒だ。

堪えてきたこの鬱屈とした気持ちに我慢が出来ず、壊れそうなほどの胸の高鳴りの中、あさは思わずそのままぼろりと口走ってしまった。彼への、今抱いている本当の、気持ちを。

——このままもう、楽になりたい。

きつとこれで、全てが終わるんだろうな、と少女はどこかで予感して。

「——欲しい、の」

零れた少女の言葉に、少年の眼鏡の奥の眼が見開かれた。

……言ってしまった、と自分でも愕然としながら、あさは辛うじて言葉を続けた。

「どうしよう……もう、せいちゃんじゃないと、……だめみたいに、なってる……」

少女の拙い言葉では、他に言いようがなかった。

欲しいものは償いの言葉でも行動でもない。「好き」なんて生易しい気持ちでも、そういう相手でもない。

きつとこれは、四年前のあの時に小さく息づき、ずっと育ってきた欲望に違いなかった。

欲しいものは——彼自身、なのだ。

清矢郎の後ろを異様な数の赤い金魚が空へと飛び立ち、今のあさぎの心を象徴していた。この金魚が見える限り、自分はこの男を欲するのだろう、と少女は呆然としながら思っていた。

まだ子供の部類であるというのに、溢れ出した己の「女」の狂気にあさは絶望する。本当は前から気付いていたのに、眼を背け続けてきた、それ。

しかし後悔してももう遅い。この四年間溜めてきた自分の想いを告げてしまった。

今までの色々な出来事や少女自身の悶々とした想い、それらを端的に言えば、きつと、そうなるのだろう。

彼はあさぎの「好きな人」——などではなく、「欲しい人」——

なのだと。その心も、その身体も。

遂に言ってしまったものの、また謝られたらどうしよう、とあさは恐くなる。

自分に対し償いたい、何でもすると言ってきた彼に甘え、全てをぶつけてしまったが、実際清矢郎に自分以外に大事な人がいれば、こんなことを言われ彼はどう思うのか。どう、答えるのか。

結局告白と同じような気持ちになり、あさはどくんどくんという心臓の音を聞きながら、俯き、眼を閉じて清矢郎の言葉を待つ。緊張のあまり金魚たちもいつしか視界から消えていた。

「――どういう、意味だよ」

しかし思いがけない質問にあさが驚いて顔を上げると、清矢郎は非常に複雑な、ぶすりとした顔をしてあさぎの方を見ていた。

「俺のこと、嫌じゃねえのかよ」

第21話 彼の理由（前編）

清矢郎に問い返され、今度はあさが言葉を失う。

確かに、自分が「加害者」だと思っている（実際そうである）彼にすれば、こんなおかしい感情は不思議に思うだろう。

しかし直ぐに拒絶されなかったことには、あさは少し安堵した。そしてその答えについては既に決まっていたので、「清矢郎のことは嫌じゃない」の意思表示として、少女はこくと小さく頷いた。

清矢郎はまた困ったように頭を掻く。

「……」

そして再び気まずい沈黙が二人の間に訪れる。

あさは自分でも、なんてはしたないことを言ってしまったのかと徐々に恥ずかしくなってきた。

自分の言葉の意味を清矢郎に問われたが、「はいそうです。アナタで想像してひとりえっちしてるくらいやりたいです」——などと正直に言えるわけがない。

黙ってしまったあさぎを見て、清矢郎は唸るようにため息をつくと、また頭を掻いた。彼も相当、困っているようである。重い沈黙にあさは身を縮ませ、このまま消えてしまいたいような気分になっていた。

感情を爆発させすっきりした今、あさぎの頭も少し冷静になり、確かにすごいことを言ってしまったような気がする……と、今更ながら思う。

やはり今の言葉は取り消したほうがいいだろうか、と焦りもするが、そうすればまたふりだしに戻ってしまう。それも嫌だと思う少女だが、清矢郎もまた彼女の言葉に困ってしまっている。

従妹にこんなことを言われれば誰でも困るだろう、とあさぎ自身も納得できるが、先に従妹にあんないやらしい行為をしたのは彼女なので、やはり責任とれよ、このやろうと少女は言葉汚くも思ってしまう。

押し黙ったままのあさぎであるが、このまま自分の告白をうやむやにされるのも、嫌だった。そう思って彼女が清矢郎を振り仰いだ時、

「……で、結局、どういう意味」

腕組みをして難しい顔をした少年は、再びあさぎに問い掛けた。

あさぎに対して償いをしたいと決めた真面目で不器用な彼は、彼女の激白を聞かなかったことにも出来なければ、「はいそうですかではやりますか」という事も言わないようである。

その複雑な表情を見てあさぎは彼らしいな、とこんな状況なのに思わず笑ってしまいそうになった。

しかし自分の発言を考えると、笑い事ではないとあさぎは我に返る。

普通に「好き」と言ったら彼はなんと答えてくれたのか分からないが、逆に「一発やりたいただけ」ととられるのも困る。あさぎの欲求はそうではない。

少女はこの男のことが、その存在ごと欲しい、と感じているのだ。——その身体も、心も。自分を狂わせた男に、今度は全てを自分に捧げて欲しいという激しい独占欲を抱いていた。

しかしそんな重い欲求はただの従兄には言えないことだが、今の平行線の関係のままでいいとはいえない。とりあえずあさぎは最も気になっていることを清矢郎に尋ねてみた。

「あのさ……その前に、か、彼女とか、いるの？」

これは長いこと気になっており、勇気が出なくて聞けなかったこ

とであつたが、あのような過激な発言をしてしまった今、これくらいのこと抵抗なく尋ねられた。

「……居ない」

「——好きなひとは……？」

「いねえよ……」

とりあえず、あさはほーっと大きなため息をつく。内心では第一関門クリア！と両手を挙げたい気分になっていたが。そしてそうなら早く聞けばよかった、とも思つた。

しかし今の質問で、清矢郎は先ほどのあさぎの言葉に恋愛感情も含まれているのではないかと察したのか、相当業を煮やしたのか、さつきから一体なんなんだ、と言うようにもう一度頭を掻くと、
「だから、なんなんだよ……。もしかして、付き合いてえ、とかじやねえだろうな……」

本当に困つたように、そして言いにくそうにそう呟いた。

清矢郎の方から、はっきりと言われてしまいあさは一瞬胸を高鳴らせた。

というより、「一発やりてえってことじゃねえだろうな」と直接的に言われなかったことにあさは内心ほっとした……。その辺は、清矢郎も気を使って遠まわしにそう聞いてくれたのだろうが。

しかし素直に頷けばいいものの、あさは少し長い髪を揺らしてふるふると首を横に振つた。

——違うのかよ！という清矢郎の心の中の突っ込みが、あさぎにも聞こえてくる気がする。

もちろん、それは間違つてはいない。身体だけでなく心まで彼を手に入れたと思うということは、彼と「恋人」になることも含まれるだろうし、他の女には譲りたくないとも思っている。

しかしあさぎの求めていることはそんな簡単なことではない。

先ほどあさぎに責任をとると言った清矢郎である、上辺だけの関係であれば彼女と「付き合う」ことはしてくれるだろう。しかしあさぎの欲しいものはそんな口約束でも偽りの関係でもないのである。

——「彼」が欲しい。彼の「心」が欲しい。

声に出したらそれはもう、少女の中でしつかりと主張を始めてしまった。

自分が彼を求めるように、彼に自分を求めて欲しい——あの日のように、もう一度。あの時見た綺麗な金魚をもう一度、そして何度でも見たい、と。

「……じゃあ、俺はどうすればいいんだよ」

あさぎに四年前のことを話し合おうと言われたが、これではわけが分からず清矢郎もお手上げである。彼は更にふてくされたように吐き捨てた。

「……」

あさぎはそんな清矢郎から申し訳なさそうに眼を逸らすと、ひとつため息をついた。

彼女自身は自分の想いを吐き出したので少しすっきりしていたが、償いたいと言った清矢郎を既に傷つけてしまっている。

だったら自分も我が侘ばかり言っていないで、しつかりと自分の想いを伝えないといけない——そう思ったあさぎは、また清矢郎を振り返り尋ねた。

「じゃあさ、せいちゃんこそ、なんであんなことしたの？」

自分の想いを分かってもらうには、まず清矢郎が自分をどう想っているかを知りたいとあさぎは思った。彼もまだこの質問への答えを彼女に話してはいない。

この出来事が全ての始まりだった。あさぎは今度こそその答えを求めるつもりで、真っ直ぐに彼を見つめた。

しかし清矢郎は今まで彼女のことを避けていた時と同じように、あさぎから眼を逸らした。そして膝に頬杖をつく、ぐしゃりと髪をかき上げ、顔に手を当て呟いた。

「……自分でも、よく、わかんねえ……」

「なにそれ」

隣に座る「前科者」を、年上のくせに何言っただとあさぎは少し呆れたようになじった。

だがしつかりした清矢郎がこんな風に卑怯で、「弱い」ところをあさぎに見せるのは初めてのことであり、あさぎは素の彼を見たような気もしていた。

「悪い……」

清矢郎はあさぎの方を見ないまま呟いた。それは「聞いてくれるな」とでも言いたいようなひどく苦しげで、そしてどこか照れているようにも見えた。

その横顔を見上げていたあさぎであったが、彼女は彼との四年間に決着をつけたくて今日はやってきたのだ、どんな結果になるうとも。

あさぎは少々むっとした顔をして、清矢郎の顔に手を伸ばすと、両手でぐいっと自分の方へ強引に向けた。

「なんでもするって言ったじゃん！ だったら話してよ！ 理由もなくあんなことしたなんて……、ひどいよ……」

あさぎは前半は強気に、そして後半は哀しそうに声を震わせた。意味もなくあんなことをされ、苦しまされていたのでは、少女も悲しいものがある。いつそ「やりたかったから」というような下品な理由でもよいので、清矢郎の口から聞きたいと思っていた。

頬を膨らませたあさぎの行動に、清矢郎はまた驚いた顔をして彼女と眼を合わせた。しかし元々償いをするつもりであった彼は、あ

さぎの主張にそれもそうだと思っただらしい。

それでも非常に話したくないような顔をしていたが、清矢郎は大きなため息をついて少女の細い手をすり抜けると、また前を向き不機嫌そうに語り始めた。それは過去の彼自身への怒りかもしれないかった。

第22話 彼の理由（後編）

「ほんとに、自分でもよくわからん」

初めて聞く清矢郎の「理由」を、あさは胸をドキドキと高鳴らせながら聞いていた。

「……興味は、あった。あと、なんかすげえ、イライラしてた」

清矢郎は隣に座る女の子に下手なことを言ってショックを与えないよう、あまり下卑た表現にはならないように、当時の精神状態や単純な身体の欲求を、どうにか遠まわしな言葉を探しながら一言一言ゆっくりと話した。

「——そんだけ」

「えー……」

これも彼らしいと言えば彼らしい説明の短さであるが、あさは思わずブーイングをしてしまう。

しかしそれが彼の本心であるなら、どうこう言うことではない。男性でもあるし、この端的な理由こそが事実なのだろう……とあさは自分に言い聞かせた。だがそれだけでは納得できないという女心もある。

「イライラって……何に？」

「セックスしてみたかったの？」などと直接的なことが奥手な少女に聞けるわけなかったもので、別の尋ね方をした。また落ち着いて我慢強い清矢郎に、そんな汚い感情があったのだろうかと彼女は意外に思ったのだ。

「……いろいろ」

再び返された短すぎる答えにあさはじろ、と清矢郎を睨んだ。その視線が分かった彼はため息をついて補足した。

「わかんねーよ。なんか色んなことに、すげえイライラしてムカッ

いてた。——中学ん時に」

あさぎは自分の中学生の時を思い出す。確かに荒れている生徒は男子にも女子にもいた。もしかしたら非行に走っていないだけで、今のあさぎもそういう状態であるのかもしれない。

成長していく身体と心、そして現実には置かれた立場、そのバランスが上手くとれず、思い通りにならない苛々も手伝って様々な葛藤を引き起こす。それなのに「子供」の力では、その全ての欲求不満を解消することが出来ない。

だから彼らは探すのだ。それをどうすれば昇華出来るのかを。

しかし時に、他の方法で上手く昇華出来ず、直接その欲求を満たそうと暴走してしまう時がある。

それは時に汚い方法であったり、それは時に他人を傷つけ、罪となってしまう方法であったり——。

中学二年生の時の、急激に身体を成長させ自分に触れてきた清矢郎のことを思い出してしまい、何故かあさぎの方が背徳感を抱き彼を見ていた。

その時、どんな欲求不満や願望が彼にあったのか、アンバランスな少年の身体が何を求めていたのか、そこはあまり詳しく聞いてはいけないような気がした。それこそあさぎにも隠したい欲望があり、ひとりでこっそりとその処理をしているように。

しかしその話からすると、その欲望処理の矛先が、まだ幼い自分に向いたというのだろうか——。

そう思うとあさぎは不思議な感じがした。嫌、なような、興奮する、ような。

「あとあん頃は、親父にも、反抗してたし」
「伯父さんに？」

聞き返したあさぎに清矢郎は頷いた。

清矢郎の父親と言えば、彼とよく似た、あの年齢にしては引き締まった身体をしている、格好いいとあさぎにも思える伯父だ。

しかし彼はとにかく一人息子の清矢郎に対して厳しく接していた。祖母の家に親戚で集まった時なども、伯父の怒鳴り声を日常茶飯事のように聞いていた。

だが少女の眼にもそれは虐待までには感じられなかった。言いすぎやりすぎという感はあるものの、伯父は間違ったことは言っていないし、稀に優しくも見せていた。おそらく彼は自分や人に求める理想が高く、厳しい人であるのだろう。

ちなみに、あさぎの母親と同様、女の子がいないからとその伯父もあさぎには物凄く甘かったのであるが……。

それはさておき、父親の度を越した厳しさに黙って耐えていた清矢郎であったが、反抗期の時期でもあり、色々と思うところやストレスはあったらしい。

しかし同世代の少年にしては落ち着いている今の彼の様子を見れば、清矢郎はその心を歪ませることなく努力して、立派に成長したことはあさぎにも見て分かる。

「だから——さ、」

しかし清矢郎はそこで言葉を区切った。非常に言いにくそうな顔をし舌打ちをひとつして、あさぎをちらりと見る。そして思い切ったように息を吸い込むと一気に言った。

「イライラして、ストレス溜まって、……そういうことがしたくなつて、俺はお前に……手を出した。つまり、お前を犠牲にした。……多分、一番、身近な、……女だったから」

清矢郎に「女」と言われて、あさぎはまた大きく胸が疼いた。

しかし彼が再び浮かべた苦しそうな表情から——しかもあさぎから眼を逸らす様子から、ただの色欲の意味とは違う気がしていた。その意味は清矢郎がもう一度同じ言葉を繰り返したことで、理解で

きた。

「一番身近で、俺より、弱くて小さいからって理由で……、俺はお前を、傷つけた」

自分自身を責めるような清矢郎の表情と声が、あさぎの記憶の中のじつと黙って何かを堪えている子供の彼の姿と重なり、「被害者」があさぎであるにも関わらず、彼女の方が胸が締め付けられるような想いになる。

——私なら、大丈夫だから、だからもう、そんな風に苦しまないで——。

「守ってあげたい」、なにやらそんな気持ちにすらさせられ、思わずそう言いそうになったあさぎが無意識のうちに清矢郎へと手を伸ばしかけた時、

「なのに、なんで、お前はこんな最低な俺が……つつうんだよ」

清矢郎はそう吐き出すと、またがしがしと頭を掻いた。あさぎの手が止まる。

己の弱さに負け、自分より弱い者を虐げ傷つけた事を、正義感が強く自分に厳しい少年は、己を許すことが出来ずにいるのだろう。

清矢郎は、「被害者」であるあさぎが自分にそんなことを言うとは思わなかったと、あさぎの気持ちに答える以前の問題で困惑しているようだった。

あさぎは想いを伝えることの難しさを感じながら、そこまで思い悩む彼は素直に凄いと思ったし、逆にそれほどの彼があんな暴走をするなんてあの時は余程辛かったのかな、と考え始めていた。

あさぎはやはり自分の感覚がおかしいのか？と思うものの、それでも自分に初めて弱さを見せたこの男にどこか愛しさすら感じていた。そしてその真実を耳にしても、やはり彼のことは手に入れたかったので、拙いながらも理解してもらおう言葉を探す。

「私にも、わかんないけど……」

しかしあさぎもまた曖昧な答えとなってしまう、一旦清矢郎から視線を逸らした。

「……でもね、せいちゃんじゃないと、多分こんな風には思わなかったし、違う人からあんなことされたらもつと、嫌だった」

それだけは何故だか最初から思っていたことであつたので、あさぎは素直にそう言う、清矢郎を再び見上げた。

その口調は十二歳の彼女に戻っていた。清矢郎のことを「せいちゃん」と呼びもう一度甘えたいと思う子供のあさぎと、「清矢郎」と呼び捨てにして女として彼に対等に見られたいと思うあさぎとが、彼女の中に混在していた。

しかしあさぎのその子供のような口調と真つ直ぐな眼差を、清矢郎はまた驚いたように見つめ返した。その少女の小さな唇が、また動いた。

「せいちゃんは、私じゃなきゃ……嫌ってことは……なかった……の？」

少女の口からたどたく、不安そうにその言葉が紡がれた。とくんとくんとあさぎの心臓がまた速く拍動し始める。

その胸の中を金魚が泳いでいる。

——私の想いは届くのだろうか？

小波のように震える胸の中、あさぎは清矢郎の答えを待つ。次の彼の返答次第で、「彼が欲しい」という願いが叶うかどうかが決まるだろう。

既に己の想いを告げたことで、少女の心は全て少年の前に曝け出されている。——それはまだ子供のような、穢れのない裸の心であつた。

「女」の表情を見せたかと思えば、今はあの日から時を止めてしまったかのような眼をして自分を見ている少女を、清矢郎は口を横

に引いてまじまじと見ていた。

第23話 彼の過去

——ここで話はひとりの少年の回想に移る。

豪快で厳しい父親と、穏やかだが芯の強い母親との間に育った無口な少年・清矢郎は、物心ついた時には、周りの物事にそれほど心を動かされない性格になっていた。それは生まれついていたのもあったかもしれない。

そして気がつけば幼い彼の傍には、祖母の家でよく遊ぶ、小さくて可愛らしい妹のような女の子の存在があった。

彼女は彼と違ってよく笑い、よく泣き、色々なことに感動していた。時にうるさいなあと思うこともあったが、少年にはない感性和明るさを持っていたので遊んでやっていて楽しいとも思えた。

感情を表に出さない少年は、複雑そうに周りから見られることがあるが、その実とても単純なところがある。本当に何も考えず、ぼーっと無心でいる時もあれば、理屈がとおっていないと感じることに對しては、自分の意志を静かにだが、曲げずに貫く激しさも持ち合わせていた。

父親は躰にも少年に求めることも厳しく、時に少年に鉄拳を喰らわせてくる。既にそれに慣れてしまっていた少年であったが——もちろん、彼自身は親になっただけの子供には絶対に手を上げないでおうと、密かに心に誓っていたわけだが——、祖母の家でこの光景が繰り返されると、その一緒に遊んでいる女の子の方が驚いて泣いてしまうのだ。

どうやら彼女は「感じやすい」子なのだろうと少年は思った。センシティブ、感受性が強い、繊細……と言い換えられるそれは、少年の拙い語彙ではそのように表現された。

少年は自分にも叱られる原因があつたと思つており、父親へもいつか見てろよという反骨精神もあるので、どれだけ厳しく怒鳴られてもへこたれはしない。なのに、少女の方が恐がつていつも泣いてしまう。正直、こいつばかなんじゃないのか、と思つたことすらある。

だが少女は後から少年に彼女の好きなお菓子を分けてあげると持つてきたり、痛くない？と何度も聞いたりと、心配もしてくれた。一人っ子であり両親が共働きだった彼は、そうやって構われることは嫌ではなかつた。寧ろそれは叱られた後の唯一の楽しみであり、安らぎでもあつたのだ。

しかしある日少年はふと、この女の子が泣くのが面倒くさいなと思つうようになった。泣き顔を見たくないなと思つた。

単純な彼は単純な図式を考える。

——そうか、俺が親父に怒られなければいいだけか、と。

それから彼は努力した。学業も習つていた剣道も、子供同士の喧嘩も然り。人より抜きん出るよう時間を費やし集中し、とにかく手を抜かない精神で打ち込んだ。

元々頭もよく、体格に恵まれたこともあり、その努力は面白いくらいに実つた。丁寧に基礎を積み重ねて全力を注げば、彼の實力ならばそれなりの成績が修められることが分かつたのである。

しかし少年としては名誉のためにしたことではないので、トップに立つても特に喜びもせず、やはり無表情で朴訥としていたが、「やればやつただけ結果に繋がる」という事実は彼に自信をつけた。

それが功を奏したか、年齢的なものもあつてか、小学校の高学年になる頃には父親に怒鳴られる回数も徐々に減つてきた。

そうは言つても、今度は叱られる内容が複雑なものになってくる。結果を出さねば過程は無駄と主張する父親は、ここまで出来ればま

出来る、慢心するなと中々及第点をくれない。

領ける部分もなくはないが、思春期を迎え精神的に自立し始めた少年は、価値観を強引に押し付けるような父親のやり方に、相容れないものを感じるようになった。

しかしまだ社会的に「子供」の部類で、義務教育を受けている身。苛立ちのままに非行に走ることは簡単だが、それでは本当の意味で父親を見返すことにはならないし、母親を哀しませるだけである。

誰の世話にもならず、自分で自分の意志を実現できるような大人になるためには、社会に対抗できる力をつけねばならず、それまでは、と少年はじつと堪えていた。鬱屈とした感情を押し殺していた。

そんな中、祖母の家に行き、あの明るく笑う女の子に会うと、少年は何故かほつとした。

彼女は年下であり、家族ということもあつて少年を絶対的に信頼していることから、クラスの女子とはまた違う存在に感じられた。

少年の年代の女子は、男子よりも身体も精神も成長が早いので、母親や姉のように世話を焼いたり、怒ったり絡んだりしてくる。そういう女子が彼は少し苦手だった。

またその従妹は、他の女子にはないような独特の感覚を持ち合わせていた。見ているところが自分と違う、と少年はよく思っていた。たまに言っていることがよく分からないが、彼女と話すのは発見が多く面白いのだ。だから少年はそんな少女のことは嫌いではなく、自分を頼ってくるころは可愛いと思っていたし、会えるのは楽しみとなっていた。

だが互いの身体が大人に近づくにつれ、二人の間に溝が生まれ、昔のように感情を共有することが出来なくなってしまった。

いつしか彼も大人の身体になる準備を始め、気がつけば彼女も大人の身体に近づきつつある。

ずっと子供のままのような気でいた従妹の女の子のその変化に、少年は不思議な、それでいて変な気分になってしまふ。会うたびに「それ」が嫌なものとして自分の中に蓄積されていくのが少年にも分かった。

そんな心境になってしまったのは、単純な身体の欲求からか、彼女に特別な感情を抱いていたからか、日々の葛藤や苛々から逃避したかったからか、最も身近で弱い者に力を誇示し優越感に浸ろうとしたからか、少年にはよく分かっていない。

だが四年前の夏の日、いつの間にか募っていた、黒く醜い己の心に少年は負けてしまった。

暑さに苛々していた夏休み。父親のことだけでなく、自分に嫉妬した部活の先輩に自分や友人を貶めるようなことをされ、少年の我慢が限界を超えたのだった。

しかしそんな汚い感情から弱い少女を襲ったところで何にもならず、益々自己嫌悪を感じ、居場所を失っただけだった。そのことに少年は罪を犯してから初めて気がつき、深く後悔する。

それなのにその時の感触を何度も想い描く己は、どうしようもない下種な人間だと少年は思っていた。

それは努力家であり誠実な彼の人生において、唯一の汚点であり、唯一彼の心を碎いた出来事だった。

それ以降、彼にとって、その少女は唯一の弱点となったのであった。

そして話は四年後の夏、神社の境内に座る、あれから更に身体も心も成長した二人に戻り――。

.....

あの相手が清矢郎だったから、自分はこんな風になってしまったとあさぎは思っている。しかし彼はどうなのだろうか。

そう思ったあさぎに「私じゃないと嫌だった？」と問われた清矢郎は、眼鏡の奥の眼で彼女をじいつと見て何かを考えているようだった。その視線に、思わずあさぎの方が恥ずかしくなって眼を逸らしてしまう。やがて彼は、低く呟いた。

「あさぎだからそうしたのかって言われても……お前以外の女が近くに居なかったから、それ以外、想像つかない」

彼にとつては、毎日会うがあまり会話をしないクラスの女子よりも、数ヶ月に一度しか会わないが一緒に遊んだり風呂に入ったり眠ったりしていた身内の少女の方が、身近な女性であったのだ。

しかしそれを聞いたあさぎは、やはりずきんと胸が痛む。自分はあれから四年間、清矢郎のことを想っていたのに、彼にとつてはストレスと性欲発散の受け口として一番身近な女を使っただけ、というのだろうか。

実際あさぎも、あんなことをされなければ清矢郎をここまで想わなかったかもしれないので、同じことかもしれないが……。

「でも……」

しかし清矢郎はそこでまた言葉を区切り、言おうかどうかしようか少し迷ったようだが、無口な彼にしては珍しく、もう一言付け加えた。

「嫌いな女ならあんなことしないし、責任とれとか言われても、言うこと聞きたくねえし……電車の時間も、合わせたりしない」

「……」

……はい？

あさぎは心の中で思い切り聞き返す。今しがたの胸の痛みは何処へやら、少女は清矢郎をぽかんと見上げた。

彼は自分が傷つけてしまった少女をこれ以上不安にさせないように、出来るだけ彼女を安心させてやりたくてそう言ったはいいものの、最後の一言はやはり余分であった、と思ったのか言い終わった後は苦い顔をしていた。

あさぎは今の言葉が幻聴ではないかと、一瞬疑ってしまった。

電車の時間を合わせていたと、彼は確かに言った。

最初に偶然出会ってから、彼を一生懸命探すようになった駅での出来事は、毎日少女を一喜一憂させ、それはまるで恋のように甘く切ない時間であった。彼が自分のことに気付いてくれない、見てくれないと、少女はずっと心を痛めていた。

——それが……？

あさぎの鼓動が速くなっていく。

「もしかして……わざと、合わせてくれてたの？　あと私が、そうしてたのも……、き、気付いてた？」

気恥ずかしい気持ちであさぎは尋ねたが、清矢郎はそっぽを向いたまま黙って頷いた。

第24話 彼の本心

——ええええ、うそおお!!

あさぎの心の中で絶叫が上がる。

「し、知ってたの!？」

あさぎが上ずった声でもう一度同じことを尋ねると、

「……なんか睨んでるみてえだったから、余程怒ってんだろぅなと思ってたけど」

清矢郎はあさぎの方を見ずに、頬杖をついてそう言った。

——全部、お見通しであつたのだ。彼の視界に、彼を探すあさぎが捉えられていたのだった。

あさぎが嫉妬できつと醜くなっていた表情で、彼を恨みがましく見ていたことも。

届かない想いに躍起になって、必死で彼を追いかけていたことも——もつとも彼は、あさぎの持っている複雑な感情にまでは、その時点では気付いていなかったようだ。

そして、その逆も——彼もまた、同じように自分を探して其処にいたのだと。

「どうして、そんなこと、……してたの？」

あさぎは清矢郎を見上げて問い掛けた。そんな風に言われれば、少女は嫌でも期待してしまう。

「さあな」

しかし清矢郎にとっては不覚な発言であつたらしく、彼はつつけんどんに答えてあさぎの方を見もしない。

照れているの?とも思うが、自分に対して何でもすると言った割には反省の色が見られないじゃん、とあさぎは偉そうなことを思う

と、催促するように清矢郎のＴシャツの裾を軽く引つ張った。

清矢郎は思わず、あさぎを見下ろした。しかしそれは一瞬で彼はまた視線を逸らすと、彼女の言いたいことが分かったのか、仕方なさそうに軽く舌打ちをした。

「——別に。そう会えるもんでもねえし、ただ単に元気でやつてるか気になっただけだ」

清矢郎はぶつきらばうにあさぎにそう言ったが、Ｔシャツに添えられた手は振り払われなかった。

こういう可愛くない態度も慣れているあさぎだが、もう少し甘い言葉を期待していたので少々がっかりしてしまう。少女がこのやろうと、という意味を込めてＴシャツを引っ張ると、「伸びる」と冷たく言われた。

しかし、十六の少女にはその言葉の裏に隠されたものまでは気付かなかった。

自分が傷つけてしまった大事な少女が、笑っているか、幸せであるか、彼はそれだけを心配していた。そして友達と楽しそうに笑い合っている彼女を見ると、ほっとしていた。

そんな風に彼もまた四年間、「あさぎ」という呪縛に囚われていたのであった。

——この感情をどう言っているのか、二人共に分からないが。

だがあさぎとしては、嫌っていたらこんな風に言うことをきかないと言われたこと、そして自分と同様、彼が自分のことを気にしてくれていたことは、素直に嬉しく頬が緩みそうになる。

そしてそんな彼は自分の「あの願い」にもしかしたら応えてくれるのかもしれないと、少女はやはり期待してしまう。

あさぎは清矢郎のＴシャツに手を掛けたまま、もう少し彼に近づく真下から彼を覗き込んだ。今まで隠していた本心を自分に語っ

てくれた少年を、先ほどのように憎らしいと思うことは、もうなくなっていた。

だから少女はこんな風に昔のように彼を真っ直ぐ見ることができたり、近づいたりしてしまうのだ。昔とは違う逞しい体つきには、少し意識してしまうものの。

なんだよ、と言うように自分を見下ろした眼鏡の少年に、あさぎはまた零れる想いを口にした。

満たされていく、そしてかえって満たされなくなる心模様の中、金魚がまた緑の中に飛び立ち始める。

「さっきの話……だけど、」

清矢郎は、償いとして基本的にあさぎの要求には逆らわないつもりでいるだろう。

だが自分でも勝手だと思うが、彼女としては彼自身の意思がそこにあつて欲しいとも思っていた。彼の口から語られた意外な事実から、その可能性がゼロでないことが分かり、先程の恥ずかしい告白にもう一度話を戻したのだ。

この四年間、彼なりにあさぎのことを考えてくれただけで十分の筈なのに、一旦決壊した少女の欲望はもう止まらない。

そんなあさぎに清矢郎は少し突き放すように言った。

「だからそれって、どういう意味なんだよ。……分かるように、言えよ。じゃなきゃ、どうしていいか、わからん」

そんな感情を言葉で説明しろだなんて、恥ずかしいこと命令しないでよ、と少女は思わず心の中でむくれてしまう。

しかし全てを言えるわけもないが、清矢郎が本心を語ってくれたことで、気持ちを伝える勇気も出てきた。少女は祈りながら、自分の想いを羞恥を堪えてたどしく口にする。

「ただ、や、やれればいいってわけじゃないの……」

少年にセックスを意味するようなことを言うのは恥ずかしかった

が、誤解はさせたくないのであさぎは正直に言った。

「――全部、欲しいの」

あさぎはもう一度言うつと、改めて清矢郎を振り仰いだ。

これは子供の我が侘なのか、女の情欲なのか、彼女にももう分かってなかった。

「清矢郎の、心も、身体も」

その眼を見て、少女は自分の想いの丈をようやく、全て伝えきった。

その視線の先の少年は、想像してはいただろうがやはり驚いたような顔をしている。

――それはそうだ。普通こんなことは男性が言うセリフである。女から、しかも従妹からこんな風に迫られて、内心では清矢郎も引いているかもしれない、とあさぎは心配になった。

だがあさぎには免罪符があった。脅迫で手に入れた心ではないが、それでも彼の所為で自分はこんな風になってしまったのだと。どんな卑怯な手段を使っても、やはり他の人には譲りたくない、一歩も引きたくない少女は思うのだった。

「私をこんな風にしたのは、せいちゃんだよ？ 責任、とつてよ……」

また元通りの「呼び名」に戻り、あさぎは小さな声でもう一度責めるように繰り返すと、清矢郎のＴシャツの腹の辺りをきゅっと握り締めた。

欲しい、焼き尽くしたいと思う反面、相手を家族として、ひとりの男性として、守ってあげたい、大事にしたいという思いも存在す

る。

なのにどうして自分はこんなに彼を困らせているのだろうか、傷つけることしかできないのだろうか、とあさは清矢郎の表情を見ながら申し訳ないような気分になっていた。

だがいつの間にか徐々に彼に身体を近づけていた。本当はこのまま本当は縋り付いてしまいたいと少女は思っていた。

——このひとに、触れたい。

その腕に、胸に、手に、肩に、頬に、全てに。

直接的な欲求が少女の心に湧き上がり、それに呼応して二人の周りをひらひらと金魚が舞い始めた。

普通なら隠されている汚らしい欲求も、この綺麗な金魚が現れることよって少女は自覚せざるを得ない。逆にこんなものを見るなんて、人以上に自分は性欲が強いのではないかと少女は恐ろしさすら感じてしまう。

しかし真面目な清矢郎のこと、いくらなんでもこんな誘惑は拒否するかもしれない。過去にあんなことをしていても、従妹とそれ以上の関係にはなりたくないと思うかもしれない。

——だったらこれくらい、いいじゃないかと。

望みが叶わないならば、ほんの少し自分の願いを叶えるくらいいいじゃないかと、あさは己の欲望に従った。

いつの間に、これほどまでに少女の心は狂わされてしまったのだろうか？

「——耳貸して」

そう言わないと逃げられると思ったあさは囁くように清矢郎に言い、彼の顔を少し彼女の方へ傾けてもらつと、そのままＴシャツ

を強く引っ張り――、あさぎはちゃん、と自分の唇を相手の唇にくっつけた。

第25話 はじめての（前編）

緑の木陰の下、赤い金魚の群れの中、少女は少年に唇を重ねた。軽く重ねただけのそれは、一瞬の出来事だった。少女は少年から顔を離す。

清矢郎は何が起こったか分からないというような顔であさぎを見ていたが、とりあえずずれた眼鏡の位置を直していた。

あさぎはそんな彼を見ながら、頬のひとつでも赤くなったりしないのかな、とぼつと考えていたが、やがて自分の頬が段々熱くなってきたことに気がついた。いや顔だけでない、身体中が熱い――。

――って、なんてことしたんだ、私は――！

多分真つ赤になっているのは自分の方である、とあさぎはようやく自覚した。

彼に触れなくて仕方なくて、狂ってしまったて、金魚が泳ぐ中、遂に衝動的にこんなことをしてしまった。

しかし、してしまった後はあさぎも我に返り、恥ずかしさといったまねなさに金魚など見ている余裕もなく、その幻像もいつの間にか消えていた。

――それより、今のはじめての……になるんだけど――！

そのことに気付いたあさぎは、己の大胆さに驚きパニックになりながら、熱い頬に手を当てて俯いてしまう。

正直、少女として例外なくはじめての「それ」には憧れていた。好きな男の子の方から、そつとしてくれたらなんと、ありがちな甘い夢を見ていたのだが、それどころの騒ぎではない。

実際の「はじめて」は想像と全く違うものであった。

何より一瞬であつたし、柔らかかったような感じはあつたものの、その感触もよく分からないままに終わってしまった。「作法」もあ

れでよかったのか分からない。

——こんな下手くそなキスをした自分を清矢郎はどう思うのだろうか。呆れただろうか、気持ち悪いと思うだろうか。というか、彼は初めてだったのか。

そう思うとあさは清矢郎の反応が気になってきて、そろそろ隣の彼を見上げてみた。

彼は前髪をかき上げ、その姿勢のまま同じく俯いて固まっていた。

手が額にあるので少女にその顔はよく見えないが、覗き見る限り、複雑そうな表情である。やはり、困っているらしい。

「ごめん……」

後悔したくないと自分の欲望を満たした割には、あさは思わず謝った。

「別に……」

しかし相手の答えが自分を非難するものではなかったので、あさは少し安堵した。

「嫌だった……？」

「……別に」

また否定的ではない答えにあさは更に安心するが、逆にこれで終わりなのか？という懸念が浮かぶ。

確かに一昨日の時点では、自分にはセックスなんてまだ早い、恐いと少女は思っていた。そんなこと有り得るわけがないと思って家を出てきた。それなのに一度この欲望を認めてしまったからには、恐怖以前の問題でむきになってしまい、彼を自分のものにするまでは離れたくないと思ってしまうている。

このまま、うやむやにしたいくない——若い少女はそんな風に形のあるものを求めてしまい、不安になっていた。

清矢郎もどうやら、先程の言葉からあさぎのことは異性として見

られないというわけでも、嫌っているというわけでもないらしいので、まだ可能性は感じられるものの……。

だからと言って、これからどうしてよいかあさぎには分からない。この返事は後日すると言われてしまうのだろうか。あさぎはそう思ってもう一度心配そうに清矢郎を見た。彼も顔を上げて彼女の方を見た——と同時に、突然あさぎの左腕を掴んで彼の方へと引き寄せたのであった。

「痛……っ」

強く掴まれた左腕の痛みに、あさぎは小さな悲鳴をあげる。その声に腕を掴んでいた指の力はやや抜かれたものの、清矢郎は彼女を睨みつけながら言った。

「だから一体、どういふつもりだよ。——俺と、やりてえってことなのか」

言おうか言うまいか悩んでいた清矢郎であったが、ずっと自分のことを嫌っていると思っていたあさぎに求められ、拳句の果てには口付けまでされ——混乱が極まり、冷静な彼も爆発したくなつたのだろう。

遂にストレートに問われてしまい、あさぎは逃げ場がなくなった。彼に汚い欲求を抱いている自分が、愚かで穢れているような気さえしてくる。

「……」

だが、その質問に恥ずかしくなり黙ってしまったあさぎだが、やがてこくりと素直に頷いた。彼が愕然としたことが、あさぎの腕を掴んでいる汗ばんだ手の指の動きで伝わってきた。

いつの間にか、少女の喉はからからに渴いていた。暑い、と思った。熱い、と。

今見えている金魚の幻覚が性欲によるものか、熱中症によるものかも分らないほどに。

だがまた現れたそれを見ながら、ここまできたらもうどうにでもなれ、とあさはうわ言のように言葉を発する。

「でも、一回限りできれば……とか、そういうんじゃないの……。そんなの恐いし、哀しいし、嫌。だって、せいちゃん自身が欲しいんだもん。だからずっと、ずっとじゃなきゃ、やだよ……」

子供のような口調で恐ろしいことを言うあさを、清矢郎はただ凝視していた。

ここまで自分を求められるとは思わなかった少年としては、複雑な思いすらあるだろう。

だが、十八歳の青少年である。それに興味がないくところか、その欲望に従いたくて仕方がないのが本心。しかし、相手は従妹の女の子だ。それが彼を抑止させる理由だった。

そうは言っても彼女がこんなことを言うのは、彼が幼かった彼女に、悪戯をし、性に狂わせてしまったからなのである。

少年にはその罪悪感があり、ずっと自身を責めてきたものの、彼の想像と異なり、少女は逆に彼を求めるようになってしまった。更に彼が彼女を受け入れることで、納得すると言うのだ。このことには清矢郎も驚いていた。

しかもあさぎに対しては、彼も幼い頃から悪い感情は抱いていない——だから、要求を聞き入れることはやぶさかではないのだ。

それに仮にもし、己以外の男があのような行為を今の彼女にしたと想像すると……、正直、いい気持ちはしなかった。逆に自分が初めて彼女にそういう行為をしたのだという、変な優越感すら彼は持っているほどであった。

だからと言って、彼女の求めるように抱いてしまっただけでいい

のか――？

言動も行動も、相変わらず理解しきれないあさぎに、清矢郎は問い掛けた。

「だからそれって結局……、付き合いたってことじゃねえのかよ」
「……そうかも、しれない。でも……！」

清矢郎の言葉に一旦は同意したあさぎだが、先程その言葉を否定した理由を思い出して顔を上げる。

「だってせいちゃんなら、義務感で付き合ってくれそうなんだもん。それは嫌だから」

清矢郎には彼女も居ないようだし、今までの言葉からすれば、頼めば彼は「付き合って」くれるだろう、とあさぎは思った。しかしあさぎは先程言ったように、上辺だけの関係ではなく彼の心まで欲しいのである。

「だから、付き合ってなんて言えない……私のこと、本当に、好きじゃないなら……」

少女はそう言うともた俯いた。

脅迫によるものではなく、彼に本気で自分を欲してほしかった。初めて男に抱かれるならば、本当に「自分」を必要とされて抱かれたいと思っていた。

それがただの理想でも、皆に愛され大事にされてきた少女は、そんな風に願っていた。

「じゃあ、お前はどうかんだよ。俺のこと、どう思ってたんだよ」

しかし厳しい声が頭上から聞こえてきて、あさぎはまた清矢郎を見上げる。

「俺の全部が必要で、一回限りじゃ嫌で――、それで付き合うのは違って、やりてえって……なんだよ、それ。一体何なんだよ。それじゃ何の関係も成り立たねえだろ」

あさぎの甘えと矛盾をわざと嘲るように、清矢郎は吐き捨てた。その言葉にあさぎは己の浅はかさに気付き、唇を噛んで俯く。

「欲しいなんて言うなら、覚悟決めろよ」

それは誘惑などではなくあさぎの兄貴分として厳しい口調でそう言つと、清矢郎は少女の腕を離した。

「……か、覚悟ならあるもん！」

その次の瞬間、あさぎは弾かれたように立ち上がって今度は清矢郎を見下ろした。——子供扱いされている、そう思ったからだ。先に幼い自分を女扱いしたのは、彼であるのに。そう思うとあさぎはまた腹が立ってきた。

「せ、せーしろーの方が恐がってるくせに！」

ああ、売り言葉に買い言葉——少女は同じようなことの繰り返しに、内心ではまた自分に呆れているが、この想いを叶えたいという気持ちは止まらない。

「私が父さんとか母さんとか、伯父さんとか伯母さんとか、みんな裏切つてでも付き合いたいとか言ったり、やっちゃったら赤ちゃんできるかもしれないし、きつといっぱい不安になるから、ずっと……一生、一緒にいてなんて言ったら、困るくせに！　せーしろーこそ、覚悟なんてないくせに！」

——私を欲しいと言ってよ！

心の中ではそんな悲痛な叫びを上げながら、あさぎは清矢郎を罵つてしまった。が……、

「——あるよ」

間髪入れず、清矢郎はあさぎを下から睨みつけながら、挑発するようにそう答えた。

「——」

その答えに今度はあさが息を飲んでみると、再び少女のその細い腕が少年の大きな手に捕らえられた。そしてそのまま、強い力に引つ張られ少女はバランスを崩して膝をつき、彼の胸の中に倒れ込む。

そして今度は、少年から――唇を、奪われた。

それこそそれは、やや強引でありつつも壊れ物を扱うような優しさを感じ、あさは思わず抵抗することなく身を任せてしまう。

少年の唇が、少女のそれに押し付けられていた。その感触と温度が先程よりもよく分かる。

少女は思わず眼を閉じる。暗くなった瞼の裏に赤い炎のようなものがちらちらと見える。身体中が熱くて痺れている。

やがて少女の閉じられた小さな唇に、少年の舌が割り込んできた。
「――!？」

今日はじめてなのに、ここまでされちゃうの!？と十六歳の少女は戸惑うが、知識として知らないわけではない。

どうしてよいのかやはり作法が分からないので相手のされるがままになっていると、少年の舌が少女の口内をゆっくりと舐め回し、犯し始めた。

第26話 はじめての（後編）

——せいちゃんに、キスされてる、よう……しかも、でいーぶなやつ……。

そう実感するとあさぎの身体が余計にぞくぞくとした。局部は既に、痛いくらいに疼いている。

少女には何故か子供の時の楽しく汚れなき記憶が思い出され、今こんなことになってしまっていることに、不思議と涙が出そうになった。ぎゅっと閉じていた眼を薄く開き、あさぎは清矢郎を見た。

彼もまた薄目を開けてあさぎを見た。眼が合ってしまい、あさぎは慌てて眼を閉じた。自分へと熱い視線を向ける「男」の表情など、とても見ていられなかった。

少女はどうか息継ぎをしながら、相手の攻めてくる舌から逃れようとする。それを相手が追いかける。それを繰り返すうちに、いつの間にか舌同士が絡まり合ってしまったている。

少女にはこんな「よくないこと」を外でしていて、誰かに見られないだろうかという不安はあるが、確かに人の気配はなく、鳥居からは死角になるところに座っていたので、後は運を天に任せることにした。

何より少女は硬直し身動きがとれずにいたし、そしてもうブレーキが利きそうにないと思っていた。

少年のねっとりとしたぬるい舌の感触があさぎに伝わってくる。二人分の唾液が、混ざり合って溢れ出す。あさぎの息も荒くなり、相手の聞いたこともない荒い息遣いも聞こえてくる。

なんて動物的な行為なんだろうとあさぎは思ったが、その背徳感にまたぞくりとする。それは正常な思考を溶かす毒であった。

身体の中から何かが溢れ出しそうな感覚が、あさぎを襲ってくる。それを恐いと思った彼女には、まるでそこから逃れようとするかのように、目を閉じていても見える赤い光——ちらちらと揺れる金魚を見ていた。

それは四年前のあの日に見たものよりも、濃い緋色をしていた。あさぎはあの時のように一生懸命そちらを見て、この現実から、変化しようとしている己自身から逃れようとした。

だが既に自慰行為で快感を知っている身体は、そんな幻影よりももっと確かな悦びを求め、視覚よりも触覚の方に神経を集中させようとしていた。

——だめ……！

消えそうになった金魚にあさぎが心の中でそう言った時、はあ、と大きな息をついて、清矢郎はあさぎを解放した。

あさぎは呆然とした様子で清矢郎を見上げていたが、彼は自分の口元を手の甲でぐいっと拭くと、てかてかと濡れているあさぎの半開きの口元も掌で拭った。

はっと気付いたあさぎは自分が今どんな淫らな顔をしていたのか気付き、その顔を見せたくなくて俯いた。しかし少女のジーンズの中は既にじつとりと湿り気を帯びていて、今の行為に身体が反応し興奮していたことを自分自身に証明してくることが、恥ずかしくて仕方がない。

「……本当に、やりてえなら、こんなもんじゃねえぞ」

清矢郎の低い声に、あさぎの身体がびくんと反応した。

「本気で、俺はお前を滅茶苦茶にするかもしれないし、傷つけない保障はない。つつか、確実に傷つける。お前の言うとおり責任とつたって……構わねえけど、失敗して子供なんか出来たら、まだ未成年だから、親にまで迷惑が掛かる。——そんなことはしたくないし、

あさぎを哀しませたくない」

一言、一言を、彼は重く噛み締めるようにあさぎに伝えてくる。彼の言うことは、いつだって正しい。彼の考えをあさぎは信じているし、似たような親に育てられているのだから、元々価値観も似ている。

十八歳の男子ならばすぐに押し倒してきそうなところを、彼のことうり大事な人々のことを第一に考える清矢郎は、やはり大した男だと、あさぎは思っていた。

清矢郎があさぎのために思っただけでそう言ってくれるのは伝わってくるし、それはとても嬉しかった。だからこそこの男を信じよう、欲しいと彼女は思ったのだ。

だが、その理論でいけば彼が手に入るのはいつになるのだろう、何年後になるのだろう、と少女は不安にもなる。

その間に彼が誰かのものになってしまいそうで、あさぎは恐かった。もう待たされるのは嫌だ、今すぐこの飢えを満たして欲しい、彼が自分のものであるという確かな証が欲しい、とあさぎは強く願っていた。

若すぎる故の焦りと、女としての本性が少女にそんな淫らなことを思わせていた。

あさぎは困ったように、今しがた自分を襲っていた男のＴシャツの裾をまた掴む。

「い、言ってることは、分かるけど、……何年も待つなんて、やだよ……」

世間にはいくらでも高校生同士でセックスをしている事例はある。それは清矢郎だって分かっている筈だ。

彼の言うことは正論であり、あさぎも頭では分かっていることだが、素直に受諾できなかった。勉強も進学も、避妊も自分はちゃんとするつもりでいる、どうしてこの気持ちを抑えなければならぬのだろうか、と。

身体はもう生殖が可能なのに立場が社会的に子供であるという逆説を、少女は悔しく感じた。

先のことを何も考えていないわけではない。自分を大事にしているわけではない。この相手と一生添い遂げたって構わない。その「覚悟」ならば出来ている、と少女は自信を持っていた。

彼も責任をとると言ってくれたし、嘘を言わない彼のことをあさは信じていた。後悔など――するものか、と少女は心に決めた。

「それに、今日、安全日だし」

その知識も一応ある。偏頭痛と微熱から生理予定日のほんの二、三日前になる筈なので、あさはそう言い返した。

「……。そういう問題じゃねえよ……」

一瞬何事か考えたような間があったが、清矢郎はあさぎの方を見ないで呟いた。

確かにそんなにやりたいのかと思われそうだが、今の少女は行為そのものよりも、この少年に自分を認めてもらい、必要としてもらいたくて躍起になっているのだった。

それに今の淫らな行為は……、正直言って悪くなかったとも思ってしまう。少女にはあの感触をもう一度味わいたい、あの先を知りたい、という肉体的欲求も確かにあった。

「第一、順番、滅茶苦茶じゃねえか」

しかし清矢郎がふてくされたように言うそれも、もっともだとあさは思っている。これが恋愛感情なのかは互いに一度も認めておらず、愛を確かめ合って交わるなどという、よくある手順を踏んでいない。

だとすればこれはただの性欲なのかもしれない。だが少女は少年に対し、身体も心も、これからずっと自分に捧げて欲しいという要求をつきつけ、それに対し少女を大事に思う少年は、一切を飲むと約束した。

つまり互いのことは、一時ではなく永い時を共に過ごす相手として、互いに不足ないと感じているのだ。

それにおそらく、幼少の頃から相手をどこか特別に思っていた。生まれた頃から接していた二人はその幼い脳の扁桃体に、互いが異性としての「好み」となるよう植えつけられてしまっていたのだろうか。しかも親子や兄弟ほど濃い血縁関係でもないので、尚更意識し合ってしまう。

……一体、いつからが始まりだったのか。

必然か偶然かも分からないが、あの夏の日の出来事がある以上、こうして相手を受け入れること以外に、二人の想いが昇華され、満たされる方法は有り得ないのかもしれない、と二人共に思い始めていた。

「めちやくちやって……最初に、順番めちやくちにしたのは、清矢郎だよ？」

これはあさぎの欲望を正当化する唯一の免罪符であるから、少女はごめんねと心の中で言いながら、「女」の表情で微笑んで彼を責めた。

そしてそう言えば彼が彼女に逆らえないことを知っているので、あさぎはこの優しい男のＴシャツをもう一度引つ張ると、先程の毒を欲するように、誘惑するように、もう一度自分から唇を重ねてしまった。少女は自分から舌を入れることは抵抗があつたが、照れながらも彼の唇を軽く啄ばんでみると、彼の唇が開いた。

少年も理性でどれほど少女を守りたい、正しいことをしたい、これはよくないことだと自分に言い聞かせても、溜まっていた肉体の欲求に逆らえず、自然に身体が動いてしまった。

そして二匹の蛭が絡み合うように、また濡れた粘膜同士の鬨ぎ合いが始まった。

正しい倫理が二人の間に確かにあつた筈なのに、覚え始めてしまった性の営みは、いくら清廉潔白な少年少女であろうと、その甘く芳醇な匂いに二人を酔い痴れさせ、その魅惑に狂わせていく。

蝉の声の降りしきる神社の境内で、互いのみに聞こえる荒い息と水音を立てながら、一組の若い男女が止められない情欲に身を焦がしていた。

理性の殆どを飛ばしてしまった中、二人は互いの口内を必死になつて貪り合い、接吻だけで既に身体に火がついたようになってしまつていた――。

第27話 彼の家へ

それから二十分後――。

頭にじりじりと太陽の照り付けを感じながら、あさはサンダル
の音をぺたぺたと立てて、清矢郎の背中を追いかけていた。家
を出る前はこんな予定はなかったのに、なんでこんなことになっ
てしまったのだろう、と少女は不思議に思っていた。

今なら引き返すことは出来る。清矢郎もそのつもりで、あさぎの
前を歩き、彼女の方を振り返りもしないのだろう。もしかしたら
いっそ、あさぎにいなくなつて欲しいと彼自身思っているのかもしれない。

だがもう、流されるようにあさはその後ろに従っていた。途中
コンビニに入り、冷たい飲み物などをそれぞれに買くと、また無言
のまま清矢郎の家へと向かつて歩いた。

・・・・・・・・

時は遡り、神社の境内で――。

一体どれくらいの時間、唇を交し合っていたのか、清矢郎によ
やく解放されたあさは、くたんと力が抜けたように崩れ落ちた。
それを清矢郎の頑丈な腕が支え、彼は少し心配そうにあさぎを見た。
あさが見上げた清矢郎の額には汗が浮かび、髪も汗で濡れてい
る。そのままあさは彼の胸に軽く引き寄せられた。

既に火がついてしまった男女の身体は、もう収まる事が出来な
い。それを理性や常識だけで抑え切るのは、最も性欲が盛んな時期

の彼らには無理なことだった。

清矢郎の胸に凭れたあさぎの耳に、彼の速い鼓動が聞こえてきた。少女も身体の疼きが収まらない。どうにかして欲しい、もうどうなつてしまつてもいい、と今は自暴自棄のように思つていた。

とろんとした顔をしているあさぎを見ていた清矢郎は、彼女を支えてない方の腕を上げると肩口のＴシャツで額の汗をぐいつと拭う。その顔は、まるで剣道の試合で負けた時のようなとても悔しそうな表情をしていた。

「……つて、ざまあねえな」

彼は自分自身を貶すように吐き捨てた。

「偉そうなこと言つといて、結局俺なんてこんなもんだ。簡単に、自分に負ける。四年前と、何も変わつてない」

清矢郎とあさぎの眼が合った。彼はあさぎを睨むように見たが、やがて自嘲的な笑みを浮かべた。

「俺だつて単純にやりてえよ。将来も決まつてない、責任とれる年齢でもないのにな。——約束は絶対に守るけど」

そこで彼は大きなため息をつき、肩の力をふつと抜いた。それは先程罪の告白をした時のような、今まであさぎが知っていた彼にはない壊れそうな雰囲気を感じた。

「お前が思うほど、俺は強くねえぞ」

清矢郎はそこでまた、自己嫌悪を含んだような嘲笑を浮かべる。

「俺で、いいのかよ」

しかし、あさぎは清矢郎の眼を真つ直ぐに見て、迷いなくこくと頷いた。

今、頷いたことに嘘も後悔もないと、あさぎは思つていた。それでも彼の心が強いものであることを知っており、弱い部分を見せてくれたことは自分を認めてくれたようで、寧ろ嬉しいと思つていた。

からだ。

そして、少女はどこかで予感していた。

——もし今、自分が頷けば、彼は自分を、見てくれる。自分を、信じてくれる。その時彼は、自分の手に入るだろう——と。

清矢郎の眼が、また驚いたように見開かれる。あさぎはその表情を見て、自分の予感に確信を持った。

彼が自分を信じてくれた、彼の気持ちが自分に向けられた——その瞬間を悟った。そしてそれは互いにとって、心から救われる瞬間ともなったのだ。

「後悔、するかもしれないけど、いろいろ大変なことばかりだろうけど、どうしても、一緒にいたい。——せいちゃんは、悪くないきつと、『加害者』は、私だよ」

彼を守ってあげたいと思ったあさぎは、わざと悪戯っぽく笑って言った。しかしその言葉は、「違えよ」と清矢郎に一笑された。

「大事なヤツを『加害者』にする方が、よっぽどバカだ」

一体、どうすればよかったのか、どこから間違っていたのか、二人にはもう分からなかった。もしかしたら、何も間違っていないのかもしれないが。

掛け間違えられた釦ボタンのまま、それを直すことも出来ずに、二人は今日まで来てしまった。

そのまま育てば恋心へと成長したかもしれない、純粹で仄かな想いが、ほんのひとつの過ちで歪んでしまった。直らない歪みのまま、時が経ち、新しい答えを導き出さざるを得なかった。

それでも救われたい、幸せになりたいと、少女も、少年も、浅ましく渴望した。

その一縷の望みを捨てることが出来ずに、何を傷つけ裏切ることになるうとも、それを求めた。

——それが、この結果だ。

これでよかったのだ、とこの先、泣きながら笑うことしか出来ないのだろう。これからどうなるうとも、お互いのみがお互いを理解し合え、許し得るのだろう。

そうやって二人は大人になっていく。弱さと罪を互いの優しさで隠し、傷を舐め合って生きていく。

自分たちの選んだ道はそういうものだったと、何年も経った後に、二人はこの夏の日のことを思い出すのだろう。

そのまま無言で身を寄せ合っていた二人であったが、やがて清矢郎があさぎの首筋に張り付いていた髪に触れてきたので、彼女はぴくんと身を強張らせた。

——どうする？の彼の問いに、あさぎは何も言わず清矢郎のＴシャツを握り締める。彼もしばらく無言であったが、やがて自分の家に行くか、とあさぎに提案してきた。

確かに外でのこれ以上の乱れた行為は、いつ人の眼に触れるか分からず、社の中は不潔で痛そうだし嫌だと少女は思った。

それこそ彼の家は父親に出張が多く、母親も看護師であり、家に誰も居ないことから彼は一人で家事全般をこなしているのだ、とあさぎの母親が褒めていたことを思い出した。その無人の家に行くということが、どういうことか分かっている。

しかしあさぎは黙って頷いた。

——そして、今に至るのである。

.....

……遂に、来てしまった。

祖母の家に親戚が集まることになっていたのもあり、清矢郎の家は幼い頃に数回来て以来、あさは来たことがなかった。初めて入る殺風景な彼の部屋に居た。

ちよこんと部屋の真ん中に座っていたあさは、とにかく落ち着かないので、途中のコンビニで買ったペットボトルのお茶を飲んで落ち着いてみようとする。

部屋の主は、余りにも汗だくだったのでシャワーを浴びに行ってしまった。確かにキスの時も彼の汗があさにまで伝ってくるほどであったし、今日はよく晴れている上に最も暑い時間帯を三十分も歩いてきたのだ。彼は筋肉質なのもあり、あさよりも汗をかきやすいのだろう。

そしておそらく親切心で、あさぎにも浴室を使うかと尋ねてくれたのだが……こういう時はそうした方がいいのかもしれないが、少女はそれがどうしても恥ずかしく、断ってしまった。

しかしやはり汗臭いと思われるしまうだろうか、と心配になる。あさは汗をあまりかく方ではなく、冷房の効いた部屋では既に汗も引いているので、大丈夫かと思っているが……。とりあえず少女は持っていた制汗剤を、もう一度身体に吹きつけてみたりする。

——それよりも、本当に今からセックスするのだろうか、とあさは不思議な気持ちがして仕方ない。こんな地味な自分が、若干十六歳にして、こんな状況になるとは想像もしていなかった。

夕映や文芸部の美人部長、隣のクラスの人気のある女子……などの顔を思い浮かべては、華やかで女性らしい彼女たちならば、そういう経験があることにあさぎも納得がいく。

だがこんな肉体的にも精神的にも、「女」としての価値や成熟度が足りない自分なんかそんな経験をすると、自分でも違和感がある。

そして違和感だけでなく、罪悪感も少女にはあった。

誘ったのはあさぎの方からであり、このまま追い返されたらとても哀しいと思うだろう。だがやはり、いけないことをしているようにどこか落ち着かなかった。

更に終わった後、自分や清矢郎がどんな風に変化してしまうのか、その時どうすればいいのか、そのことも分からず不安になっていた。行為自体も好奇心や憧れがあるものの、最後まですればとても痛いと感じており、男性そのものに触れられたことがないあさぎは、やはり未知の世界を知ることには恐いと思っている。

どうすればいいのか、本当に逃げ出してしまおうかと、あさぎがおろおろしていると、眼の前を金魚が泳ぎ始めた。

それは自分がこれから穢れた行為をするというのに、赤く可愛い金魚に見えるのが少女には皮肉に感じた。

それが見えるということは、やはりまだ己の欲求は満たされておらず、「彼」を求めているのだとあさぎは再度自覚した。確かにここで帰ってしまったても、少女はきっと悶々し、ひとりで処理をするだけだろう。

大事な人々を裏切り、嘘をついて、欲に溺れようとしている自分への自己嫌悪に、少女はただため息をつく。そんな風に悩んでいる内にも、この部屋の主が戻ってきた。

それこそ清矢郎は色気も何もないＴシャツとジャージ姿で、タオルで濡れた頭をがしと拭いていた。そうは言ってもそういう姿

も祖母が亡くなってからは見ていないので、少女にとっては新鮮なものであったのだが。

第28話 まぐわい（前編）

その彼は六畳間の壁際に置かれたベッドにどっかりと座ると、ペットボトルの水を飲み始めた。

あさぎはそれを間近に見上げていたが、あさぎの方を見もしないで無表情に振舞う彼は、以前の態度と全く変わらず、本当に先程熱い接吻を交わした相手と同一人物なのかと疑いたくなってしまう。だが、もう状況は整っている。清矢郎の部屋の中を金魚が飛び交っている。

やがてどくどくとうるさい動悸の中、緊張して彼を見ているあさぎに清矢郎が眼を向けた。二人の眼と眼が合った。

「——来る？」

ペットボトルの蓋を閉めながらぶつきら棒に彼が言った。

あさぎは少し悩んだが、結局小さく頷いた。いっそ強引に襲い掛かってくれた方が覚悟つくのにな、と少女としては勝手な考えも抱いていたのであるが、それを清矢郎がしないのは、あくまで彼だけの欲求ではなくあさぎの意思を最優先したいという徹底した考え方なので、その気持ちは嬉しいと思っていた。

逆にがつついていっているような清矢郎ならば、こんな風に愛しく思わなかっただろうし、信頼もしなかっただろうと思っている。

少女はベッドの上に居心地悪く腰掛けると、躊躇いがちに彼に擦り寄っていった。

そして彼女はその広い肩にこつんと凭れてみた。まだ付き合ってもおらず、今日まで嫌われていると思っていた相手と急にこんな関係になるうとしているのが、不思議だった。しかし妙な安心感にも包まれていた。

元々彼に少し憧れていたのもあるが、今日の清矢郎とのやりとり

の中で甘い恋の言葉以上に、彼なりの真摯なものの考え方や、自分のことを真剣に心配し考えてくれていることなどが伝わってきたからだ。だからその温度と匂いが、緊張もするが少女には心地よく感じられた。

従兄や家族である大事な少年だが、その一線をもう越えてしまっている。此処に居るのは、あさが欲するただの「男」であつた。四年前、少女が彼に触れた時は、身内であることから嫌悪感もあつたが、あれから妄想の中で彼を何度も求めてしまつたり、先程の行為を終えた今は、もう嫌だと思うことはなかつた。

あさは彼からもう一度、本当にいいのか、と確認された。実際に痛い思いをするのも、何かあつた時に心や身体が傷つくのもあさぎの方であるのだ。

恐怖もあつたが、彼が自分のことを第一に考えてくれているだけで勇気が出て、余計に踏み込みたくなる。ちゃんと避妊してくれればいい、とあさは答えた。分かつてる、と彼はひとつ頷き――揺らめく金魚の幻影の中、再び先程の情熱が二人の間に蘇つた。

今度は抱き合つていても、彼の部屋の冷房が効いているので、汗ばむほどではなかつた。彼の腕に抱かれながら、頬や首筋、耳などへと唇を這わされた。そのような感触は、己の手のみで行う自慰では味わえない。

あさぎの胸は震え、息苦しく、恐くて逃げ出したくなつたが、相手の腕に封じ込められている。そしてどれほど恐くても、やはりその先に進みたいと思つてしまう。

日頃何気なく人に見せているこんな部分に、愛しい男が触れるだけでこれほど感じてしまうとは。それは少女にとって初めての経験であつた。

やはりどうしてよいのかよく分からず、あさは全てを相手に任

せていた。逆に彼がどこでこんなことのやり方を覚えたのか、あさは疑問であった。道すがら、彼も初めてであるということとはなんとなく教えてくれたものの……。

そんな思考もやがて少女の頭の中に靄が掛かったようになり、出来なくなる。甘い吐息がその小さく瑞々しい唇から漏れる。それを感じ取った少年が新たな動きを仕掛けてきた。

あさはいつの間にかベッドの上に押し倒され、清矢郎に覆い被さられていた。

彼もまた気分が昂じてきたのか、遂にあさぎの胸にその手を伸ばした。横になると小ぶりの胸が尚更目立たなくなるので少女は心配であったが、柔らかなそれは少年の大きな両手でかき寄せられるように揉みしだかれていく。

それは四年前に衝動的に触られた時とは全く違う、丁寧で確かな愛撫であった。

ジーンズの上にワンピースを着ていたあさぎだったが、やはりこうなってしまうならスカートでよかったのではないか……など思っている、ワンピースよりも先にジーンズに手を掛けられた。

脱がされることが分かり、あさは恥ずかしさに抵抗しようとしたが、ワンピースで隠れるかとも思い直し、結局大人しく脱がされてしまう。

先程からジーンズに染みが出来るのではないかと思うほど湿り気を帯びていたその股の間は、解放されたことにより、外気をひんやりと気持ちよく感じる。その感触が自身の局所の状態をかえって主張しているようで、あさはひとりで恥ずかしくなっていた。

既に彼を誘っている時点で、自分のこの淫らな本性は彼に悟られているのだろうが、この後の行為でもそれは次々と暴かれていく。しかしそれらはあさぎも驚くほど、全て彼によって受け入れられ

ていった。変なの、と彼女は捻くれたことを思うが、そんな風に自分を大事にしてくれる相手を益々愛しく感じていた。

だからこそ、恐いながらもその初めての快感に、あさは素直に身を任せることが出来るのだ。まだ未発達ながら、熱く火照っている少女の身体の敏感な場所が、徐々に捉えられていく。

自慰行為の経験がある彼女は、どの部位をどのように触られると自身が快感を得られるかを既に知っていた。しかし人に触られることは初めてであるため緊張感が全く違っており、自分では表面のみを甚振るだけであつたので、今まで触れたことのないような奥の場所までもを、激しい所作で触れてくることには驚きや抵抗もある。

あさは「いや、」と何度も口にし、首を振る。だが暴れてまでして逆らうことはしなかつた。戸惑いもあるが、期待もしているからだ。今まで自分の手で施していた刺激が、愛しい男の大きな掌であり、長い指であり、熱い舌に成り代われば、それがどれほどの快感に変わるのか――。

今まで考えないようにしていたが、本当は妄想の中で何度もそうされることを思い描いており望んでいたからこそ、彼女は彼に抱かれないと思つたのである。

そしてそれが期待以上であつたことは、少女の思わず上げてしまった甘く、高い嬌声から明らかであつた。しかし時には困惑と痛み
の悲鳴も交じり、少年を興奮させながらも心配させる場面もあつた。

薄いカーテン越しに外の淡い光が入る。あさは今や下着をつけていない状態で、ワンピースやＴシャツを捲り上げられていた。真昼間からこんな乱れた格好をし、何をしているのだろうかと情けなく思うが、この状況に少しばかり興奮している自分がそれ以上に嫌になつていた。

それでも、彼が欲しいと最初に思つた気持ちには変わらない。なのであさには己の全てを曝け出す覚悟はあつたし、彼もまた同様

に自分に全てを捧げて欲しいと思っていた。

しかしそうやって少しずつ脱がされ、快感を与えられているうちに、その羞恥心も粉々に壊れてくる。少女はベッドの上で、全ての衣類を取り払われ、生まれたままの姿にさせられた。

相変わらず無表情の彼に——ちなみに至近距離なら見えるらしく、既に眼鏡を外していたので、余計にじいつと自分を見下ろされているのが恥ずかしい。あさは身体を手で隠そうとしたが、その腕も相手に押さえ込まれていてどうにもできない。

標準よりもやや痩せており、お世辞にも凹凸があるとは言えない細く白い身体を、あさはほんのりと染めて横に擦った。

しかし彼はそんなことは気にしないと言うように、再びあさに触れてくる。その熱のある大きな掌がやはり心地よく胸が震えた。その唇に柔らかい肌に触れてくれば、自分では得られない感覚にぞくぞくし身悶えてしまう。

あさは清矢郎の髪を掻き乱して、彼の頭を抱き寄せた。そして既に上半身は裸となつてゐる彼の鍛えられた身体とも抱き合い、肌と肌を密着させ、その温度を感じ合う。

相手のぬくもりと重みを自分の身体と溶け合わせ、それを自分や相手が生きている証のように感じている内に、子供同士でこんな体験をしてよいのかとあさに疑問が沸き起こった。なのにそれはとても気持ちがよく、気が狂つてしまふそうだった。悦楽のうえに心から満たされる幸せを与えられ、これ以上幸福なことなど今はとても見つからない。

セックスっていいものなんだな……とあさは思った。これでは病み付きになつてしまふと思った。だからこそ子供には禁止しているのかな、とも。

ベッドの上で裸にされた少女は、男の身体の下で貪られながら、

熱い吐息と甘く蕩けた声を断続的に吐き出している。

これでは、「まな板の上の鯉」状態である、とあさぎはぼんやりと
思っていた。……いや、自分のことだから、金魚だろう。「まな
板の上の金魚」だ……。

あさぎがそんな下らないことを考えふと我に返った時、清矢郎の
頭の向こうの天井に、金魚がひらひらと泳いでいるのに気がついた。
確かに行為の間中、金魚はずっと自分たちの周りを泳いでいたが、
夢中で気付かなかった。

だがそれは、あの日見た金魚のように儼かな美しさはなかった。
四年前に初めて見た金魚は、現実から眼を背けるために見えたもの
であった。だからあれほど哀しげで美しく見えたのだらうと、あさ
ぎは今改めて気が付いた。

そこでふと彼女の視界が開け、金魚がよく見えるようになった。

それは清矢郎がその頭をあさぎの下腹部に移動させていったからで
あった。彼の視線が局部に注がれ太股に手を掛けられた瞬間、あさ
ぎは思わず焦ったように口走った。

「あの、ね、私——」

清矢郎がぴくりと反応し、下から少女を見上げた。

その目つきの悪い眼と、自分の眼を合わせてあさぎは言った。こ
んなのセックスの最中に言う言葉じゃないだらうと心の中で思っ
てはいたものの、咄嗟に口走ってしまった。

「金魚が、見えるの」

第29話 まぐわい（後編）

清矢郎はその白い肌から顔を上げると、裸の少女を見下ろした。そして、昔からこいつはこういうヤツだったよ、と心の底から実感し嘆息していた。もちろん、その黒い瞳に嘘はない。あさは絶対嘘はつかない純粋な子であると彼は知っている。

清矢郎には無論、金魚は見えていない。だが、あさは「見えている」らしい。

それは金魚がこの空間に存在するしない、という議論ではなく、「それを見えていると思うあさは」は、事実そこに居るのだから、後はそう思う気持ちごと彼女を受け入れるか否か、彼女自身を信じるか否か、なのである。

…… そのように少年は色々と考えてはみるものの、正直、この先をするのが嫌になってそんなことを言い出したんじゃないのか、自分が何かまずいことしたのか等々、心の中では密かに思い悩んでいる。その結果、やはりどのような表情を浮かべてよいのか分からず、清矢郎はあさを睨むように見つめることしか出来なかった。

そんな彼の男心を知らないあさは、最も恥ずかしい部分に触れられて己が狂い、正常な思考ができなくなってしまう前にきちんと言っておこうと、真っ直ぐに彼を見て全てを打ち明けた。

「あの日、せいちゃんに触られてから、見えるようになったの。最後に、おまつりですべてきたのと同じ金魚が……」

清矢郎はいつものように黙って、あさぎの不思議な話を聞いていた。

「それから、せいちゃんのこと、考えるたびに見えるようになったの。今も、また、見えてる……」

えっちな気持ちになると見えるの、などと言えるわけもなかったが、結局そういう時は清矢郎を愛しく思い、欲する時でもあったの

で、あさぎはするように言い換えた。

それを口走ったのは、不安に思ったからでもあった。清矢郎は自分に眼を向けてくれた、今はもう、自分を大事にしてくれている。それなのに――。

「どうして、まだ、見えるんだろう……」

この金魚があさぎの性欲の現れだとすれば、最初に見た時は、近親者に襲われたというショックから逃避するため、憧れていたその相手を性の対象として欲するように思考回路が変更された――彼女はそうに解釈していた。今となっては彼とこうしていることが幸せなので、それは哀しい過去だとは思わないが。

そしてその性的欲求は叶っている筈だった。その時金魚は消えるものだ、あさぎはずっと思っていた。

それなのに、金魚はまだ見えている。

――もう、十分ではないのか？ まだ彼と繋がっていないからか？ まだ自分は彼を欲しているというのか？

これほど幸せな行為をしているのに、まだ――。

あさぎは己の欲望の底が見えなくなり、自分でも自分が恐ろしくなってしまうていた。

あさぎの不安に揺れる瞳に、清矢郎も眉を寄せ心配そうな顔をした。彼女の言っていることはよく分からないが、あさぎが哀しむようなことは嫌だと彼は思っている。

よって彼女の言葉と彼にそれを言うということから、清矢郎はひとつの結論を導き出した。

「どっちにしろ、俺の所為なんだろう、それも。……俺がお前を、そんな風にしたんだろ。あの日に」

また清矢郎は彼自身を責めるような表情をしていた。そういつつ

もりではなかったあさぎは慌てて言った。

「こ、こういうのも含めて、責任、とってくれるの？」

「って実質、責任つつうよりは約束だけど、……とるよ」

ガキの分際で責任なんて口にするのはおこがましいよなと思いいながら、清矢郎はあさぎに誓う。

金魚が未だに見えることは不安ではあるが、この金魚たちと一緒に自分を受け入れてもらえることは分かり、あさぎはほっとした。そこで、もうひとつ尋ねた。

「私のこと、おかしいって思う……？」

まるで人形のように白く細い裸体を横たえ、対照的に黒くさらりとした髪をシーツの上に散らして尋ねる少女に向けて、少年はふつと苦笑した。

「今更。あさぎらしい」

その瞬間、あさぎの視界の中に金魚が増えた。嬉しい、と思ったからだろう。

あさぎは微笑んで、少年の広い背中に再び手を回し、二人は抱き合った。

——好き、と少女は初めて囁いてみた。囁いたそれは、思った以上に気持ちいい言葉であった。

一秒ごとにその気持ちが、少女の中で増えて確実なものになっていく。

きっと、最初から歯車は狂っていた。狂ったまま、この恋愛感情に似た新しい気持ちが生まれてしまった。だからこの気持ち自体、狂っているのかもしれないが、もうそれでもいいとあさぎは思っていた。

自分を認められて、求められる。自分も相手を認めて、求める。これ以上の幸せは、あさぎにはやはり見つからないのだ。

あさぎはまだ経験の浅い子供だが、まるで自分の世界が生まれ変わるくらいの喜びを感じられることなど、一生の内そうないことだろうと自信を持って言える。

寧ろこの瞬間に勝るものがないと感じるかどうかは、これから先も、ただこの瞬間をただ無心に信じていればいい。それだけのことである。

金魚が次々に増え、泳ぐ。

彼が欲しい、彼が欲しい——少女は渴望する。

あさぎからのもうひとつの告白が終わり、再び営みの続きは始まった。

甘い蜜で溢れかえった奥の奥まで、熱い舌で触れられ、指を挿し入れられる。初めての異物の侵入に若干痛みはあったが、それ以外は背筋がぞくぞくする快感に身震いしていた。

背を逸らし、黒い髪を乱して喘ぐ。身体はまだ未成熟でも、少女のその反応は妖艶な「女」そのものであり、少年を存分に満足させ、興奮させていた。

そして相手への信頼感と、彼女自身の性の経験から、愛しい男の腕の中で素直に身を震わせられる——恐怖と恥ずかしさはあっても、涙が出るほど嬉しいとあさぎは感じた。そんな彼女を抱く清矢郎もまた、同じ気持ちであっただろう。

そして最後の時が訪れる。

ようやく脱がれた彼のジャージであるが、彼自身全てを見せることに抵抗があったのか、それともあさぎにショックを与えたくなかったのか、おそらく両方の理由だろう。清矢郎もまた一糸纏わぬ姿になったもののあさぎには身体の正面を向けず、彼女も流石にじろ

じろと眼を向けられずにいた。しかしそれでも気になってちらりと見てみた「それ」は、あさぎの想像を絶する形状であり、あの狭いところに本当に入るのかと、泣きたい気分させられた。

それは清矢郎も理解しているようで、最後まであさぎを心配しており、初めから触れてもらおうとは思ってもしないらしい。あさぎはこの時自分が恐れるばかりで、そうした彼の気遣いにまた気付いていなかったのであるが。

それでも実際に痛い思いをするのは女性の方である。だが、あさぎは後に引きたくなかった。痛くても恐くても、彼の全てを手に入れ、他人とは成し得ない関係を成立させたかった。

避妊具を装着した清矢郎があさぎに覆い被さる。しかしいくら覚悟を決めても、その瞬間は、痛みのみがあさぎの全てを占めた。

悲痛な声に清矢郎は切ないような顔をするが、「やめないで」とあさぎは顔を顰めて首を振る。シーツを掴んでただ耐える。どうすると問われながらも、最後までして欲しいとあさぎは息も絶え絶えに要求した。

ぎこちなく動く清矢郎。初めてのそれは、ただ痛くて「好いもの」とは思えなかった。それでもあさぎは、彼を手に入れた、彼に手に入れたというこの事実が欲しかった。

あさぎは涙を零しながら清矢郎の顔を見ようとしたが、眼を開けると、彼女の視界は真っ赤な金魚に覆われていた。これは痛みによるものだろう。痛みから逃れるためと、快楽が伴っていないのでそれを求めて、あさぎの深層心理が具現化されているのだろう。

——やめて！ 私は彼を見たいのに。私と繋がっている時の、感じている彼の表情が見たいのに！！

最初に唇を交わした時とは、いつの間にか逆のことを思うようになっていたあさぎは、ぼろぼろと泣きながら首を振る。

——痛くてもいい、今は現実がいい。今は現実のあの人をもっと感じていたい！

あさはそう切望していた。

しかし彼と繋がっているはずなのに、どうして金魚が見えるのだろうか。

清矢郎を手に入れ、彼と結ばれ、あさは満たされる筈だった。それなのに、どうして――。

気がつくにあさはその姿勢のまま、清矢郎に唇を塞がれていた。そして唇を軽く吸われた後、頬の涙を舐め取られた。清矢郎は涙を流すあさをただ切なげに、心配そうに見つめていた。

清矢郎の顔が間近に見える。至近距離ならば、金魚に邪魔されることはなかった。あさは必死で裸の彼に縋りついた。

――傍にいて、離れないで、と子供のようにせがんだ。それを抱き返し、安心させるように彼はあさぎの頭を撫でてくる。

繋がったままの姿勢であるので清矢郎の息は時にとても荒く、何か込み上がって来るものを堪えているようであったが、あさぎのことを想ってくれていることは伝わってきた。

寧ろ彼自身が、快感を得る代償にあさを苦しめていることに罪悪感を抱きつつも、身体はそれに反して想像以上の甘美な刺激に悶えているような、それを苦しむ相手に必死に隠しているような、そんな風にも見えた。

だからあさは耐えた。

今度は彼にも悦んで欲しい、自分の身体が少しくらい傷ついても、自分の肉体で彼を性の悦びに導きたい。心も一緒に求めてもらえるならば、己の身体を滅茶苦茶にされても構わない――そう思っていた。

相手の一層の動きに、更なる痛みと金魚の群れが彼女を襲う。その隙間からどうにか清矢郎の表情を確かめながら、あさは様々な格好で彼を受け入れ、蹂躪されていた。

それら全てが最高潮に高まった時、彼の呻き声が遠くで聞こえた

と思った直後――、砕け散るように、初めての行為はようやく終わりを告げたのだった。

清矢郎に身体を離され、疲れ切った様子でベッドに横たわったあさは、ぼんやりと未だ現れる金魚の群れを見ていた。

その身体の下には、まるで赤い金魚のような小さな染みが出来ていた。

第30話 少女と金魚へ完結

終わった後の清矢郎もまた、無口であるが優しいものであった。

男性の中には事後に急に冷たくなる人もいると噂を聞き、それを恐れていたあさは、初めてを捧げたのが彼のような男でよかったと、心底思う。

シーツを汚したことはかなり恥ずかしいが、彼に後始末をお願いすることになってしまった。少女はそれを見ないようにしながら、少しばかり彼の腕の中で休んだ後、服や髪を整え、家に帰る準備をする。

互いに服を着て交わったばかりの彼の部屋を出れば、そこはもう「日常」の始まりであった。本当にこれから、「約束」は守ってもらえるのかと疑問に思うほど、あっさりと元の空間に戻ろうとしている。

不安に思ったあさは玄関先でまた求めるように清矢郎のTシャツを引っ張ると、二人は軽く唇を重ねた。

また会いたい、またメールすると約束を交わし、駅まで送ろうとしてくれた彼を、周囲に知られてしまうからと断り、あさは清矢郎の家を出たのであった。

家に帰ったあさは、家族に知られることがとにかく恐ろしく、内心では冷や汗をかきながら懸命に、なんでもないように演技をしていた。

しかし浴室でひとりになり、自らの状態を確認すれば――、脱いだ下着は粘液が固まった状態でこびりついており、それを見てはぞくりとし、彼に舐られ痕をつけられた裸を見ては、処女喪失の現実に恥ずかしくなり、全てを忘れ、洗い流そうと湯船に入る。

だが表面的な汚れは洗い流せても、穢され、傷つけられた内部は

もう元には戻せない。染みる陰部がそれをしつかりと証明している。少女は今までの自分と何も変わらないのに、今までの自分には戻れないというのが、不思議な気がしていた。

風呂から上がり、あさは暗い部屋のベッドの上に倒れ込む。

遂にしちゃったんだ……、とドキドキと胸が高鳴り眠れないことを、熱帯夜の所為にする。

こんな暑い夜にも、赤い金魚は涼しげに闇を泳いでいる。それを見ながらあさはまた疑問に思う。

——彼とは結ばれたのに、私はまだ「何」が足りないと思っているのだろうか？

.....

夏休みが始まった。あさは受験生の清矢郎の邪魔をしたくないと思うものの、つい彼女の方からメールを送り、会う約束もしてしまう。

しかし彼曰く、会えなくて苛々しているのも精神衛生上よくないし、勉強に集中出来ないとのこと。いつの間にか、彼も自分を求め始めてくれたのかと思うと、あさはまた単純に嬉しくなる。

初めてのセックスの次に会った時は、前にあった出来事や乱れた自分を思い出して、少女は恥ずかしさに顔が熱くなった。少し気まづい空気もあった。

金魚がそんな二人の間を舞っていた。

まだ高校生であるし、毎回セックスをするような付き合いではなく、何処かへ遊びに行くくらいの時は、キスがせいぜいでそれ以上

のことはしなかった。

あさぎとしては彼の家に入り浸る真似も、家族に知られてしまいそうで恐くて出来ない。

それでも、何回かに一回は物陰で、少し抵抗があるけど公衆トイレで、時々彼の家で——と、接合まではしなくても、局部を互いに弄り合い、覚えてたの性を貪ってしまう。

少女は自分に被さる男のその背後に、赤い金魚を見ていた。

生理は順調に来ていたので、危険日には注意しながら、二人は夏休み中にもう一度最後まで結ばれた。

それはまだあさぎに痛みを感じさせるものの、前よりは痛くないと思えた。体位を変えれば少し「いい」と思える瞬間もあった。それでも、金魚はまだ見えた。

二人ははたから見れば仲のよい真面目な恋人同士に見えるだろう。順序は逆だが、実際、彼との関係が始まった日々は、時々思い通りにいかずあさぎが拗ねることもあるが、とても楽しいと思えるものだった。

それなのに、何度結ばれても、何度絶頂を迎えても、拙い性の営みの際に、少女の視界に赤い金魚は現れ続ける——。

.....

九月になり新学期が始まって早々、あさぎの高校では文化祭が行われた。文化祭では文芸部は部誌を印刷所に発注し、売り物として販売するのが恒例である。その原稿の締め切りは、夏休み中だった。

あさぎは夕映と二人で、当番の時間帯に販売係をしていた。販売場所は中庭を割り当てられている。

部員たちも入稿の際に他人の原稿を少しは見ているが、やはり本になったものをしっかり読みたいと、今日初めて読んだという部員も大勢いた。

あさぎや夕映も暇つぶしもあり、その部誌を捲っていたが――、
「おっつかれさん！」

と二年生の美人文芸部長がやってくると、クラスの出し物だとかいう大きなかき氷を二人の前にひとつ、どん、と置いた。

「すみませんー、ありがとうございますー」

二本刺さっているストローのうちの一本を手にとると、夕映がそう言っただけで早速涼しげな音を立てて食べ始める。

そこで部長の彼女は、「あ！」と気付いたようにあさぎの方を見ると、その綺麗な指であさぎの手をぎゅっと握り、突然こんなことを言ってきたのであった。

「今回の山本さんのやつ、すごよかったよ！　なんかすごく、伝わってくるものがあった！」

あさぎはぱかんとして、その美少女を見上げていた。

なんのことが分からなかったが、やがて今回の部誌に載せた詩のような文章のことであると分かり、あさぎは、かあつと顔を赤くした。

「そう、ですか……？」

「うん、気に入った！　また頑張って書いてねー！」

あさぎが「ありがとうございます」と消え入りそうな声でお礼を言つと、賑やかな部長はぶんぶんとあさぎの手を振り、颯爽と消えていった。

「よかったじゃんー」

夕映はあさぎにかき氷を渡すとにやにやと笑っている。その含みのある言い方に、あさぎは少し頬を膨らませて彼女を睨んだ。彼女にはあの初めて結ばれた日の事を少し話したのだ。身体のこと、相談したいこともあったから。

その時の経験を言葉にした作品なのだと、事情を全て知っている人には読めば分かってしまうのかもしれない。

心が震えたこと、身体を感じたこと、人と想いを重ね合わせたこと――その想いを言葉にしてみた。

それは緋色の檸檬水に溺れた、一匹の金魚の話だった。

夕映が男友達に呼ばれて席を立ったので、あさぎがまたひとりで座っていると今度は、

「暇そうだなあ」

誰かにもらったのか、水ヨーヨーをぱしゃぱしゃと叩いている荒芝が現れた。

密かに清矢郎にメールでもしようかななどと思っていたあさぎは、「ええ暇です」と言いながら、携帯電話を隠すように閉じた。

「でもよかったじゃねえか、お前さんの、好評で」

荒芝にも言われ、あさぎは驚いたように彼を見上げた。

「中村がえらく褒めてたぞー」

中村とは先程の部長の苗字である。確かに自分が憧れている人に褒められることは、素直に嬉しいものだ。

そして何よりも、自分の言葉が、想いが、人の心を少しでも動かしたというのは、何の力も無いあさぎには初めての経験であった。後から考えると、徐々にじわりじわりと嬉しくなってきた、ちっぽけな少女は少しだけ自分自身が好きになれそうな気がしていた。

こんな発見は、今までの自分にはなかった。こうして彼と、時と一緒に積み重ねていくことで、何気ないことから世界は広がっていくのだろうか。

こんな自分も変わっていきえるだろうか……。そう思うと、あさぎの心が性欲とは全く別の心地よい期待に高まってくる。

「まあ、上手くやってくれ。……でも、子供は作るなよー」

荒芝はそう言つと、また水ヨーヨーを叩きながら笑って立ち去っていった。

「……」

何の話よ！このセクハラ親父ー！！とあさぎは叫びたくなり、思わず机に手をつけて立ち上がった。

自分が過去、悶々と悩んでいたことと、その相手が清矢郎であることを荒芝は知っているから、もしかしたら彼もまた、あさぎの文章から「何か」を察したのだろうか。

そこであさぎは、はあ、とため息をつく。

自分の想いはそんなに人に分かるほど溢れ出しているのだろうか
とふと悩んでしまう。それこそ、幻影を見るほどに、強く、強く――

どれほど彼と身体を重ねても、まだ金魚は見えるのは、何故だろうか。

それはこの先にもっと、それこそ失神できるくらいの極上の快樂が存在するからだろうか。それを自分のこの淫らな身体は求めているのだろうか――。思わずそう想像し、あさぎはそんな自分に戦慄すら覚えそうになる。

自分が求めているものは、一体何なのか？　こんな自分は、おかしいのだろうか？

こんなこと、やはり彼に言えるわけもない、と少女は切ない想いにひとりで首を振る。

——自分の秘めたる、激しく狂気的な情欲のことなど。

その時、メールの受信メロディが鳴った。携帯電話を開けてみると、珍しくこんな時間に清矢郎から届いていた。

脅迫のように告白して結ばれたという負い目や、大人っぽい彼への劣等感があさぎにはあるので、こうして彼から自分を気にしてくれるのは今でもやはり嬉しい。

少女はメールを確認して顔を綻ばせ、水色の携帯電話を音を立てて閉じながら、秋の澄んだ色になった高い空を見上げた。

綺麗な青空の下に、赤い金魚が今日もぷかぷかと浮かんでいた。それを見た少女の身体に、じんわりと熱い何かが灯った——。

～ END ～

第30話 少女と金魚へ完結（後書き）

この「幻影金魚」は春エロス2008（18禁にならないぎりぎりの官能競作祭り）という素敵な企画様に合わせて書きましたものです。

文章につきましては問題点が多々あり、執筆途中に叱咤や苦情も頂戴しましたが、それでも途中悩んでいた自分にたくさん読者様から勿体無いほどの、そして本当に温かいご声援を頂戴し、どうにか完成させることができました。全ての皆様に、改めて心より心より感謝申し上げます。

また企画参加作者様や主催者様にも、大変お世話になりました。（特に主催者様には途中、何度も相談させていただきまして、暖かい叱咤激励のお言葉ありがとうございました！）重ねて深く御礼申し上げます。企画自体の投票結果についても拙作にも関わらずご投票くださった皆様へ、感謝御礼申し上げます！いくらお礼を言っても言い足りません…。

さて、「幻影金魚」は行為よりも過程で悶々と悩む様に自分がエロスを感じるのでこんなじれったいお話となりました。ギリギリな表現ということで官能的を目指しつつも18禁にならないよう、またファンタジックなものが好きなので金魚を使ってみたり、どこかライトにしてみたり、と色々楽しんで書いてました。

またラストについてはあえて読者様に想像していただく形で終わリたかったのと、このお話では「目覚め」までで止めたかったのでもしかしたら少しすっきりしない読後感になってしまったかもしれませんが、それも自分なりのエロスの表現と言うことでお受け取りいただけましたら幸いです。

こちらは長年暖めてきた物語を書き上げましたので、ダメなりに

自分で満足のいく執筆が出来たのだと思います。今後何かしらは常に書き続けていきますので、この作品ほどのイマジネーションは浮かばないかもしれませんが、また別の作品がお目に留まりましたら嬉しく思います。

このお話には短いですが続編があります（完結済です）。続編では清矢郎視点で悶々と悩ませていますが、本編では軽く触れただけの彼の過去や心境、2人のその後のらぶらぶな様子、2人の未来について書きました。あとがきの下に個人サイトへのリンクがありますので、よろしければ引き続き読んでやってくださいませ（目次に直リンクがあります）。

更にこれらの本編、続編の内容を含めてもっとしっかりと2人の「恋愛」部分を書きたいと思い、リメイク編を別に連載しております。こちらは目覚めで終わるのではなく、その先の数年間、2人が成人して結ばれるまでを書く長編となる予定です。「幻影の金魚は緋色の檸檬水に溺れて」というタイトルですので、興味持っていただけでしたら作者ページまたは個人サイトからご覧くださいませ。

それでは。ここまで読んでくださった皆様、誠にありがとうございました！

もしものもしもでコメントいただけます場合は、拍手メッセ（非公開／ブログでお返事）、または作品最終ページの感想欄（公開／感想欄でお返事）をご利用くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7441d/>

幻影金魚

2011年10月4日12時13分発行